
その少女、につき

rockless

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その少女、 につき

【Nコード】

N7114U

【作者名】

rockless

【あらすじ】

さて に入るのは何なのか・・・さあ皆で考えよう（文字数はの数とイコールではない可能性があります。そして作者も答えがわかりません）

プロローグ1話（前書き）

プロローグは回想風で1人称（当時の主人公）3人称（語り手としての主人公、時間軸的に本編開始前夜くらい）が入り混じってます
読みにくいかもしれませんが、お付き合いください

内容は・・・そういうことにして置いてください、という程度のも
のです

ブローグ1話

物心付いたときから、私の両親は仲が悪かった

家には人が私含めて3人いるとは思えないほど全く会話が無く、夫婦仲は完全に冷え切っていた

家族？なにそれ？ウチはただ1つ屋根の下で一緒に暮らしてるだけの他人・・・

小学校の運動会や参観日も両親が来たことは無かった

中学に上がった頃から、両親が言い合いをするようになった

その様子を見て私は、ああこれは離婚秒読みですね・・・っとテレビでちよくちよく聞く言葉を思っていた

人が言い合いをしてるところというのは傍から見ると、迷惑でしかなく、家にいたくなかった私は学校帰りに寄り道をするようになり・・・

そして、私はあの人に出会った・・・

中学1年の冬、12月のある日のこと、学校帰りに適当に歩いたあと、公園のベンチで時間を潰してしていると、いきなり男の子に写真を撮られた

いきなり撮られたことに対する文句を言うと、その子はシドロモドロになりながら言い訳を始めた

なんでも、ずっと欲しかったデジカメがやっと手に入って、早く1枚撮ってみたいと外に出たはいいが、日没間近のこの時間、特に被写体になりそうなものは無い、なら適当に撮ればいいのに、と言ったら最初の1枚はこだわりたかったとか・・・

謝りもしないし、あー言えばこう言うし、何こいつ・・・ム力付くんですけど？

でも・・・こんな風に同じ年くらいの人と話すのは久しぶりな気がする・・・

両親の関係を見てて、もうすぐ離婚してどっちか引き取られて転校とかするんでしょうね・・・って思ってた、なら友達とか作る意味ないよね・・・なんて思ってたずっと1人でいたから・・・

次の日に学校で下駄箱を開けたとき、1通の封筒が入っていた

友達いない、暗い、それに容姿が良いわけでもない・・・そんな私にラブレター？ああこれは悪戯か、私もとうとういじめの的になったんですね・・・なんて思いながら封を開ける

中に入っていたのはあの時に撮られた、私が写った写真・・・

暗くなりつつある公園で私が1人ポツンとベンチに座ってる写真・・・見た人が、何この人可哀想、と同情を誘う1枚だ。なるほど、これをばら撒かれなければ何をされても親や教師に言っくなよってことですね・・・私としては、こんなのはばら撒かれても正直どうでもいいんですけど・・・

まあいいです、あちらさんはこれをネタにどんな要求をするんでしょうかね・・・封筒にメモは入っていないから写真の裏に書いてあるかな・・・つと写真の裏を確認すると・・・

『昨日は悪かった。写真はやる 1 - 2 土屋康太』

とだけ書かれていた

私は思わず、はあ？つと首をかしげた。昨日の今日でなんで私のクラスと名前、そして下駄箱の位置を知っているんだらう・・・？

そして・・・

『悪かったと思うなら撮らないでください。こんな写真いりません

つと写真の裏に書き足して、クラスと名前を頼りにその人の下駄箱を探して入れた

今にして思えば、なんであの時写真を返してしまったんでしょう・

そのまま捨てていれば、あんなことにはならなかったのに・・

プロローグ1話（後書き）

主人公設定はプロローグが終わって、1話を上げた次に入れます

ブローグ2話

それから数日間、私の下駄箱には毎朝1通の手紙が入っていた

差出人の名前は全て1年2組の土屋康太という男子からで・・・

内容は覚えていない・・・私はそれを適当に読んで、その場で裏に適当に返事を書いて相手の下駄箱に入れていたから・・・

返事が来たことが嬉しかったのか・・・いやあれは返事と言っていないのか・・・

正直鬱陶しかつたかったけど、なぜか毎日ちゃんと返していた・・・

そして2学期も終わり、冬休み・・・

部活をしてない私は学校に行くことも無く、今までに感じたことが無い妙な寂しさを感じながら年末年始を過ごしていた

・ 1月4日、そろそろ参拝客も減ったかな、と思い私は初詣に行く・・・

狙い通り、参拝客も疎らで、そんなに時間もとられずに初詣が済む、このまま家に帰る気は起きないので適当に町をブラブラと歩く・・・

そして最後に・・・何気なくあの公園のベンチに向かった

冬の夕方、空は晴れてるわけでもなく、見回すと最近降り積もった雪が溶け残っている・・・

公園には誰もいない・・・当たり前か。こんな寒いんだし、普通なら家から出たくないよね

ベンチに座り、はあくっと思を吐く・・・吐いた息が白くなって・・・消えていく

あの日、この場所であの人と初めて会って、言葉を交わして・・・ちよっと手紙のやり取りしただけなのに、なんでこんなにあの人のことを意識してるんでしょう・・・？

あれ？そういえばちよっと前まで見ていたドラマで、ヒロインが今の私と似たような状況だったことがあったような・・・それだと確か、ヒロインはその気になっている人のことが・・・ってことは私はあの人のことを・・・いやいや、ないないありえないって・・・

はあ・・・帰ろう・・・

頭を振りながら立ち上がろうとしたとき、カシャッとデジカメのものとされるシャッター音がした

私はその音が聞こえた瞬間、涙が出そうになった

でもそれをグツと堪えて、文句を言おうと音のほうを向くが・・・

あの人の姿が視界に入った瞬間、私の抵抗をあっさり突破して、涙が次々に溢れてきた

ついさっきありえないって思ったばかりなのに・・・会えただけで泣いてしまうなんて・・・

急に泣き出した私を見て、あの人がアタフタしながら私を気遣う

勝手に撮って悪かったと謝ってきて、それでも涙が収まらない私を見て、どこか痛いのか？とか・・・そんな慌てたあの人の様子が段々と面白くなってきた、私は・・・

大丈夫・・・ただ、自分の気持ちに気付いただけだから・・・あなたのことが、好きなんだってね

つと涙を流しながら笑って、あの人に告白した

プロローグ2話（後書き）

ペース早めですが、そうじゃないといつまでたってもプロローグが
終わらない・・・

プロローグ3話

あなたのことが、好きなんだってね・・・

それを聞いたあの人はポカンとした表情になって・・・徐々に顔が真っ赤になっていった・・・

拒絶されたらどうしようとか、思わなかったわけじゃないけど・・・
今なら拒絶されてもまだ大丈夫だと思った・・・また今までの、1人に戻るだけ・・・だから・・・

ねえ・・・私の恋人に、なってくれないかな・・・？

私はしっかりとそう言いきった

それから、どれだけ時間がたったでしょうか・・・？10分？1時間？それともまだ1分くらい？

お互い次の言葉なり行動なりに移るきっかけを失い、立ち竦んでいる
いつの間にか日が完全に落ちて、気温が一段と下がり、私はくしゃみをする

ずっと外にいたから風邪を引いたかもしれない・・・返事は学校でも聞かせてと言って、私はその場を去った

2日後が始業式だからこじらせるわけにはいかない・・・家にいたくないから・・・

2日後・・・1月6日、3学期の始業式の日

私はいつもよりかなり早めに登校する・・・

なぜなら私とあの人の学校でのやりとりの方法は、下駄箱に手紙を入れ合う、昭和チックな方法しかないから

だから1分1秒でも早く学校に行って、答えが知りたい・・・

正直早く来すぎた・・・

学校に着き、下駄箱に行くと、ちょうどあの人が私の下駄箱に手紙を入れようとしてるところだった

なんでしょう？自分の下駄箱に何かを入れてるところで鉢合わせって・・・すごい気まずい・・・

だからといって戻るわけにもいかないので、そのまま下駄箱、そし

てあの人に近づいていく

するとあの人が下駄箱に入れようとしていた手紙を私に渡してきた。私がいつもその場で読んでいることを知っていたんですね・・・

封を開けて中を見ると・・・

『今度はちゃんと写真を撮らせてください』

つと書かれてあった

・・・えーつと・・・これはどっちなの・・・？

そう聞くと、あの人は呆れるようにため息をついた・・・

・・・察しが悪くてごめんなさいね・・・はつきりと、はいかいいえで答えてくれないとわからないのよ・・・

と私は少し拗ねながら言う・・・

そんな私をあの人は後ろから抱きしめてきて・・・

・・・好きじゃない相手にこんなことができるか・・・

つと耳元で囁かれた

いくら察しが悪い私でも流石にこれで答えはわかった・・・けどなんかカッコつけてるのが気に入らなかったので、もう1回とぼけてみる・・・

・・・っで？イエスなの？ノーなの？どっちなの？

嬉しい気持ちを声に出さないように低いテンションで聞いた

するとあの人がスツと私から離れた・・・

怒らせちゃったかな？っと思い、謝ろうとして振り向くと・・・

背を向けてた私に、何をしようとしていたのか知らないけど、あの人の顔が近づいてきていて・・・

まあいつか・・・変にからかったし、お詫びの意味も込めて・・・

それが、私のファーストキスでした

プロローグ4話（前書き）

たったこれだけしか書いてないが気付いたよ・・・

自分にシリアスは無理って・・・

ブローグ4話

それからの数ヶ月は今まで生きてきた中で1番幸せな時間だった

バレンタインやホワイトデーといった恋人関係のイベント・・・

そして春になって、暖かくなってからは、手紙の言葉どおり写真を撮るためにいろんな場所に行ったり・・・

春休みやゴールデンウィークには家にもお邪魔させてもらった

でも、そんな幸せも半年足らずで終わってしまった・・・

中学2年の6月、両親が最後の一線を越えた

家の中を飛び交うお皿や小物の数々・・・

お互いの口からは、離婚だの死ねだの・・・中学生から見ても低レベルな言葉・・・

これはいよいよ末期だなと思いつつ、私は家を出た

行き先は・・・あの人の家・・・

私の家のことは・・・始めに全部話しておいた。後から知って隠してたとか言われなくなかったし、両親が原因で別れるにしても早いうちなら諦めもつくし、私も傷付かないだろうって思ってたから・

あの人の家に着き、呼び鈴を鳴らす・・・ここまで歩いてきてるとき、途中で雨が降り始めて・・・少し寒い

あの人のお母さんが玄関のドアを開けて、あらあら・・・っと少し慌てながら、ずぶ濡れの私を家に入れてくれた

連絡もなしに、こんな格好でやってきた私を、嫌な顔をせず、何も聞かずに入れてくれる・・・凄くいい人

私の事情を聞いても、そう〜大変ね〜と言だけ哀れみの言葉の言ったと思ったら、でも女の子ならお嫁にいつちやえ関係無いわよね。このままうちの子と結婚しちやいなさいな。なんて言って、あの人との交際を認めてくれた・・・

それを聞いたとき、私は母親の優しさに初めて触れた気がして・・・気付いたら泣いていたっけ・・・

家に入れてもらって、このままだと風邪を引くからとお風呂を勧められ、お言葉に甘えて、お風呂に入る・・・上がると下着を含めた

着替えまで用意してくれていて・・・何であるのかな？っと思い尋ねてみたら・・・いつかこんなことがあるかもしれないと、コッソリ用意してたと言った

さらにあの人のお父さんがもう遅いからと泊まっていくように言ってきて・・・ホント・・・この家の人みんな・・・涙が出るほど優しい・・・

・ そんな優しさに甘えていた私に天罰が下るのは当たり前のことです・

今夜を最後に私は・・・2度とあの人の前に立てなくなってしまう・・・

プロローグ4話（後書き）

うん、まあ・・・康太の両親の設定は・・・ARIAのグランマ級に優しい人だと・・・

そういうことにして置いてください・・・

プロローグ5話（前書き）

うん・・・まあ・・・康太も最初からあの体質じゃなかったと思うんだ・・・

そういうことにして置いてください・・・

プロローグ5話

血塗れのあの人・・・

原因は私・・・

私は・・・あの人を殺しかけた・・・

あの人の両親の勧めで、泊まっていくことになった私

そういえば、あの人の家にいるのに、まだあの人に会ってない・・・

もしかして、私に来てること、知らないのかな・・・？

なら・・・突然現れた私を見て、あの人はどんな反応をするのかな・・・

ビックリして・・・そのあとで・・・喜んでくれるでしょうか・・・

あの人の部屋の前に立ち、コンコンっとドアをノックする

・・・反応が無い

その後、数回ノックを試みるもやはり反応が無い

仕方なく、少しドアを開けて中を見る

あの人の姿は家具で死角になっていて見えないけど、パソコンの音とカチツカチツとマウスを動かす音が聞こえる

ああデジカメの写真でも整理してるのかな・・・あの人、集中すると周りのことが一切入らなくなるみたいだから・・・

私は悪いかなと思いつつも勝手に部屋に入った・・・

もし、このとき部屋に入らずにいたら・・・

私は今でも・・・あの人の隣にいたのかもしれない・・・

あの人の部屋に入り、

・・・もう、いるなら返事してよ・・・

つと不機嫌そうに言う。するとあの人がビツクリして飛び上がり、カチカチカチと凄いい速さでマウスを操作した

・・・どうしたの？そんな慌てて・・・

つと聞くと・・・

・・・い、いや、なんでもない・・・

つとあの人が首を横に振りながら答える。声が裏返ってるのになんでもないか・・・まあいつか、追求はしないであげよう

・・・な、なんで、ここに・・・？

相変わらず裏返った声でそう聞いてくる。それに私は、いつものあれ、と答える

・・・ああ、そっか・・・

それを聞いて、あの人が悲しそうな顔をする。なんであなたが悲しむんだか・・・

・・・そ、それより、今何してたのっ？！

・・・うえ？！あ、いや、その・・・

話を変えようとするが、変え方を間違った・・・ついさっきそれは聞かないと決めたばかりなのに・・・もう1回、話題を変えるのも不自然すぎるので仕方なく・・・

・・・あ、まさかエッチなものでも見てた？男の子だもんね

つとからかうように聞いた

もちろん100%冗談のつもりで・・・ただ、この暗くて重苦しい空気が変わればと思って言った言葉だった・・・

でも・・・

カアアアつとあの人か顔を赤くして、ハッ和我に返ったように私から目を逸らした

・・・あ、あれ・・・？もしかして・・・凶星・・・？

気まずい空気の中、なんと例えば・・・っと思いつながらも、仕方なく確認する

・・・そんなことは・・・ない・・・

蚊の鳴くような声で否定するあの人・・・

・・・じゃあパソコンの画像フォルダ、見ていいよね？

・・・見てました。ごめんなさい。だからそれだけは・・・

私がパソコンの前に立ち、マウスを持ってそう聞くと、あの人が早口で謝ってきた。非難するつもりは無いんだけど・・・さっきの重苦しい空気がなくなっただけ、いつか・・・

今思えば、このときの私は、初めて恋人の家に泊まることになって、思考がおかしくなっていたんだと思う・・・

それで次の話題にでも移ればよかったのに、調子に乗った私は聞いてしまった・・・

・・・もしかして・・・私のことも・・・そういつ目で見てたり・・・する？

プロローグ 6 話（前書き）

これ消されないよね？

プロローグ6話

・・・もしかして・・・私のことも・・・そういう目で見てたり・・・する？

椅子に座ったまま頭を下げてるあの人に、私は恥じらいながらそう言う・・・

それにあの人は頭を上げて、ブンブンと首を振って否定する

・・・本当に？

そんなあの人の態度が面白くて、さらに調子に乗った私は、目線を合わせるように、そしてキスする少し手前くらいまで顔を近づけて、からかうような口調で言う

ここで私は自分の格好についてすっかり忘れていた・・・私は今、あの人のお母さんが用意してくれたパジャマを来ていて、サイズが私のピッタリのサイズより少し大きく、襟回りがゆったりしている。そして、椅子に座ったあの人の顔に、立っている私が目線を合わせようとすると、当然前傾姿勢にならざるを得ないわけで・・・

結果・・・

あの人の視線は、私の顔より少し下・・・パジャマの襟元から見える私の、寄せようが上げようがAの域を出ない私の胸の辺りに・・・

・・・はあゝ

そしてあの人がため息をついた・・・物凄いバカにされた気分・・・

・・・って、やっぱり、そういう目で見てるんじゃないっ!!

顔を離して腕で胸を隠すように押さえがらそう言う

あの人は、いや、ちがつ!!っ慌てて否定する

・・・しかもため息って!!どうせ私は貧乳ですよーだっ!

そう言っつて、プイっが入ってきたドアのほうを向き、私は部屋を出ようとする

あの人は、ごめんごめん、と謝りながら椅子から立ち上がり、私を引き止めようとする

ドアに手をかけたところで私の真後ろに来ていたあの人に、私は急に振り返り、それに驚いてる隙を突いて、あの人をベッドに押し倒し、その上に馬乗りになった

・・・ねえ・・・胸っつて、好きな人に揉んでもらうと大きくなるっ
て言うよね・・・試してみない?

たぶん、このときの私は調子に乗って暴走もしてたけど・・・それを同じ以上に、はつきりとあの人のつながり(絆的な意味)を感じたかったんだと思う・・・告白の返事のとあのあれ以来、私とあの人は手をつなぐくらいで、抱きついたり、キスしたりなんてことは一切していなかった・・・

それを心のどこかで寂しいと感じていて、そんな寂しさが少しずつ

溜まっていった・・・この日、溢れてしまった・・・

・・・どうせだし、最後までしちゃおつか・・・

翌朝、目覚めた私・・・

場所はその人の部屋の、その人のベッド・・・

隣にはもちろんその人がいて・・・

私とその人は何も着ていなくて・・・

昨夜の自分のしたことを思い出して、うわぁ・・・なんてバカなことをしたんだ・・・と軽い自己嫌悪になる・・・

その人の両親もいたのに、何も考えずに・・・声とか聞こえてたんじゃない・・・どうしよう・・・

そして頭の中が不安でいっぱいになる・・・

でも嬉しさや幸福感も少しあって・・・

・・・おっと・・・今日も学校はあるんだ・・・何も持たずにこっちに来たから一旦家に帰らないと・・・

幸福感に浸るのもそこそこにベッドから出る・・・その人はまだ寝

ているので、起こさないように静かにそーっと・・・そして脱ぎ捨ててあった衣服を着て、私はあの人の部屋から出て行った

あの人の変化に気付くことなく・・・

プロローグ6話（後書き）

できればサッと流してくれるとありがたいです

ブローグ7話

・・・昨夜のこと聞かせてくれる・・・？

あの人の部屋を出て、もうすでに起きていたあの人のお母さんに、学校に行く準備をするために家に帰ることを伝えようとすると、いつもの優しい表情ではなく、真剣な表情でそう言われた

ああ・・・やっぱり・・・バレないはずがなかった・・・

私は聞かれるがままに洗いざらい話した

当然、怒られた・・・でも怒る理由が、私が考えてたことと違っていた

私は、『した』ということについて怒られると思っていたが、それについてあの人のお母さんは、私も注意しなかったから何も言わない・・・と言った

問題は『方法』だった。昨日はいきなりしてしまったので、避妊について一切考えてなかった・・・あの人のお母さんは、私の身体のことを心配して怒ってくれていた・・・発育しきってない身体で妊娠したら、と・・・

自分の両親にも、こんな真剣に怒られて心配されたことはないのに・・・

・・・ごめんなさい・・・心配かけて、ごめんなさい・・・

私は謝った。涙や他色々で顔をグショグショにして泣きながら・・・

そんな私をあの人のお母さんが優しく抱きしめてくれて・・・

・・・泣かないの・・・娘が泣いてると、お母さん悲しいな・・・

いつもの優しい口調でそう言った。私は思わず、え？つと顔を上げてあの人のお母さんの顔を見る・・・

・・・だって、もしできてたら、そういうことになるでしょ・・・？

あの人のお母さんが微笑みながらそう言う。いやいや・・・できてたらまずいんじゃない・・・

・・・なんてね 私としてはもうずっと、娘のように接してきたつもりだけどね・・・

さらにそう続けて、ウィンクをしながら微笑む

・ ああ・・・私にも、いつの間にか、ちゃんと家族ができてたんだ・・・

でも・・・それを、自分で壊してしまっていたなんて・・・

泣き止んだ私に、帰る前に朝ご飯を食べていきなさいな、と言われてさらに、あの人を起こして来て、とお願いされた

うう・・・いつたいどんな顔して会えば・・・

恥ずかしさや気まずさを感じながらも、お母さんを待たせるのも悪いので、意を決してあの人部屋のドアを開けた・・・まだ寝てると思ったのでノックもせず・・・

しかし予想は外れ、あの方は起きていて、私と同じように脱ぎ捨てた服を着ようとしていた

そしてドアを開けた私の姿を見たたん・・・

あの方は大量の鼻血を噴いて・・・血塗れになって倒れた・・・

プロローグ7話（後書き）

お願いします・・・サラッと流してください・・・

プロローグ 8 話

血塗れになって、倒れたあの人・・・

私がパニックになって悲鳴を上げ、それを聞いたお父さんとお母さんが慌てて駆けつけてきた

そして、血塗れのあの人を見て、すぐ救急車を呼び、病院へ・・・

かなりの出血をしていたあの人は、病院に着いてすぐ輸血を受けて状態が安定した・・・けど、まだ意識は戻らず、私は病院の廊下の椅子に座って、自分を責めていた

私が・・・調子に乗って暴走しなければ・・・

しばらくして、あの人の意識が戻ったと病院の人に言われた

お母さんに促され、あの人のいる病室に入ろうとして・・・

ドアを開けて、あの人と目が合った瞬間、再びあの人が鼻血を噴き、血塗れになった・・・

看護師の人に病室から出るように言われ、私が病室から出る・・・
あの異常な鼻血の原因は・・・どう考えても私の行ったアレ・・・
時間がたてば・・・とお母さん言われて、今日のところは自分の家に帰ることに・・・

家に帰ると、母親が私を一瞥して、あら、いなかったの？っという表情をする・・・

無断で外泊して、学校にも行ってないのに・・・何か言うことは無いわけ？ホント、私のことはどうでもいいんだ・・・と改めて思う

こんな家庭が崩壊しきっているのに、なぜ離婚しないのか・・・それは簡単、世間体が悪いから、である

離婚してバツがつくことによつて、自分にマイナスな要素がつくのがイヤだから、たったそれだけの理由で嫌いな人と一緒に暮らして喧嘩をしている・・・外面ばかり気にしていて、どうしようもない人達・・・

まあ、その外面を気にする性格だから、私が小学校時代ときは最低限の衣食住を与えてくれていた・・・虐待だの育児放棄だのと言われるのはマイナスだから・・・小学校は制服が無く、同じ服をずっと着ていると育児放棄を疑われる可能性が、とか考えてたんだろ

う・・・

でも中学校に上がると衣食住のうち衣と食はお金で済ますようになった。これで好きな服を買え、好きなもの食べる・・・中学校は制服があるから、服を買い与える必要は無い、適当にお金を渡して自分で用意させる・・・理由は面倒だから、かな？

まあ両親の私の扱いについてはもう慣れたからこっちとしてもどうでもいい・・・

私もそんな母親に何も言わずに通りすぎて、自分の部屋に行こうとしたとき、ああそうだ、っと何かを思い出したように母親の口が開く

・・・私ら、離婚するから、どっちについていくかは知らないけど、引越す準備、しときなさいよ・・・

どうやら本格的に、私の幸せな時間が終わり始めたようです・・・

ブローグ9話

どういうこと？と聞くと、離婚して世間体が悪くなって、そんな中で生活するなんて耐えられない・・・だそうだ・・・

自分勝手もここまでくると呆れて何も言えない・・・まあ昨日の私も両親に負けず劣らず、自分勝手だったけど・・・

なんでこんなところが・・・似てしまったんでしょう・・・

財産分与や、慰謝料、養育費などの話がつき次第、さっさと離婚してこの町を去るから、どっちについていくか、早く決めなさいよ・・・
・だつてさ

期限としては短くて1週間、長くて1ヶ月くらいだそうだ・・・

翌日、また学校をサボって、あの人のお見舞いに行く

しかし、状況は変わっておらず、あの人は私と目が合うなり、また鼻血を出す・・・

まるで、あの人の身体が、私のことを拒絶しているかのように・・・

お見舞いは無理と判断して病院から帰ろうとすると、お母さんと鉢合わせする

どうだった？と聞いてくるお母さんに、私は首を横に振って答える……

そう……とお母さんが悲しそうに返す

そして、私の様子から何かを感じ取ったお母さんが、家で何かあったの？と聞いてきた

私は正直に、両親の離婚が決まったこと、あと1週間から1ヶ月くらいでこの町から引越さないといけないことを話した……

すると、お母さんが……

……ねえ？あなたを引き取ることってできないかしら……？

と提案してきた。驚く私に、お母さんが話を続ける……どうやら私の事情を知ったときから、お父さんと話し合って決めてたらしい……

でも、今のあの人の状態じゃ……っというと、一緒に暮らせば、身体が適応とかして、大丈夫になるかも……っと言った

それは分の悪すぎる賭け……もしダメだったら……あの人は、普通の生活すらできない……

うまくいったとしても、適応するのにいったいどれだけの時間が……1ヶ月？1年？10年とか20年単位？その間は結局普通に生活できない……

それに、あの世間体を何より気にする両親が、どうでもいいとはいえ自分の子供を養子に出すということを認めるか・・・たぶん、いや絶対認めないだろう・・・

そしてなにより・・・これ以上、私はこの優しい家族に迷惑をかけでは・・・いけないんじゃないか・・・

だから私には・・・

・・・ごめんなさい・・・その話は、受けられません・・・

断るしか選択肢が無かった

それから数日後・・・あの人が退院して、学校に復帰して・・・

でも私はあの人を避けて生活して・・・

ある日、学校であの人が鼻血を出したという話が伝わってきた・・・理由は偶然の事故による女子のパンチラで・・・もちろん前はそんなことで鼻血を出したりはしなかった・・・

これも恐らく・・・私のしたアレが原因・・・

もう、私はあの人と一緒にいい資格は無い・・・

そう感じた私は、手紙を書いて、あの人の下駄箱に入れた

『さよなら』

そう一言だけ書いて・・・

それから3日後に両親の離婚の話し合いが終わり、私は転校した

プロローグ10話

あの人が暮らす町、私が暮らしていた町から、県を数個跨いだとある町・・・

そこが私が移り住んだ町、ちなみに父親についていくと決めて、この町で暮らすことになった

なぜ父親についていくと決めたか・・・理由は2つ

1つ目、たまたま父親の引越し先のほうが、あの人のいる町から、より遠くに離れられたから・・・遠くなら会いたくなって、どうしようもなくなつたとしても、会いに行くことはできないって諦めるから

2つ目、苗字を変えないで済むから・・・あの人が覚えている、そのままの名前で生きていけるから

我ながら未練たらたらで、情けなくなるような理由・・・

転校先の学校では、ぎこちなくではあるが明るく振舞った結果、馴染むことはできたし友達もできた・・・

でも父子家庭になって家事をしなければならず、学校外で遊ぶことはなかった

学校が終わったら、下校途中に買い物をして、夕食を作る・・・あの人のお母さんに少し料理を教えてもらったのが役に立ってる。ただ、初めの頃は料理をするたびにあの人達のことを思い出して泣

いていた。今でも思い出している・・・泣かなくなっただけ・・・
空いた時間には、ひたすら勉強した・・・

理由は、私はもう、恋愛も結婚もしないって決めたから・・・私が
生涯で愛する人は、あの人だけ・・・それで十分・・・もし他の誰
かを好きになったとしても、あの人を傷つけた私が幸せになっ
ていいはずがない・・・だから1人で仕事にでも生きて・・・1人で暮
らしていこう・・・なんて思ってる

そういえば、色々あつて忘れてたが、妊娠はしてなかった

できてたとしても、産める状況じゃないし・・・運がよかったかな
・・・

それはまあいいとして・・・父親が帰ってくる時間に合わせてお風
呂の支度をして・・・父親は転職したわけではなく、異動願いを出
して転勤によってこの町を選んだみたい・・・

父親は、まるで人が変わったように私のことを色々と気にかけてく
れた。ご飯おいしかったとか、家事を任せてしまつてスマンとか・・・
・本当は離婚する前ももつと気にかけてやりたかった、とか・・・

なぜそれができなかったのか・・・それは母親に、子供を味方につ
けるのか？！と言われたのが原因らしい

そんな感じで2年とちよつと・・・

家で暇さえあれば勉強していたおかげで、公立の偏差値のいい高校に合格することはできて・・・

それから家で勉強は続けたので成績も学年のトップになったり・・・

父親とも少しずつだけど、家族らしくなって・・・

第2の地で、私は普通に暮らしていた・・・

でも、そんな普通の暮らしも唐突に終わりを迎えた

ブローグ11話

高1の2月・・・父親が事故で死んだ・・・

車での帰宅中に他の車の事故に巻き込まれて・・・

事故の原因の車の運転手や、他にも数人、死んだらしい・・・

やっと、父親とも家族らしくなってきたと思ったのに・・・

私は・・・また1人になった・・・

父親の荷物を漁り、手当たり次第に親戚に連絡を取った

そして葬儀後の食事会で、親戚の人達と私の今後についての話になった

しかし誰も私を引き取ろうとは言わなかった・・・

なぜなら、私の父親は親戚の中での評判がよくなかったらしい

父親は母親と、所謂できちやった結婚だったみたいで父親の両親、私の祖父と祖母の反対を押し切って籍を入れたらしい・・・つでその後、祖父と祖母が死んだ際も葬式に来ず、さらに反対を押し切ったくせに離婚して・・・

母親に引き取らせるべきだと・・・親戚の人達は声を揃えて言ったでも、母親は連絡先がわからない・・・連絡を取れたとしても今更私を引き取るうとは思わないだろう・・・

じゃあどうするんだ？つと話がまとまらずにいると・・・

・・・いつまでも昔のことをググググググと・・・話も全く前に進まないし・・・情けないっいたらありやしないね・・・

今までずっと黙ってた、親戚の人達の中で1番見た目が年上の、背中にかかるくらいの長めの白い髪をした女性がイライラした声色で言い放った

しかしだなあ・・・と言い返そうとする親戚の中年くらいの男性

それを最後まで聞くことなく、その人は・・・

・・・あたしは忙しいんだ、もう帰らせてもらうよ・・・

そう言って席を立つ

・・・好き勝手言いやがって！！そんなに忙しいならとつと帰っちゃまえ！！ついでにこの子もつれて帰ってくればこっちは万々歳なんだがなっ！！

別の親戚の男性が怒ってヤケクソ気味にそう怒鳴った。お酒が入っていたようで、言った後にその男性の妻らしき人に言った内容について咎められてた

・・・そうかい、じゃあそうさせてもらうよ・・・

言われた女性のほうは心底どうでもいいように、その親戚に向かってそう言い、部屋から出て行くとする

親戚の人達は、いつもはどんな理由で呼んだって来やしないくせに・・・とか、あんな歳まで仕事一筋で結婚もしなかったんだ、来れるわけないだろ・・・と、本人に聞こえるように悪口を言っている・・・

その人が部屋のドアを開け、こっちを振り向き・・・

・・・何ボケツとしてんだい・・・さっさとついてきな・・・

私に向かってそう言った・・・私は、え？つとその人を見る

・・・聞こえなかったのかい・・・ついて来なつて言っただよ・・・
・・・ったく、これだからガキは嫌いだよ・・・

ポカンとなっている親戚一同を置いて、私は慌ててその人についていった

プロローグ12話（前書き）

プロローグ最終話です

プロローグ12話

食事会をしていたお店から、その人・・・藤堂カヲルさんの運転する車で私の家まで向かう

カヲルさんは祖父の妹で、私の大叔母に当たる人だそうです

・・・あ、あの・・・本当にいいんですか・・・？

私がそう聞くと・・・

・・・別にかまやしないさね、アンタくらいのガキの面倒なんざ、仕事で嫌って程みてるからね・・・

つと返してきた。詳しく聞くと、仕事が学校の校長だとか・・・

・・・だから、アンタもうちの学校に転入してもらおうよ・・・

そう続けるカヲルさんに、私は特に迷うことなく、はい、と了承する
今通ってる高校で成績トップになっている私は、他の生徒から見ても近寄り辛いみたいで、友達は何人もいない・・・だから別に転校を迷う理由はない

家に着くと、とりあえず3月の初めに卒業式があつて、それといくつかの仕事が済んで、春休みに入る少し前くらいに迎えに来るから、それまでに荷物の整理や処分をして引越しの準備、それと高校に転校の旨を伝えておくように、と言われた

そして最後に、何かあったらここに連絡してきなさい・・・っと力ヲルさんが名刺を渡してきた

名刺には・・・

文月学園 学園長 藤堂力ヲル

っと書いてあり、それを見た瞬間、私の頭は真っ白になった・・・

なぜなら私は、この学校名に聞き覚えがあった・・・

2年と少し前、私がまだ、あの人が住んでいる、あの町で暮らしていたときに・・・

世界で唯一の技術を使っている・・・独自の教育方針の基、上は大学レベルの問題を軽く解いてしまうレベル、そして下は本当に中学課程を学んだのか？と疑問になるレベルの、幅広いレベルの生徒が通っている試験校があると・・・

私は、またあの町で暮らすことになった・・・

あの人に、会わないように気をつけないと・・・でも大丈夫か・・・私のことなんかもう忘れてるよね・・・

あの人も、あの人の家族も・・・

覚えてても・・・私のこと、恨んでるに決まってる・・・

それから、カヲルさんが迎えに来るまでの3週間とちょっと・・・

その間に私は、学校に事情を話し、転校に必要な成績関係の書類を作るために受けてなかった学年末試験を受け、試験が済むと休学扱いで学校を休み、引越しの準備に明け暮れ、空いた時間は・・・もはや習慣や癖のようになっていく勉強をしていた・・・

3月中頃、引越しの荷物も片付き、文月学園が春休みに入ったのある日、私はカヲルさんと一緒に学園に向かう

簡単な編入の審査を受けるためと、他色々の準備だそうだ・・・

編入の審査は、書類審査ですんなり合格、面接も予定していたが時間の無駄ということで省略、制服等の準備に移り・・・

最後に、この学園にある世界で唯一の技術、試験召喚システムで自分の召喚獣の設定のために必要な、文月学園式の学年末試験とクラス分け試験の実施

文月学園式とは、時間内なら問題を無限に解くことができ、点数の上限もないという試験方式

なぜ2回も試験を受けなければならないのか・・・それは、試験範囲やそれぞれの点数の用途の違い

学年末試験は、高校1年生で習う範囲の試験で、用途は進級の可否を決めたり、召喚獣の装備を決めるために行う

クラスの振り分け試験は、小学1年から高校1年までの広い範囲から出題され、用途は名前の通り、2年生になったときの自分の所属するクラスを決めるために行う

私にとっては進級については問題ないし、召喚獣の装備には興味ないので、学年末試験は振り分け試験で少しでも上のクラスに行くために、試験方法に慣れる練習の意味合いが強い

そして、私はそれぞれの試験を2日間ずつの日程でこなしたり（他の生徒は学年末試験が4日間、振り分け試験が3日間の日程らしい）

他の生徒もやったからという理由で召喚獣の操作訓練をしたり（装備の設定をする前だったので外見データを入れただけの装備が初期設定の召喚獣をあちこち動かすだけ）

そんな感じで、いろいろな準備をするため、春休みは学園に毎日のように通って過ぎていった

プロローグ12話（後書き）

学年末試験とクラス振り分け試験のことは、そうじゃないと姫路さんについて説明が付かないと思います

召喚獣の装備がAクラスの生徒の召喚獣と並ぶような感じで、本人はFクラス・・・同じ試験で設定されるなら装備は貧弱なはず・・・それに同じなら姫路さんは学年末試験も0点で・・・いくら2学期までの成績がよくても学年末試験が0点なら進級できないんじゃないの？仮進級とか？

まあそんな感じでこのプロローグ・・・そういうことにして置いてください・・・

1 話（前書き）

さて本編開始ですが・・・

2 話から本気出す（文字数的な意味で）

1話

私は今、お婆ちゃんが運転する車で、お婆ちゃんが勤めていて、私
がこれから通うことになった学校・・・文月学園に向かっている

窓の外には約3年ぶりに見る町の景色・・・そう、私は以前、この
町で暮らしていた・・・

そして、色々な事情でこの町を去って、また戻ってきた

「じゃあ、アタシは駐車場にこれ置いて、そのまま仕事に入るから、
ここまででいいかい？」

校門のところで車を止めて、そこにいた先生らしき人とお婆ちゃん
が挨拶を交わした後、私に向いて少しすまなそうに聞いてくる

「いいえ、そんな・・・乗せてもらっただけで・・・えっと・・・
今日も遅くなりそうですか？」

私はそれに恐縮気に返し、帰宅時間を尋ねる

「ああ・・・年度始めはやることがいっぱいあってね・・・新入生
や新任の教師のこと、他にも予算に・・・」

お婆ちゃんがため息をつき、そう答える・・・お婆ちゃんはこの文

月学園の学園長をしています

さらに、この文月学園で、世界で唯一使われている、試験召喚システムの開発者でもあります

試験召喚システムとは・・・生徒や教師に1人1体、テストの点数により強さの決まる召喚獣を与える、科学とオカルトが混ざった特殊なシステム・・・でしょうか。私も詳しくはわかりません・・・

それは置いて・・・

「では夕ご飯は・・・」

「すまないね。しばらく1人で食べとくれ・・・」

続けて聞くと、さらに申し訳なさそうに答えてくる

昨日までは春休みで・・・遅くなくても一緒に食べてたんですけど・・・まあ1人の食事は慣れていますから、今更寂しいとも感じません・・・

「アンタを引き取つといて、保護者らしいことは何もできてないね・・・」

「気にしないでください・・・では、お仕事、がんばってください・・・」

そう言って私はシートベルトを外し、カバンを持って車を降りる
私が車のドアを閉め、お婆ちゃんは車を発進させて学園の敷地に入っ

「おはよう、藤堂」

さっきお婆ちゃんと挨拶を交わしていた、この学園の先生らしき人が私に挨拶をしてきた

私より身長が50センチぐらい大きくて、体格もガツシリと・・・体育の先生でしょうか？

「おはようございます・・・えっと・・・」

「この学園で補習教師をしている、西村宗一という。まあ藤堂とはあまり関わることはないかもしれんが・・・よろしく頼む」

西村先生がそう言って封筒を差し出してくる・・・何の封筒だろう・・・？

それと補習専任の教師って・・・勉強のレベルが高くて、ついていけずに補習が必要になる生徒が多いってことかな？私には関わることはないってことは、私には補習の必要がないってこと・・・？

「ん？どうした？振り分け試験の結果を見ないのか？」

「あ、いえ・・・すいません・・・見ます・・・」

そんなことを考えていると、西村先生がそう言って怪訝そうに私を見てきました

私は我に返って封筒を受け取る

「しかし、転入してすぐこの成績とは・・・他の学校で成績の良かった者ほど、テストのやり方の違いで、実力が出せなかったりするんだが・・・」

西村先生の話聞きながら封筒の封を開け、結果が記入された用紙

を取り出す

総合得点 5083点

所属 Aクラス（代表）

「おめでとう、藤堂・・・2学年の主席生徒だ」

試験結果に結果に目を点にしている私に、西村先生がそう言いました

1 話（後書き）

一応チートじゃないつもりです

ちゃんとこんな成績になった勉強方法も、後々公開します

主人公設定

名前 藤堂 華織

なまえ とうどう かおり

性格 物静かな感じ（昔はもう少し活発なほうだった）

趣味 なし（時間が無かったため、強いて言えば勉強？）

特技 家事全般

好き 康太（愛してると言えるくらい）

嫌い 康太を苦しめる人（要するに自分）

身体情報

中学2年のときは140cmいかないくらい 胸は寄せて上げてもAの域を出ない
高校2年で141〜142cmくらい 胸はB、寄せて上げてもCに届かない

両親が離婚するまでは身長が伸びが悪く（家庭内でのストレスが原因？）両親の離婚後は成長速度が少し戻ったが、勉強ばかりで運動をしなかったため、結局そんなに身長は伸びなかった

髪型は、中2まで長かったが（整髪代ケチってた）、その後はつさり切って（家事の邪魔になったから）、現在再び伸ば始めている（またケチりだした）

人物概要

文月学園に2年生から転入してきた学年首位の女の子

康太の元カノで、康太とは最後までやった関係、そして康太の鼻血体質の原因を作った人。それを悔やんで別れたが、別れて3年近くたっても未練たらたら

普段は物静かだが、康太の前だと少し子供っぽくなったり、感情的のなあって思考が暴走したりする（ポジティブ、ネガティブ、どちら方向かはわからない）

両親が中2のときに離婚していて、父親についていったが高1のときに事故で死亡、その後大叔母にあたる藤堂カヲルに引き取られる

カナヅチで運動が苦手

同年代とのコミュニケーション能力が低い（流行の話についていけない）

ケータイを持っていない

成績

保健体育のみ400点を少し超えるくらいで、あとは500点以上

総合5000点以上の学年主席

召喚獣

武器

右手に装着する刺突用の爪状の武器

（リリカルなのはs t sのドゥーエが使っているピアッシングネイル）

元ネタのほうは右手の親指と人差し指と中指の3本に装着しているが、こちらは右手の指全てに装着している。長さは元ネタのほうは伸縮自在だが、こちらは人間サイズに直すと40cmくらいで固定となっている

服装

黒い和服のような服で右腕を袖に通さず、右肩を出している格好（イメージはアニメの戦国乙女の毛利モトナリ、あれは左腕が出ているけど、それを右にして、肩や足等に着いている防具っぽいものと帽子を取っ払った感じ。胸はサラシで隠している）

腕輪

康太と同じ、身体加速による高速移動

ただ康太のより性能に対する点数消費が少なく、燃費が良い

主人公設定（後書き）

以前活動報告に書いたキャラ案3つを混ぜた感じの今回の主人公
召喚獣は文章だけで表現しきれ自信が無いのでキャラ名指定しま
した

プロローグ書き終わってから設定を考えたのでプロローグで全く出
てきてない設定とかもあります（特に容姿関係）

2 話

「お婆ちゃん・・・ここは、本当に勉強するための部屋なのですか・・・？」

西村先生に2年Aクラスの教室の位置を聞き、教えてもらったおりの場所に向かう

そして2-Aの表札が掛かっている教室を見つけて、戸を開けて中を見た瞬間、私は固まった

まるでどこかのお屋敷のような内装・・・天井を見るとシャンデリア、床を見るとふかふかのカーペット、壁は一見普通に見えるけど、よく見ると所々に使われている木材の木目が美しく・・・いかにもお金掛かってますという感じの、そんな部屋。応接室とかじゃないですよ？にしては広すぎますけど・・・

設備に目を移すと、黒板の代わりなのでしょうか・・・大型の前に超が4つか5つくらい付きそうな大型のプラスマディスプレイ・・・型で言えばどのくらいでしょう・・・10000？

それと壁を見ているときに気付いたドリンクバー・・・種類はジュースに、コーヒー、紅茶、日本茶など・・・もうすでに数え切れなくらい種類があるのですが、さらに・・・

『希望の品が無い場合、教員に申請すれば追加いたします』

注意書きのと一緒にそう書いてあった・・・

最後にここが本当に教室ならば、数から推測して生徒用と思われる

設備・・・

机はシステムデスクでエアコンと冷蔵庫が備え付けられている・・・
冷蔵庫には注意書きで、中身も学園が用意すると書いてあった

椅子はどこかの社長が座るようなリクライニング式で・・・まさか
マッサージ機能まであったりは・・・と思ったが、流石にそれは
無かった

そして、ここが本当に教室なのかと疑問に思ってしまう最大の要因、
机と同じ数だけ用意されているノートパソコン・・・実はここは職
員室でしたってことは・・・ないですよ・・・
タッチマウスがあるのに無線マウスもついてて・・・まさかネット
に繋がったりはしないよね・・・？

ガラッ

教室の設備を観察していると、誰かが教室に入ってくる

ちなみに私が教室に入ったとき、生徒は誰もいなかった。先生方は
生徒より早く来ているから、学園長であるお婆ちゃんと一緒に登校
してきた私が教室に1番に来るのは、まあ当然のことです・・・

入ってきたのは黒く、手入れの行き届いた綺麗な長い髪をした女の
子。気品があつて・・・どこかいいところのお嬢様なのだろうか・・・
・？

その人は、私をチラッと見て、適当な席に着いた・・・席は自由な
のかな・・・？

「あ、あの・・・席って自由なんですか・・・？」

「・・・たぶん、1年のときもそうだったから・・・」

「そうですか・・・ありがとうございます」

おずおずと、その人に聞いてみると、答えてくれた

私はお礼を言つて、最前列の廊下側から2番目の机にカバンを降ろし、椅子に座る・・・

理由は、私は背が低いので、最前列じゃないと黒板・・・じゃなくてプラズマディスプレイが見えなくなりそうだから。あと、窓側だと陽が当たって眠くなりそうだし、1番廊下側だと、戸の開け閉めの音が・・・と思ったから、だから最前列の廊下側から2番目の位置を選びました。流石に転校してきて、いきなり中央を選ぶ勇氣は無いです

「・・・転校生？1年のとき見なかったけど・・・」

席について、癖になっている勉強をしようと、春休み中に支給された教科書、そして前の高校から使っているノートをカバンから取り出していると、さっきの女の子が話しかけてきた

「はい、前は県外の高校にいて、事情があつて、こっちに越してきました・・・あ、藤堂華織です。よろしく願います」

「・・・霧島翔子、よろしく・・・」

ぎこちないながらも明るく自己紹介する・・・自分のコミュニケーション能力の低さが恨めしい

霧島・・・あゝそういえば昔この町に住んだときに、豪邸の前を通ったことがあったけ・・・門に霧島の表札があつて・・・そこ

の令嬢さんか・・・

「・・・前の学校でも、こんな早く来て自習してたの？」

机の上に出した勉強道具を見て、不思議そうな顔をして聞いてくるまあ、普通はこんな早く来て自習する生徒はいないよね・・・

「はい、流石にここまで早くは無かったですけど、自習しましたね・・・」

「・・・どうして？」

「うーん・・・そうですね・・・今となつては癖みたいなものです
が・・・最初は・・・」

「・・・最初は？」

「最初は・・・忘れるため、でした。色々な、ことを・・・忘れる
ために、やってましたね」

あの人のこと、あの人の家族のこと、他にはまた1人になったこと
による寂しさ・・・とかね

こう言つてゐる時点で忘れられなかつたことですけどね・・・

・・・って私は初対面の人に何話してんだろ・・・変な人だと思わ
れて、避けられたらどうしよう・・・？

3話（前書き）

バカテス9・5巻を書店で立ち読みしました・・・

おい康太、お前に兄妹がいたとは思わなんだぞ・・・

華織が泊まった日のこと、どう説明すればいいんだよ・・・

兄2人は部活の大会で遠征に出てたとかでなんとかかなりそうだけど、妹は無理だろ・・・

妹が康太の1つ下ならそれでもいいが、それなら妹は現在高1ということで・・・ならもしかして文月通ってんじゃないの？ってことになる（学費の都合上、4人兄弟なら安い文月選ばざるを得ないのでは？ということ）。だったら学祭編で出てくるでしょ・・・ということで妹は恐らく最低2つ下だと思う・・・なら康太が中2のとき妹は小6で・・・小6なら校外の習い事としてスポーツを（テニスだっけ？）してることになって・・・次の日学校なのに大会で遠征とかはしないだろうし・・・ああ、困ったなあ・・・友達の家に泊まりに行ってるとか、修学旅行でいなかったとしても置いてください・・・

っていうか、私と康太のツーカーで（ryの方も色々おかしなところが出てこないかな・・・まああっちの作品で康太の家族構成に関することは書いた記憶は無いんだけど・・・

3話

「・・・」

霧島さんが黙ってしまっ・・・まずいです・・・なんとかしないと・・・

「な・・・」

「・・・な？」

「な、な、なんてね 勉強は覚えるためにするのに、忘れるためにって、意味わっかんないよね」

く、苦しい・・・というか、ごまかし方が下手すぎる・・・
お願いです・・・早く他のAクラスの人きて・・・

「・・・いや、なんとなくだけど・・・わかる気がする・・・」

え・・・？

「・・・私も、たまにそんな理由で勉強することがある・・・」

「霧島さんも・・・？」

「・・・うん」

私がキョトンとしながらも聞き返すと霧島さんが頷いた

「・・・これ・・・」

そして、生徒手帳を取り出し、それに挟んである写真を私に見せてくる

写真には小学生くらいの赤い髪の子が写っている

「これは・・・？」

「・・・私の好きな人の小学校のときの写真・・・同い年で、今はこの学園に通ってる」

「えっと・・・彼氏、なのかな？」

「・・・いや・・・何回か告白したけど、全部断られた。その悲しさを忘れるために、机に向かったりした・・・」

何回もとは・・・それはまた・・・一途なこと・・・
というか、初対面の私が聞いていい話だったのかな・・・？

「・・・あなたも、同じ・・・」

「え・・・？」

「・・・あなたも、私と同じ感じがする・・・」

霧島さんが私の目をジッと見て言う

どうしよう・・・話してくれたんだから、私も話すべきかな・・・？

「うん・・・私も・・・好きな・・・いや、愛してると言っているくらいの人がいた・・・」

「・・・いた？」

「うん・・・あ、その人は生きてる・・・と思う。私が別れるまでは生きてた。それから知らないけど・・・」

「・・・愛してたのに、別れたの？」

霧島さんが首をかしげて聞く

「私の自分勝手な行動で・・・傷つけて、その人の前に立てなくなつて、罪悪感から・・・逃げたんです。一方的に別れを告げて、引っ越しと転校をして・・・」

細かく言うのは気が引けるので、少しばかり教える

「・・・まだ、その人のことは・・・」

「うん、変わらず、そのときのまま・・・愛してる・・・だから、私は、恋愛はもちろん、結婚もする気は無い・・・仕事にでも生きて・・・1人で生きていく・・・だから、私は勉強をしているの・・・」

「・・・そう・・・」

そんな感じで話に一区切りついたあたりで、廊下から声が聞こえてきた・・・そろそろこの話題は終わりにしないと・・・

「う、ごめんなさい・・・暗い話をしてしまつて・・・」

「・・・気にしないでいい・・・」

私は話を切り上げ、次の話題を探す・・・
えっと、何か明るい話題は・・・

「・・・」

何も話題が見つからない・・・あわわ、どうしよう・・・どうしよう・・・
うわぁ・・・沈黙ってこんなに恐ろしいものなんだ・・・

「えっと・・・」

とりあえず・・・

「・・・?」

「がんばってくださいね・・・私の分も・・・その人と、幸せになつてください」

応援しておこう

その後、他の生徒が来始めて、霧島さんは自分の席に戻り、私は自習を始めた

「みなさん進級おめでとございます。私はこのクラスの担任の、

高橋洋子です。よろしく願います」

8時40分くらいに担任の高橋先生が来て、SHRが始まった。高橋先生は、私の編入の書類審査をしたり、学年末試験とクラスの振り分け試験の試験監督と採点、召喚獣の操作訓練の指導をしてくれた先生です

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、リクライニングシート、その他に不備のある人はいますか？」

不備というか、充実しすぎているというのが問題だと思います

さらに、教材や冷蔵庫の中身も学園が支給するの遠慮なく申請を・・・つと高橋先生が続ける。あとで高校3年の教科書を申請してみようかな・・・ノートや筆記具ももらえたりするのかな・・・？

「では、自己紹介に移りましょう」

不備の申し出が無かったので、SHRが進行する

「まず、始めにクラス代表の藤堂華織さん。前に出て自己紹介をお願いします」

高橋先生が続けて、私に前に来るように言う

その瞬間、教室内がザワツとして・・・

私が立ち上がり、教壇まで歩いていく・・・途中、あんな生徒いたか？とか、霧島翔子が負けたのか・・・など、驚いてる声が聞こえてくる

そうですね、去年度いなかった生徒がいきなり学年主席・・・私

だつてみんなの立場なら驚く・・・それにしても私がいなかったら霧島さんが学年主席だったのですか・・・知らなかったとはいえ、霧島さんには不快な思いをさせたかもしれないね・・・

「えと・・・藤堂華織です・・・今年度から転入しました・・・その・・・よろしくお願いします」

クラスメイトの視線が私に集まり、それに緊張しながらも、何とか自己紹介をした

4話

S H Rから数時間後・・・現在、昼休憩・・・

私は家で作ってきたお弁当を食べて、することが無かったので自習していた・・・

「・・・代表・・・代表・・・藤堂代表」

「え、あ、はい・・・すみません、なんですか？」

慣れない呼ばれ方に気付くのが遅れ、私は慌てて返事をしながら顔を上げ、声のほうを向く・・・そこには霧島さんがいて・・・声でわかってましたけど・・・なんか気まずいです・・・

「・・・」

霧島さんがジッと私を見てきて・・・やっぱり怒ってますよね・・・

「・・・」

次に、私が自習で使っているノートに視線を向けて・・・
そして・・・

「・・・読めない・・・」

そう呟きました

「これですか？これは暗記で英単語のスペルを覚えるために、とに

かく書いて書いて・・・を繰り返したものです」

私の勉強方法は、とにかく時間をかけて暗記していくやり方・・・まず、ノートに覚えたい語句を書き、それに重なるように2回3回・・・と文字が読めなくなるまで上に書いていく、文字が読めなくなってる頃には、もうその語句は頭の中に・・・という寸法正しいやり方はその語句を声に出しながら書くんだけど、私はもう慣れたから声に出さずに頭の中で反芻している

恐らくこれが文月学園式の試験方式と合ってたのでしょね・・・50分間ノンストップで書き続けても全く疲れませんでしたし・・・私の場合は1枚100点のテスト用紙を6、7枚くらい埋めました。それで保健体育以外は全部520点前後なので、正答率は8割ちょっと、保健体育は400点くらいなので6割くらい・・・この試験方式の攻略法は、問いに対する解答を解答欄に高速かつ精確に書くペン捌き、それを時間いっぱい維持できる集中力と持久力、でしょうか？学力は・・・普通の試験方式よりは重視されなと思います。だって、わからない問題がきても、解答欄を埋めておきさえすれば次の用紙がもらえますから・・・

それはさておき・・・

「・・・効率が悪くない？」

霧島さんが意外そうに言う・・・学年主席だから凄い勉強の仕方してるのか思ってたのかな・・・？

「うーん・・・確かにそれは思います・・・でもこの方法は、時間さえあれば特に何も用意しなくていいから楽なんです」

体育の授業中に地面に書いたり・・・家だとチラシの裏とかでもできますし・・・参考書も問題集も要らないので、お金もあまり掛かりませんし・・・

「・・・１日にどれくらいやってるの？」

「暇さえあれば、ですね。家事の合間のちょっとした時間とか・・・」

「・・・家事もしてるの？」

霧島さんが驚いた表情で聞いてくる

「うん・・・」

それに私は頷いて答える・・・理由は不幸自慢にしかないのので
言いません

「・・・いつから？」

「えっと・・・本格的にするようになったのは中２に夏から・・・」

「・・・本格的？」

「掃除は小３か小４くらいから自分の部屋だけやってたし、洗濯は中学入ってから自分のは自分でして・・・料理も中１の１月か２月くらいから少しずつ・・・そして中２からは掃除は家全体、洗濯と炊事は家族の分も、この勉強もその頃から・・・」

まあ、家族の分といっても、お父さんの分が増えただけで、住んで

た家もそこまで広いところじゃなかったから、慣れれば、思ったより大変ではなかった

それに・・・何かをしていれば、その間はあの人のことを思い出さなくて済んだから・・・

「・・・負けても仕方ない、か・・・」

霧島さんが少し肩を落としてそう呟き・・・

「えと・・・霧島さん・・・？」

「・・・翔子でいい。代表」

「あ、えと・・・翔子、さん・・・？」

「・・・何、代表？」

「あの、その代表というのはできれば・・・」

「・・・どうして？」

「馴染みが無さすぎて、自分のことだと気付けなくて・・・」

委員長とかならまだ気付けたかもしれませんが・・・

「・・・わかった。なら・・・」

「華織でいいですよ、翔子さん」

「・・・わかった。華織」

『0点になった生徒は補習ーっ！！！！』

『ぎゃあああっ！！！！』

教室の外が、ガヤガヤとしています

なるほど・・・補習専任とはこういう意味でしたか・・・

昼休憩が終わり、午後から授業・・・かと思ったら自習でした

理由は、FクラスがDクラスと試召戦争をするからだそうです・・・

試召戦争制度・・・正式名称、試験召喚獣戦争制度・・・試験召喚システムによって生徒に配布？された召喚獣を用いたクラス間で行う戦争のことで、戦争に勝つと負けたクラスと設備の取り替えを行える権利を得ることができるというものらしい・・・

この制度の主な目的、生徒の勉強に対するモチベーションの向上・・・

私としてはそれ以外にも、クラス単位の勝負ということで協調性、上位クラスに勝つためには当然作戦が必要になってくるので、作戦に任されたりすることによって個人の責任や義務に対する意識の向上など・・・そういうところも狙いに入っているのでは？と思ってる

にしても試召戦争制度でモチベーションが上がっても、他のクラスの試召戦争で授業が無くなってしまったら、出ばなをくじかれた感

じでモチベーションが下がってしまうような・・・

《ピンポンパンポン》

ん？放送・・・？

《船越先生、船越先生》

生徒の声ですね・・・これも試召戦争の作戦の一部なのかな・・・？

《吉井明久が体育館裏で待っています》

『！』

クラスメイト達がピクツと反応した・・・

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「こ、ここまでやるとはな・・・Fクラスの奴ら本気だな・・・」

「ああ・・・これはひよつとしたらひよつとするかもしれんな」

放送を聴いたクラスメイトがそんな会話をしています・・・

どうやら、この吉井明久という生徒は捨て駒にされたようですね・・・可哀想に・・・

Fクラスの代表は、勝つために容赦なく味方を切り捨てれる人みたいですね・・・リーダーとしては判断力があつて頼もしいですけど、見方を変えると冷酷な人ですね・・・

私も・・・このクラスを守るために、がんばらないといけませんね・

・
・

教室の外から、男の子の叫び声が響いてくる・・・それを聞きながら、私は再度集中し、自習を再開した

4 話（後書き）

華織の勉強方法は自分が昔実際に高校で教えてもらった方法です

自分は使いませんでしたけどね

小5から続けてる勉強方法があったから必要なかったし・・・

アニメ1期の1話で姫路さんが結構な枚数の用紙を埋めてた気がします、あれで400点台って、お前正答率悪すぎだろ・・・って思っんですが、どうでしょう？それともあの用紙1枚で10点くらいしか配点ないとか？

Aクラス戦の時の成績で総合4400点台って1枚100点の用紙なら最少45枚だけど、もしかしてあれは総合科目で受けてたのかな？

5 話

放課後・・・

外がまだガヤガヤとしているので、試召戦争は続いているのでしょ
うね・・・

関係のない私は帰ってもいいんですが、邪魔になったら嫌ですし、
静かになるのを待ってから出ましよう

それから30分くらい自習をして時間を潰し、外が静かになったの
で教室を出る・・・

廊下には戦争に勝って喜んでいる生徒、負けて落ち込んでいる生徒・
・どっちがどっちのクラスかはわかりませんが、3時間ちよつと
で決着は付いたようですね・・・

Dクラスが勝ったなら、DとFの差は圧倒的だったということ、F
クラスが勝ったなら、余程の策を使ったということかな・・・？

「・・・あの、それで・・・どうして試召戦争を・・・」

そんな生徒達をすり抜けて階段に向かってしていると、そんな話し声が
耳に入ってくる

声のほうを向くと、桃色の髪的女子生徒と、赤い髪の男子生徒・・・朝、霧島さんに見せてもらった写真の子が成長したような感じの生徒と話していた

どうやら試召戦争を仕掛けた側のクラスの生徒みたいで、試召戦争を始めた理由について話している様子・・・私はそれにコッソリと聞き耳を立てる・・・

「・・・あの、吉井君がそんなことを言い出した理由って・・・」

どうやら吉井という生徒・・・もしかして放送で出てきた吉井明久という人だろうか・・・が、この赤髪の男子生徒に試召戦争を始めようと持ちかけたらしい・・・なるほど・・・それで、あの放送か・・・言いだしつぺなりの責任の取り方ということかな・・・

「・・・バカはバカなりに譲れないものがあつたってことだろ？俺の口から言えるのはこれが限界だと思うが、たぶん姫路の想像は間違っていないと思うぞ？」

男子生徒が女子生徒にそう言うと、女子生徒は少し顔を赤らめた・・・なるほど、吉井という生徒はこの女子生徒のために・・・ってことですか・・・いい話ですね・・・

「それと、お前も知ってるだろ？新しい学年主席・・・」

ん・・・？

「あ、はい・・・凄いですよね・・・転校してきてすぐ学年主席って・・・名前は確か・・・」

「藤堂華織だそうだ・・・うちのクラスの藤堂が嫁だとか言って血祭りに上げられてたな・・・」

「そ、そうでしたね・・・特に土屋君なんか・・・」

え・・・土屋・・・？まさかね・・・

「詳しいことは知らんが、なんか訳ありみたいだ。Aクラスとやるときは俺に代表を討たせる・・・だそうだ」

間違いない・・・あの人だ・・・この学園にいたなんて・・・

やっぱり、私のこと・・・怨んでるんだ・・・

Aクラスが負けてFクラスの設備に落ちれば、当然代表の私はクラス中から責められる・・・あの人の理想としては、そのまま退学して欲しいって思ってるんだ・・・そうに決まってる・・・

でも・・・その理想は、叶えてあげれない・・・私は例えどんな責められても、ここを辞めることはない・・・お婆ちゃんが保護者である限りは・・・

次の日、Aクラスは昨日の試召戦争の話で持ちきりだった・・・

昨日私が話しているのを盗み聞きした、2人のうちの女子生徒のほう・・・名前は姫路瑞希というらしい。姫路瑞希は本当はAクラスの上位クラスの学力だとか・・・しかし振り分け試験で途中退室で0点になってしまいFクラスに振り分けられた、と・・・

勝ったFクラスは、Dクラスと設備交換をせずに、何か取引をした

らしい、と・・・

やっぱり狙いは、Aクラスなんだろうか・・・あの人もそのつもりで、私を討たせろって言ったんだろうし・・・

その日は私が転入して初めての授業でしたが、あまり集中することができませんでした・・・

さらに次の日・・・

Fクラスは昨日、Bクラスに宣戦布告をして、今日の午後から戦争を開始する予定らしい

やっぱり、狙いはうちのクラスだろう・・・この、Bクラスとの戦争に勝ったら・・・間違いなく、うちのクラスに攻め込んでくる・・・

私には勝てる自信がない・・・あっちの代表のほう間違いなく戦争に勝つために必要なものを持っている・・・

それに私は・・・あの人の前に立てない・・・

「あの・・・翔子さん・・・」

「・・・何、華織？」

「代表が戦争に参加しないってことはできるんでしょうか・・・？」

「・・・無理。試召戦争のルールにはこうある・・・クラスの代表は試召戦争時、総大将となり、総大将の戦死により戦争の勝敗が決まる。代理は如何なる理由があっても認められない・・・」

つまり、私の代わりに翔子さんに代表になってもらって試召戦争をすることは不可能ということですか・・・というか、如何なる理由でも認めないって・・・長期戦になったらどうするんでしょう・・・？

「でも、それだと代表は試召戦争が始まってしまったら、終結するまで学校を休むことができないですよ・・・体調崩したりしたらどうするんでしょう・・・？」

「・・・そのときは相手クラスに休戦を申し込む。もちろん相応の条件を出す必要があるけど・・・」

「そうですか・・・私も気をつけないと・・・あ、そういえば私、明後日の金曜日、昼から用があって早退するので・・・」

「・・・用？」

「ええ・・・親戚の法事が・・・少し遠いので前日に入って泊まる必要があって・・・」

本当はお父さんの七七日の法要なんですけど・・・

四十九日

明後日の金曜日の午後に出て夜にお父さんの実家（祖父と祖母の家。今は親戚の人が暮らしている）着き、その次の日の土曜日に法要を行い、日曜日に帰ってくる。本当は火曜日が法要日なんですが、親

戚の方々も都合がつかないということで、繰り上がって土曜日になった

宿泊は親戚の家ではなく、お婆ちゃんがホテルを取ってくれた。お婆ちゃんの仕事の都合で当日入りで、前日に入るのは私だけ、帰りは一緒に帰りますが・・・

しかし次の日、私は代表になって最初のピンチを迎えることになった・・・

「木下あああつ！！優子おおおおおおお~~~~っ！！」

朝、そんな叫び声と共に教室の戸が勢いよく開かれる・・・

「えつと・・・誰？」

入ってきた人を見て、女子生徒・・・たぶん木下さんかな？が首をかしげる

「誰って！さつき私達を豚扱いして豚小屋がお似合いって言うたくせによくそんなことを！！」

入ってきた人は頭に血が上っていて、冷静さのかけらもない・・・

「え？なんのこと？」

「とことんとぼけるってのね？！いいわ！！CクラスはAクラスに

「宣戦布告するわ!」

5 話（後書き）

試召戦争編って、5日以上連続で学校に来てるような気がするんだけど・・・

1日目、Dクラス戦

2日目、姫路さんのお弁当事件&Bクラスへの宣戦布告

3日目、Bクラス戦1日目

4日目、Bクラス戦2日目

5日目か6日目、A対Cの試召戦争

7日目、Aクラス宣戦布告

8日目、Aクラス戦

ねえ？土日は？

もしかしたらA対Cの試召戦争が7日目にあつたのかもしれないけど、それなら宣戦布告に行ったときに、Cクラスがもう設備ランクが落ちてるのは時間的に無理があるような・・・優秀な設備入れ替えスタッフがいて1時間以内で変更可能とかならわかるけど・・・

でも7日目にA対Cの試召戦争をしたのなら、何も無い5、6日目を土日にしないと合わなくなつて・・・それだとAクラス戦終了後の明久と美波のやり取りで週末の約束が、あれ？前の週末に行かなかったの？つてなつて・・・

ねえ？土日は？うちの週末どこいったん？

まさか完全週休2日じゃないとか・・・ん？でもな・・・学校の始業式って大体6日くらいで・・・最低1日目と2日目の間には休日挟んでないから（コミックに翌日と書いてある）2日目と3日目

の間に土日を含んだのなら土曜は8日になって・・・隔週週休2日は第2土曜は休みでしょ・・・

週休1日は無いはず・・・勉強会で霧島家にお泊りが週末だったし、学校あったなら学校から皆で直接霧島家入りするでしょ

教えて！偉い人！

6 話

「・・・優子、どういうこと？」

突然のCクラスから宣戦布告・・・

その原因と思われる木下さんに翔子さんが詰め寄っています

「ア、アタシだってわからないですよ！さっきって、アタシはここにいたじゃないですか？！」

「そうですよね・・・それに今はこれからどうするかを考えないと・・・宣戦布告された以上、上位クラスは確か・・・」

「・・・拒否できない」

上位クラスは下位クラスとの試召戦争にメリットがないため当然拒否したがる・・・なので上位クラスは下位クラスからの宣戦布告に拒否権がありません

加えて試召戦争は教員が大勢借り出される大仕事で、1日に何戦もできることではない・・・

となると・・・

「・・・Cクラスの使者は日にちを言わなかった・・・その場合、今日はBクラスとFクラスとの戦争があるからできないから、その決着がついた次の日・・・もし今日、向こうの戦争の決着がついたら、明日開戦になってしまう・・・」

「しまうつて、明日何かあるんですか・・・？」

翔子さんが下手すると明日開戦になるといって、木下さんが気まずそうに聞いてきます

「明日、私はお昼で早退する予定なんです。親戚の法事のために・・・」

「・・・だから、明日開戦した場合、午前中で決着をつけないければいけない」

初めての試召戦争で、いきなり時間制限付き・・・難易度高すぎます・・・

「じゃあ、今から開戦日時を月曜日にするように交渉を・・・」

「無理でしょ・・・あんな怒ってたし・・・」

木下さんがそう提案しますが、それを・・・たしか工藤さんでしたか・・・が難しいと判断します

「・・・同じ理由から途中休戦も難しいと思う」

困りました・・・もう実家に向かうための新幹線の予約もしてしまってますし・・・

私の勝手な事情のせいで、難易度を跳ね上げてしまいました・・・

「とりあえず今は、Cクラスを2時間半くらいで落とせる作戦を考えながら、向こうの戦争が今日中に終わらないことを祈るだけです」

ね・・・」

そんな作戦、あるのかわかりませんが・・・

結局、作戦も浮かばず、放課後・・・

「最大戦力で一気に叩いたらどうですか？」

「それは・・・Fクラスだって、Dクラスの攻撃に約3時間耐えられましたが、Bクラスともこんなに善戦してます。もし耐え切れなかったら考えると・・・」

木下さんの提案に私は難色を示す・・・

Fクラスの善戦はリーダーの作戦立案能力や統率力、1人1人の作戦遂行能力の高さからだと思いますが、それがCクラスに無いという保証はない・・・現実性の高い作戦が必要だと思います・・・

「・・・向こうにいい条件を出して、途中休戦を承諾させる」

「それは最終手段にしましょう。Aクラス側から休戦を持ちかけたら、他のクラスに変に目を付けられる可能性があります」

「・・・どうということ？」

翔子さんの案に私は、できればそれはしたくない、と理由付きで言う、翔子さんが首を傾げます

「なぜ、Cクラスはうちの宣戦布告してきたか・・・たぶんですけど、これはFクラスがうちの仕掛けるようにしたのでは、と思います」

「Fクラスが？まさか・・・」

私の言葉に木下さんがそう言う

「FクラスはDクラス、Bクラスと戦争して・・・Bクラスに勝つたら、ほぼ間違いなくうちのクラスに攻め込むつもりだと思います。そしてうちのクラスに勝つために必要なのが、情報です・・・代表でありながらほぼデータのない、私の情報・・・」

「なるほどね・・・情報がないなら情報を出させればいい、か・・・」

私の考えに工藤さんが頷いて言います

「なので、下手に休戦を持ちかけると、Aクラスが大したことがないと思われてしまつて・・・FクラスだけではなくEクラスも仕掛けてきたりとか・・・」

「Eクラスは毎年部活をがんばつてる生徒が多くて、試召戦争には興味がないみたいだけど・・・確かに、勝てそうかもって思われたら仕掛けてくるかもしれないわね」

私の考えに、木下さんが意見を言い・・・

「Aクラスは試召戦争に何もメリットがありませんので、できれば

それは避けたいんです・・・」

「確かに勉強時間が減るのはね・・・」

さらに私の考えに同意してくれました

私個人が無能として見られるのは構いませんが、そのせいでこれ以上クラスに迷惑をかけるのは・・・

「・・・」

「うーん・・・」

翔子さんも木下さんも工藤さんも黙ってしまい、私も考え込みます

「すいません代表ちよつといいですか？・・・代表？あの・・・」

「華織、呼ばれてる」

「え？あ、すいません・・・なんですか？えつと・・・」

「佐藤です。佐藤美穂・・・代表に用があると、Bクラスの代表が来てます」

まだ呼ばれ慣れていない代表という呼び方で呼ばれ、私の反応が遅れる・・・さらにその呼んだ生徒の名前も忘れてしまい、私は申し訳ない気持ちで一杯になる・・・

そのとき、私の頭の中にふと1つの案が浮かびました

「あの佐藤さん、私はお手洗いに行ってるとでも言って、いないこ

とにしてください。要件は木下さん聞いてくれませんか？」

「え、あ、はい・・・わかりました」

私は小声で佐藤さんと木下さんにそうお願いします

「・・・何か浮かんだの？」

「ええ、少し、卑怯な方法かもしれませんが・・・」

「この際、手は選んでられないよ。っで、どんな手なの？」

2人が私から離れて行くと、翔子さんがそう質問してきて、私があまり良い手ではないというと、工藤さんがどんな作戦か聞いてきます

「それはですね・・・」

7話

そして翌日、金曜日・・・時刻は8時30分

昨日のBクラス代表の用件は、BクラスはAクラスとの試召戦争の準備をしている、という警告のようなものでした

Fクラスに勝ったことで勢いの乗ってAクラスにやってきたのかと思いきや、女装をしてそんなことを言ってきたと木下さんが言ったので、どうやら負けて命令されての行動らしいです

しかも、Fクラスはまた設備の交換を行わず、戦争もDクラスと同じように、和平交渉による終結ということになっている模様で・・・だから、敗戦クラスの3ヶ月間の宣戦布告禁止というルールが適用されない・・・

幸い言うべきか、先にCクラスから宣戦布告されていて、宣戦布告はされませんでしたけど・・・ん？あれ？Cクラスをうちに仕掛けさせたのもFクラスだと思ったんだけど・・・なのに、Bクラスにそんなことさせるなんて・・・いいや、今は目の前のことに集中しよう・・・

「えっと・・・今日はCクラスとの試召戦争です・・・それで・・・私の勝手な都合ですが・・・今日私は午後から早退するので2時間半以内に戦争を終わらせなければいけないんです・・・」

教壇に立ち、緊張しながらもクラスメイトに事情を話す・・・クラスメイトは、マジかよ・・・とか、無理でしょ・・・とか呟いている

「納得いかないかもしれませんが・・・お願いします！私に協力してください！」

私はそう言って頭を下げた

『・・・』

教室が沈黙に包まれて・・・

「あの、藤堂代表」

「はい、なんですか・・・えーっと・・・」

「久保です」

「すみません、久保君。どうぞ」

1人の男子生徒が挙手し、私が反応しますが、まだ名前を覚え切れていないので詰まっしまい、その生徒が名乗り、私は謝ってから、意見を聞く

「それが代表の意向なら僕達は従います。しかし、いくら下位クラスでも2時間半というのは、無策でできることはありません。何か作戦はあるのですか？」

「ありがとうございます・・・はい、一応考えてあります。では、これからその作戦の説明をします」

私は作戦の説明を始めた

そして作戦の説明も終わり午前9時・・・

キンコーンカーンコーン

「それでは男子の皆さんお願いします」

ガラツ×2

Aクラス教室の2箇所の出入り口から男子が勢いよく出て行く・・・そして廊下いっぱいに広がってバリケードを作る・・・1つ目の作戦です。これでCクラスの生徒の移動範囲はCクラス教室とその向かいにあるDクラスの教室だけになった。負けそうになったときに下手にあちこち逃げ回られると制限時間があるこちらが不利になってしまいますからね・・・最初に逃げ道を塞がせてもらいます

「では女子の皆さん行きましょう」

廊下の封鎖、そしてCクラスの生徒を全て隔離することができたことを確認し、女子全員でCクラス側の出入り口から出て・・・

『Aクラス女子全員が、Cクラス生徒全員に数学勝負を申し込みます・・・サモン！』

Aクラス 女子生徒全員（20名） 数学 計6352

男子が作ってくれたバリケードの前に展開し、一斉に召喚獣を呼ぶ

「な・・・いきなり女子全員だと・・・？そんなわけがない・・・
代表は女子なんだろ？いきなり前線に出てくるわけがない・・・」

「いや、ちよつとまで、試召戦争中、クラス代表の位置情報は公開
されているはず・・・その情報だと・・・Aクラス教室付近の廊下
だと？！」

Cクラスの生徒達が少し混乱する・・・

「ならここで討ち取ればこっちの勝ちだ！サモン」

『サモン』

混乱から立ち直りCクラスの生徒達が召喚獣を呼び出した

Cクラス 生徒（14人） 数学 計2088

そして戦闘が開始される

点数の高さと数の力でCクラス生徒を次々に戦死させていく・・・
そして徐々に後ろのバリケードと一緒に前進して、行動範囲を狭め
ていく

「くっ・・・戦力が足りない・・・援軍求む！！」

圧倒的戦力の差にCクラスの生徒の1人が援軍を呼ぶ
お、これは好都合かな・・・代表率いる本隊が出てくるなら早く片
付くし・・・

「せめて代表がどれかわかれば・・・」

別のCクラス生徒の1人がそう呟く・・・

そう、これが私が考えた作戦の2つ目、速く勝つにはやはり点数の高い生徒が積極的に前に出て行くことが必要になる。Aクラスで1番点が高いのは学年主席の私なので、私が前線に出る・・・

代表が前線に出たら危なくないか？と思うかもしれないが大丈夫・・・私は代表だけどまだAクラスの生徒の名前を覚え切れてない。しかしそれは他のクラスの代表も同じではないか？と思う、そんな中他のクラスの生徒である私のことなど覚えている余裕はない。試召戦争中は公開されるクラス代表の位置情報も、同じ位置に複数の女子がいれば結局誰が代表なのかわからない・・・

つまり、Cクラスの生徒は、名前しかわからない私のことを、見つけることができないのです

そして1時間後・・・午前10時

Cクラスの生存している生徒を全員、Cクラス教室内に押し込むことに成功する

もうすでに戦力の75%以上を失っているCクラス、こちらでも数学1本を無補給という無理矢理なところがあつたので、数人の戦死者を出しています・・・

しかし、こちらにはまだ全戦力の50%しか出していません・・・
Cクラス教室の出入り口を塞ぐのに数人の男子生徒を残し、それ以外の男子生徒も戦闘に参加してもらい、一気に残りの生徒を討っていきます

「もーっ！いったいどれが代表の召喚獣なのよっ！！」

「というか、なんで敵の総大将がわからないんですか？そんなのでよく戦争を仕掛けようだなんて思いましたね・・・」

これなら、バリケードを作るだけで、私が前に出る必要なかったです・・・Fクラスを基準に考えてた私の労力を返して欲しい気分です・・・

「何よアンタ？！まさか代表じゃ・・・」

「さあ？どうでしょうね・・・」

「まあいいわ！倒せばわかるんだからっ！！サモンっ！！」

「サモン」

召喚獣が出てきます・・・

私の召喚獣は着物姿で、右腕を袖に通さず、右の肩の辺りが大きく露出しています・・・胸はサラシみたいなもので隠していますが、着崩しすぎているような・・・

武器は右手に装着している5本の鋭い爪です

Aクラス 藤堂華織 数学 504
VS
Cクラス 小山友香 数学 151

そしてその頭上に教科と点数が表示される・・・名前は表示されないでまだ私が代表だとはバレて・・・

「な?!その点数・・・アンタが代表ね?!」

バレました

まあこの作戦が使えるのは今回くらいですし、問題ないですね・・・

「当たりです。私がAクラス代表の藤堂華織です。では腕輪起動・・・」

私は召喚獣の腕輪を起動させる・・・腕輪とは単教科での得点が400点以上の召喚獣に特殊能力を与えるもの・・・そしてそれを周りに示すものです。特殊能力は召喚者ごとに違うようで、私の場合は・・・

ザクツ・・・

私の召喚獣が一瞬消え、次現れたときには自らの武器の爪を相手の召喚獣の胸に突き刺している状態・・・

そして相手の召喚獣が消え・・・

「戦争終結・・・勝者Aクラス」

戦争が終結しました・・・

えつと・・・今の人がCクラスの代表だったんですね・・・知りませんでした・・・

8話（前書き）

姉テス以来の主人公以外の視点

ちなみに話の初めに指定が無い場合は主人公視点です

8話

「えっと・・・皆さんお疲れ様でした。私の勝手な都合で無理のある作戦につき合わせてしまつて・・・戦死された方、本当に申し訳ありませんでした・・・」

Cクラス戦が終結して十数分後・・・現在10時30分

戦死した生徒も補習室から戻つてきて、皆に向かつて頭を下げ、慰労と謝罪の言葉を口にする・・・
今私にできることはそれしかないから・・・

「いや、でもさ・・・2ランク下のCクラスとはいえ1時間ちよつとで勝つちゃうなんて・・・結構凄くない？」

「そうね・・・中々の早期決着だわ」

工藤さんと木下さんがそう言う

「では私はもう早退しますね。今日はもう試召戦争もできないですし・・・問題ありませんよね？」

「え？でもまだ午前中の授業が・・・？」

「帰れるときに帰っておこうかと・・・時間直前になって何か来られても困りますし・・・」

「はは・・・確かに・・・」

私の言葉に工藤さんが苦笑し納得する

「・・・戦後処理はどうする？・・・それと、一応何かあったときのために代表の代理は？」

「戦後処理・・・って何をすればいいんでしょう？」

書類を書いたりするんでしょうか・・・？

「・・・なら、アタシがやっておきます。アタシが原因で起こった戦争ですし・・・」

「すみません、木下さん・・・ではお願いします。お土産、買ってきますね」

木下さんがそう言うので、そのまま任せて私は荷物を持って教室を出た

side：坂本雄二

「チツ・・・まさか1時間ちよつとで終わらされるとはな・・・こりゃ一筋縄じゃ行きそくにねえな・・・」

「あれ？代表が荷物持って教室から出て行くよ？」

「帰るみたいですね・・・」

Aクラスの教室から出て行く学年主席を、俺は明久達と観察する
あれが俺達Fクラスの倒さなければならぬ最大の敵・・・本当な
ら翔子で、あの問題を使って楽に倒せる予定だったんだが・・・

「まあいい、行くぞ」

「え？でも、代表がいないんじゃ宣戦布告は・・・」

「アホ、こういうときは代表の代理がいるだろうが、そいつに話を
つけばいいだけのことだ」

代表だって人間だからな、病気にもなれば、学校を早退しないとい
けない事情の1つや2つくらい入るだろ・・・そういうときのルー
ルは当然決まっている・・・まあ、バカのお前は病気にもならない
し、年中暇なんだろうがな・・・

「なんだろう・・・凄いバカにされた気が・・・」

「いつものことだろ？気にすんな」

「キシヤアアアアアアアアアア！！」

奇声を上げて飛び掛ってくる明久を無視して、俺はAクラス教室の
戸を開け・・・

「Fクラス代表の坂本だ。俺達Fクラスは、Aクラスに試召戦争を
申し込む」

開口一番、そう言い放つ

side: 木下優子

「じゃあ、さつさとやることやっちゃいますか・・・Cクラスは設備のランクダウンでいいですか？」

「・・・うん、それでいいと思う」

代表が早退し、アタシはCクラス戦の戦後処理について、クラスの意見を聞く

それに霧島さんが返してきて、他のクラスメイトも異論はないようだし終了、と・・・

ふっ・・・これでアタシの愚弟が起こした問題も解決ね・・・

さて、あのバカにはどんなお仕置きをしようかしら？アタシだけじゃなく、Aクラスまで巻き込んで・・・顎でも外してしゃべれないようにしちゃうかしら？

「Fクラス代表の坂本だ。俺達Fクラスは、Aクラスに試召戦争を申し込む」

間違っって首折っちゃうかも・・・

side:-

「ついでに勝負の方法について交渉したい」

「交渉？」

坂本雄二の言葉に木下優子が訝しげに返す

「ああ・・・こちらとしては一騎打ちの3本勝負という方法を提案する」

「一騎打ちの3本勝負・・・？」

「そうだ」

「何が狙い？」

「それはもちろん、Fクラスの勝利だ」

木下優子の疑問の言葉に坂本雄二は当たり前のように答える

（俺が翔子に勝って1勝、ムツツリー二が向こうの代表に勝って2勝、もしどちらかが負けても予備として姫路が久保辺りと戦って勝てばうちのクラスの勝ち・・・我ながらいい作戦だ・・・）

（3本勝負・・・ならあつちは2回勝てるカードをもってるってことよね・・・姫路さんと・・・誰かしら？とりあえず・・・）

「却下よ。面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはあ

りがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないの……」

（却下ね。それで相手の反応を見る）

「賢明だな。ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

（ここまでは予想通りだな……）

「1時間で済んだわ。威勢だけで呆気ないものよ」

（アンタ等が仕向けたくせによく言うわ……）

「流石はAクラスか……ところで、Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……前来ていたあの……」

坂本雄二の言葉に木下優子が顔を青くなる

（ゲエエ……思い出しちゃった……）

「ああ、あれが代表をやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだのようだが、さてどうなることやら」

（フツ……女装が効いてやがるな……これに関しては明久に感謝しねえとな。さてどうするか……？）

「来たら来たで戦うだけよ。Aクラスに試召戦争の拒否権はないん

だし・・・」

「そうか・・・ならDクラスとも戦うんだな？」

（まだ拒否するとはな・・・でもこれならどうだ？）

「問題ないわ・・・」待つて優子・・・」・・・霧島さん？」

「・・・華織はきっとそれを望まない・・・」

坂本雄二の言葉を木下優子が突っぱねようとするが、途中で霧島翔子が止めた

（確かに昨日、そう言ってたわね・・・）

（ナイス翔子・・・しかし、華織、か・・・ずいぶん仲良くなったようで・・・）

「うーん・・・なら、3本勝負じゃなくて、5本勝負でどう？それ
で3回勝ったクラスの勝ち、っていうのにしましょう」

（これなら最悪2回勝たれてもまだ大丈夫だし・・・）

「そうだな・・・いいだろう。その条件で・・・」

（まあ姫路が勝てばいいだけだし問題ないな・・・）

「その代わり勝負の内容はこっちで決めさせてもらうぞ？それくらの
のハンはあってもいいだろう？」

（これでさらに勝利は確実なものに・・・）

「え？うーん・・・」

（そっちから挑んどいてハンデってふざけてるのかしら？Aクラスの生徒だって苦手科目はあるのよ？そんなの受けるわけ・・・）

「・・・受けてもいい」

「霧島さん？！」

木下優子の予想に反して、霧島翔子が坂本雄二の提案を受け、木下優子は驚く・・・

もちろん霧島翔子もただでそれ受けるつもりはなかった・・・

「・・・その代わり、条件が2つある」

9 話

Side:-

「・・・その代わり、条件が2つある」

「条件が2つだと？」

「・・・そう」

霧島翔子の言葉に坂本雄二が訝しげに反応する・・・先ほどの木下優子のように・・・

「・・・まず1つ目、対戦前に華織に謝って・・・2つ目、負けた方は何でも1つ言うことを聞く・・・」

「2つ目はいいが1つ目はどういうことだ？俺達はそっちの代表に何かした覚えはないぞ？」

霧島翔子の出した条件に、坂本雄二は理由を尋ねる

「よくもまあそんなことを言えるわね・・・Cクラスとの戦争、Fクラスの差し金でしょ？アタシ達が知らないとも思っただの？」

「・・・華織は今日、法事があって午後から早退することになった・・・なのに昨日、宣戦布告されて・・・1日中悩んで・・・今日もクラスの人に作戦に協力してくれるように頭を下げても頼んで・・・終わったらまた頭を下げて・・・」

「転校してきて数日しかたっていない、クラスメイトの顔と名前も覚えきれていない、右も左もわからないでいきなり代表になって……そんな中で、だよ？……ボクは代表じゃないから代表の責任とかってわからないけど、転校生の気持ちはわかる……ボクも1年の終わりに転校してきたから……転校してすぐって凄く不安なんだよ……最初の印象次第でこれから大きく変わるから……」

それを、木下優子、霧島翔子、さらに工藤愛子が説明する

その説明に、Fクラスの生徒だけでなく、Aクラスの生徒も気まずそうな顔をする

「……そもそも華織は……代表が何をするのかも知らなかった……」

「じゃあ今朝のあの行動は……代表としてではなく、一生徒としてだったと……？」

Aクラスの生徒達を代表するように久保利光が聞いた

「恐らく藤堂さんにとって代表は……日直程度の認識じゃないかな……少なくともクラスメイトに命令できる権力を持つてるとは思っていないよ……」

『なっ……』

工藤愛子の言葉に、Aクラスの生徒が驚き、声を漏らす……

「……雄二……華織に迷惑をかけないで……もしこれ以上華織に迷惑をかけるなら……私は雄二を軽蔑する……そして……」

「

霧島翔子は真っ直ぐ坂本雄二を見て・・・

「・・・華織の友達として、私は雄二を二度とそんなことができないように調教する」

はつきりと決意のこもった声で言いきった

「・・・」

坂本雄二が気迫に押されて黙り込む・・・

『・・・』

いつもなら、ツッコミの1つでも入れている他のFクラスの生徒も黙り込んだ・・・

「わかった・・・条件を呑もう・・・」

そして、坂本雄二は静かに口を開き、条件を受け入れることを伝えた

「あ、やっぱり勝負内容は2つ、うちに決めさせてくれないかしら？」

氣勢がそがれたFクラスの生徒達に、木下優子はさすが自分達が有利になるように条件を変える

（空気読めとか思われるかもしれないけど・・・このまま決定権を5つ全て持ってかれたら、藤堂さんに顔を合わせらんないわ・・・）

「・・・妥当なところか。交渉成立だな。開戦はいつにする？」

それを坂本雄二は受け入れて、これ以上条件が悪くならないように交渉を終了させ、次の交渉内容に移った

「・・・とりあえず火曜日の午前10時で・・・華織の予定次第では変更の可能性あり、ということにしておいて・・・」

（・・・今日向かって前泊する必要があるということは帰りは日曜日の夕方以降になる可能性もある・・・なら月曜日は外して1日余裕を持ったほうがいい・・・）

「わかった・・・」

霧島翔子は藤堂華織の負担を考え、開戦日時を翌登校日の月曜日ではなく火曜日の午前にし、さらに変更可能という条件も盛り込む

坂本雄二は異議が無いのか、異議を唱える気が無いのか、それを了承する

Fクラスの生徒達がAクラスの教室から出て行き・・・

「でもよかったのかな・・・？宣戦布告は仕方ないとして、試合方法や命令権のこと・・・勝手に決めちゃって・・・」

工藤愛子が不安そうに言う

「・・・大丈夫、このFクラスとの戦争・・・雄二がどんな手を使
つてきても・・・私が全て潰してみせる・・・そして私達が必ず勝
つ・・・」

「霧島さん、向こうの代表とは・・・」

それに霧島翔子のはつきりと勝つと言い切り、そんないつもとは少
し違う霧島翔子の様子に木下優子が坂本雄二との関係を聞いた

「・・・小学校のときからの幼馴染・・・そして、私の好きな人・・・」

その疑問に霧島翔子は特に恥ずかしげもなくそう答える

「・・・でも、だからこそ、手を抜くつもりはない・・・私は華織
のために絶対に負けない・・・この思いが上手くいくようにって応
援してくれた華織のために・・・」

「そうですね・・・アタシも、もし試合に出れたら、何が何でも勝
ちに行こうと思います」

（恐らくこれに勝てば試召戦争は3ヶ月間無い・・・あの子の肩の
荷を降ろしてあげるためにアタシができることはそれくらい・・・
だから・・・）

（理想は藤堂さんまで回さずにストレートで勝つことだね・・・だ
から・・・そのためにボクができることは・・・）

（誰が出るかはまだ決まってい、でも私が試合メンバーに選出さ

れるかはわからない・・・けど・・・あの子の為に何か・・・だから・・・

（学年3位に甘んじているようではダメだな・・・僕ももっと上を目指さないと・・・だから・・・）

（（（もし出れたなら必ず勝つ）））

成績上位者達が決意を新たにFクラス戦への闘志を燃やし・・・

（（（（上位の10人並みの圧倒的な点数を自分達も取れるようになれば・・・宣戦布告してくるクラスなんて無くなるはず・・・もっとがんばろう・・・））））

そして他のAクラスの生徒達の気持ちは1つに・・・

10話

お父さんの七七日四十九日の法要も終わり、日曜日のお昼くらいにこちらに帰って来て、月曜日・・・

今日もお婆ちゃんの車で一緒に学園まで来たので、教室に1番乗り・・・かと思っただんですが・・・

「あ、おはようございます、藤堂さん」

『おはよー藤堂さん』

『おはようございます、藤堂さん』

教室の戸を開け、中に入るとすでに半分近くの生徒がいて、自習をしていた。そして、1人の生徒が私に気付き、挨拶をしてきて、他の生徒も私に挨拶をしてきた・・・

「あ・・・お、おはようございます・・・」

私はその光景に戸惑いながらも挨拶を返す・・・皆さんいつたいうしたんでしょう・・・？

「えと・・・金曜日は色々すいませんでした・・・これ、向こうで売っていたお土産のお菓子です・・・1人1つずつしかありませんが・・・どうぞ・・・」

『そんなの気にしないでいいよ・・・ありがとう、藤堂さん。頂くね』

『ありがとうございます、藤堂さん・・・頂きます』

私が金曜日のことを謝って、ホテルの売店で買ったお土産を出す・・・
なんか物でごまかしてる気がして悪い気がする・・・

それにしても、皆さん今日は私のことを代表って呼ばないですね・・・
なんででしょう・・・？

「・・・華織、おはよう・・・」

「おはようございます、翔子さん」

そのとき、翔子さんが教室内に入ってきて、挨拶を交わす

「皆さん、今日はいつもより早いですね・・・？なにかあったんですか・・・？」

『！（ピタッ）』

私の言葉にクラスメイトの動きが止まった・・・この空気が凍った感じ・・・これが地雷という奴ですか・・・迂闊でした・・・

「・・・金曜日、華織が帰ってすぐ、Fクラスが宣戦布告してきた・・・」

「そうですか・・・」

今日あたりにくると思ったんですが、金曜日に来るとは・・・

「・・・それで、Fクラスは試合方法を指定してきた」

「試合方法、ですか？」

「・・・Fクラスが提案してきたのは一騎打ちの3回勝負・・・それを優子が交渉して、5回勝負になった・・・勝負方法の決定権はこちらが2回、Fクラスが3回・・・」

なるほど、クラスの総合力で勝てないと踏んで、個人個人での勝負に賭けたということですか・・・向こうの提案は3回勝負なら2回は勝てるつもりでいる・・・いや、5回勝負を了承したということは3回全て勝つ算段だったということでしょう・・・1人は、姫路瑞希さんかな？あとの2人は・・・1人はわかりませんがもう1人はたぶんあの人で、私に当てるつもりだろう・・・あの子の前に私は立てないから・・・ん？ちょっと待って・・・

「あの・・・それってつまり、代表が出なくてもいいってことですか・・・？」

「・・・参加メンバーについては何も言われていない・・・」

なら、私が出なくてもいいってこと・・・
私無しで、何とか勝ってもらいましょう・・・

最低の代表ですね・・・私・・・

そして8時15分、いつもより早くクラス全員が登校してきて揃ったので、試召戦争の話をします

「えっと・・・皆さんはもう知っているとありますが、明日の午前10時より、Fクラスとの試召戦争が行われます・・・」

「・・・華織、日にちの変更ができるようにしたいけど、それで確定と伝えていい？」

「はい・・・問題ないです。ありがとうございます、翔子さん」

翔子さんの確認に私は返事をしてお礼を言います

「試合メンバーは当日、相手の出方を見ながらその都度決めようと思います・・・総合得点で上位5位くらいまでの人、何かの教科で学年上位3位以内にある人、お手数ですがこの後、教科と得点、そして名前をお願いします」

私が試合メンバーの選考基準を発表する

たった3人負けてしまうだけでクラス全体が負けてしまう・・・慎重に選ばないと・・・

「その他、召喚獣操作に自信がある人やここ1番の勝負強さがある人、などなど・・・これは自薦他薦を問いません、自薦の場合は希望教科、他薦の場合その人の名前をお願いします・・・他薦は匿名でもいいですが、本人に確認をとるので早めをお願いします。締め切りは明日9時とします」

もちろん点数のみに拘るつもりも無い・・・勝負は時の運とも言いますしね・・・

「それでは、なにか質問や意見、要望等がありますか？」

「はい」

「はい久保君、どうぞ・・・」

久保君が挙手したので、私は当てて、意見を聞く

「補給試験を受けたいので、申請をお願いします」

「あ、私もお願いします」

「ボクもお願い」

他にも数人補給試験を受けたいと言ってきたので、誰が何の教科を受けるのかを聞いてメモを取っておいた。久保君が現代社会で、佐藤さんが物理、工藤さんは保健体育、他の方はＣクラス戦で消費した数学、と・・・

そうして話を終えて解散し、私が補給試験の申請を職員室に行って済ませてくると、ノートの１ページがちぎって置いてあり、それに先ほど私が指定した人が名前と教科と点数が書いてあった、恐らく私の手間を省くためでしょう・・・ありがたいです

その後、自薦他薦のほうは無く、皆やつぱり出たくないですよね・・・っと翔子さんにこぼしたところ、あまり手札が多すぎると私が選ぶのに苦労するから遠慮しているだけ・・・と言われた

皆の気遣いに感謝しながら、私はこちらの手札を確認する・・・

〃〃〃

総合2位 霧島翔子 4498点

教科別順位 保健体育以外学年2位

備考 保健体育は学年4位、日本史が保健体育を除いた他教科に比べて10点くらい低い

総合3位 久保利光 3997点（補給試験中のため参考数値）

教科別順位 現代社会、日本史、世界史の学年3位

総合4位 木下優子 3851点

教科別順位 現代国語、古典、英語の学年3位

総合5位 佐藤美穂 3804点（補給試験中のため参考数値）

教科別順位 物理、化学、数学の学年3位

保健体育学年2位 工藤愛子 446点（補給試験中のため参考数値）

注）順位や点数は振り分け試験時のもの

〃〃〃

うーん・・・困りました・・・先ほど言った条件が被りすぎて当てはまった人が5人しかいません・・・
ちなみに私は・・・

藤堂華織 総合5083点

教科別順位 保健体育以外学年1位 保健体育学年3位

となっています・・・

まだ補給試験の結果待ちなので、教科別順位のほうは変わってくる可能性がありますが・・・

学年3位の大体の目安は390点以上・・・宣戦布告された金曜日
から土日もずっと勉強したら届くかもしれませんが、現在3位の方
も抜かれまいと勉強してるわけで・・・唯一保健体育3位の私は土
日は法要で勉強できてませんが保健体育は受験に使いませんからね
・ ・ ・それに学年3位といっても私の保健体育の点数は400点以上
ですし・・・

ん？そういえば、保健体育の1位って誰なんでしょう・・・？この
クラスにはいないようですが・・・

447点以上って、体育の先生とか目指してる人かな・・・？

10話（後書き）

Aクラスの上位ランカーの成績は勝手に決めました

11話

翌日、火曜日の午前10時

場所は私達Aクラスの教室

「では、Aクラス、Fクラスとも両陣営、準備はいいですか？」

戦争の立ち会い人は、私達Aクラス担任であり、学年主任でもある
高橋先生

学年主任の先生は教員の中で唯一総合科目も含めた全ての教科を承認し、召喚フィールドを展開することができます

その高橋先生がAクラス、Fクラスに確認をとります

「・・・はい・・・問題ありません・・・」

「・・・お前の見た目以外はな・・・なぜ顔を隠している？」

それに私が返事をして、Fクラスの代表・・・初日に桃色の髪の子生徒と話していた男子生徒・・・が私にツツコミを入れました

私は今、タオルを顔と頭に巻いて隠しています・・・理由は、あの人の視界の中に、私が入っているから・・・

私だとわからなければ、鼻血は出ないのでは？と思って・・・顔だけでは不安だったので、頭にも巻いて髪型もわからなくしました

「えっと・・・登校中に転んでしまつて・・・顔に怪我を・・・」

「え？さっきまで普通に顔出してたよね・・・？」

あ、工藤さん・・・バラさないで・・・

「・・・したということにして置いてください・・・」

「あ、ああ・・・まあいいが・・・」

私の言葉にFクラスの代表は不審そうな表情をしながらも、了承してくれた

「・・・雄二、約束」

「わかつてる・・・あの・・・その、だな・・・」

翔子さんがFクラスの代表に何かを催促し、Fクラスの代表が気まぐすそに私の話し始め・・・

「すまなかった」

そう謝罪の言葉を口にして、私に頭を下げました

「え・・・？あの・・・何のことでしょうか・・・？」

何も知らない私は当然戸惑う・・・

「CクラスをAクラスに仕掛けさせたのは俺達Fクラス・・・いや、俺がやったことだ」

やっぱりそうでしたか・・・

「言い訳をするようだが、Bクラス戦の初日が終わってすぐ、Cクラスが俺達に仕掛けてきそうな空気になってたんだ・・・だから矛盾先を変えるために秀吉を使ってAクラスに・・・」

なるほど・・・そういう経緯だったんですか・・・私の情報を出させるためじゃなかったんで・・・

「ついでに代表のお前のデータが手に入れば、と・・・」

あ、やっぱりそれは思ってたんですね・・・

「はあ・・・事情はわかりました。いいでしょう・・・本当は私だけでなくクラスメイト皆に謝って欲しいですけど・・・試合前ですし・・・」

この人も代表で、自分のクラスの生徒達に対する体面というものがあるでしょうしね

「すまんな、助かる」

「そう思うなら手心を加えてほしいですね」

「ふっ・・・それとこれとは話が別だ」

そんなやり取りをし、私とFクラスの代表がそれぞれの陣営に戻ります

「それでは、1人目の方、前に・・・」

高橋先生が試合の進行をします

さて向こうは誰が・・・

「え？木下さん・・・？なんで向こうに・・・それになんで男装を・・・」

「わしは男じゃー!!」

なぜか男子の制服を着た木下さんがFクラスがら出てきて、私は疑問を口にする、木下さんが怒って変な言葉使いで声を上げた

「藤堂さん、あれは双子の弟の秀吉です、アタシはここにいます」

「へっ？あ・・・すいません木下さん」

真横から声をかけられ少し驚きながら横を見ると、ちゃんと女子の制服を着ている木下さんがいました・・・双子だったんですか・・・よく似ていて、同じ格好したら見分けがつきませんね・・・Cクラス代表を怒らせたのはこの人ですね・・・

「藤堂さん、アタシが出てもいいかしら？必ず勝ちますので・・・」

「え・・・あ、はい・・・お、お願いします・・・」

木下さんが気迫のこもった声でそう言ってきて、それに押された私は何も考えずに承諾してしまう・・・

「さて、秀吉・・・ちょっとこっちにこようか・・・」

「うん？わしを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

木下さんが木下君をつれて廊下に出ていきます

『姉上、勝負は・・・どうしてわしの腕を掴む?』

『随分と好き勝手してくれたわね!! 覚悟しなさいよ!!』

『なっ?! それはもう雄二が謝罪をしたじゃろ?!』

『ア・ン・タ・は、してないでしょ!! アタシにも! 藤堂さんにも
!!!』

『ギャアアアアアアアアアア!!』

いったい何が行われているのでしょうか・・・?

「・・・秀吉は急用で帰ったわ。藤堂さん、秀吉には後日ちゃんと謝罪をさせますので・・・」

「あ、は、はい・・・わかりました・・・」

木下さんは怒らせないようにしましょう・・・

「さて・・・誰か別の人を出してくれないかしら?」

「いや・・・こっちの不戦敗でいい」

木下さんがFクラスの代表にそう聞くと、Fクラスの代表は誰を出しても無駄と判断したようです

ですよね・・・そんな赤い何かをベツタリと付けた顔で言われてたら・・・

Aクラス 木下優子 WIN

VS

Fクラス 木下秀吉 DEAD

高橋先生がパソコンを操作し、プラズマディスプレイに結果が表示
されました

あの・・・その冗談は、今の私にはきついのですが・・・

12話

「では、次の方どうぞ」

高橋先生が次の対戦に移ろうとします

さて向こうは誰が・・・姫路瑞希さんなら久保君か翔子さんを、それ以外なら教科の決定権を使用して工藤さんの保健体育か佐藤さんの理数系という手で・・・

「よし。頼んだぞ、明久」

「え?! 僕?!」

Fクラスから出てきた(出させられた?)のは明久と呼ばれる男子生徒・・・確か試召戦争の言いだしっぺで放送で犠牲になった生徒でしたね・・・

「あの生徒は何が得意なのか・・・うーん・・・」

「吉井君は観察処分者で、少しくらいの点数差ならをひっくり返せてしまうくらい召喚獣の操作が得意です」

私が次の人を決めかねていると、久保君が相手の生徒の情報をくれました

観察処分者が何かは知りませんが、なるほど、召喚獣の操作技術ですか・・・なら・・・

「教科の決定権を使って、工藤さんの保健体育で・・・」

単教科で400点を超えていて腕輪の使える工藤さんなら、そうそうひっくり返されることはないでしょう
しかし・・・

「ゴメン藤堂さん・・・向こうのクラスに保健体育の学年1位がいるから、ボクはまだ・・・」

工藤さんはそう言っただけで難色を示します

まさか保健体育の学年1位がFクラスにいたとは思いませんでした・
・

「そうなんですか・・・？」

「うん・・・名前は知らないけど、あだ名がムツリーニって言うてね・・・保健体育が総合得点の8割を占めているらしいんだ」

そんな生徒がいるんですか・・・ちゃんと情報を集めておけばよかったですね・・・

「私が出ます」

「佐藤さん？でも相手は・・・」

「大丈夫です。どれだけ操作が上手くても、私は勝ちます」

確かに選択肢は佐藤さんしかありませんが・・・私もそこまで操作に自信があるわけではないです・・・

「Aクラス、対戦者は前へ」

「わかりました、お願いします佐藤さん。教科の指定権も使ってください」

迷っている私に高橋先生から催促の言葉がかかり、私は覚悟を決めて彼女を送り出します

「はい、ありがとうございます・・・行ってきます」

佐藤さんが前に出ていき・・・

「対戦科目の選択権を使います。科目は物理でお願いします」

「わかりました。科目物理で召喚フィールドを承認」

佐藤さんの言葉を受けて、高橋先生が物理で召喚フィールドを展開する

「え？え？嘘？ホント？ムリムリだって！！雄二、やっぱり僕じゃ勝てないよ！」

相手の生徒がそれに焦りだし、代表に交代をお願いしている

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

代表がそう言葉をかけます

「ふう・・・やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前

の本気を見せてやれ」

それを聞いて、対戦者の生徒が演技っぽい調子で返し、さらに代表が鼓舞させます

「おい、吉井って実は凄いヤツなのか？」

「いや、そんな話は聞いたことないが」

「いつものジョークだろ？」

Fクラスの陣営からそんな声が聞こえます・・・あれ？もしかしてそこまで気にしなくてもよかったのかな・・・？

「吉井君、でしたか？あなた、まさか・・・」

佐藤さんが警戒するように問いかける

「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃいない」

え・・・？これはまずいのでは・・・

「それじゃ、あなたは・・・」

「そうさ、君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕・・・」

そして相手の生徒は、大きく息を吸い込んで・・・

「・・・左利きなんだ」

『・・・』

教室中がシーンとなります

「利き手の違いでどれほど点数に差が出るのかわかりませんが・・・私も本気を出します。サモン」

「あ、はい・・・サモン」

佐藤さんが冷たく返して召喚獣を呼び、相手の生徒はイマイチ受けが悪かったな・・・という表情で同じく召喚獣を呼びます

Aクラス 佐藤美穂 物理 402

VS

Fクラス 吉井明久 物理 62

返して・・・私が対戦者を選ぶのに悩んだ時間を、佐藤さんが負けるかもって心配した時間、労力を・・・

佐藤さんは腕輪を使わず無傷で相手の召喚獣を倒しました

「勝者Aクラス」

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

相手の生徒がFクラスの女子生徒に怒られながら殴られています
フィードバック？痛んでる？どういうこと？

「翔子さん、あの人はなんで召喚獣のダメージを自分も受けているのですか？」

「・・・観察処分者は、召喚獣で雑用を行わせる罰を受けている者の肩書き、罰だから召喚獣の疲労や感覚を召喚者にフィードバックするようになっている」

だから雑用をさせられた分、召喚獣の操作は他の人より上手くて、でも罰だから召喚者もダメージを受けるのですか・・・

あまりこういうのは好きではないですね・・・罰でやらせる雑用ならば自分の体を使ってやらせるべきだと思います・・・それなら体力や筋力も鍛えられますし・・・頭がダメなら体を使い、という言葉もあります・・・

「よし皆、勝負はここからだ！」

「ちょっと待った雄二！お前、僕を全然信頼してなかっただろ！」

「信頼？何ソレ？食えんの？」

向こうの代表は何がやりたいんでしょう？

「では、3人目の方どうぞ」

「・・・（スック）・・・教科選択権の使用、保健体育」

高橋先生の進行の言葉に、とうとうあの人・・・土屋康太が立ち上がり教科を保健体育に指定した

・・・なぜか鼻声で・・・まさか、私が顔を隠した効果はなかったってことでしょうか・・・

「とうとう出たね、保健体育学年1位・・・」

それを見て工藤さんがそう洩らす・・・

まさか彼だったなんて・・・でもどうしてそんな成績に・・・

「藤堂さん、ここはボクが出るね。点数では敵わないかもしれないけど、負けないようにがんばってみる・・・」

工藤さんがそう言うて前に出ていく

「保健体育の学年首位・・・その寡黙な性格から付いたあだ名がムツリーニ・・・寡黙なる性識者か・・・でもね、ボクだって保健体育が得意なんだよ・・・キミと違って、実技でね・・・」

最後のほうを色っぽい口調にして工藤さんがそう言う・・・相手の集中を乱す策ですか・・・

その言葉に、Fクラスの面々は沸く・・・保健体育の実技ってどう考えても球技や陸上競技とかのスポーツでしょ・・・

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったらボクが教えてあげよっか？もちろん、実技でね」

工藤さんが先ほど佐藤さんに負けた生徒を指名して続けます
周りも巻き込んで場の流れを自分に持つていく、と・・・中々手が
込んでますね

「フツ、望むところ・・・」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強な
んていらなのよ!」

「そうです！永遠に必要ありません!」

工藤さんの策に引っかけりそうだったのが2人の女子生徒に無理矢
理引き戻されました

「・・・気は済んだか・・・工藤愛子・・・」

「え?」

あの人は工藤さんの策に特に動じる様子を見せず・・・

「・・・悪いが俺の相手はお前じゃない・・・代表・・・いや、華
織を出せ」

私に視線を向け、対戦者に私を指名してきました

13話

「・・・悪いが俺の相手はお前じゃない・・・代表・・・いや、華織を出せ」

「藤堂さんを？」

あの人の言葉に工藤さんが疑問の声を上げます

「藤堂さん・・・あの生徒と知り合いなんですか？」

木下さんが私に質問してきます

まあそう思いますよね・・・

「いいえ、初対面です・・・木下さん、対戦者の指定はルールになったですよ？私より工藤さんのほうが保健体育の成績はいいので拒否するように言ってください」

「あ、はい・・・」

昔殺しかけた恋人です。なんて言えるわけないので、私は嘘をついて木下さんに拒否するようにお願いします

「却下よ！！対戦者の指定はルール違反よ！！」

木下さんが却下と声を上げる・・・木下さんの声はよく通りますね・・・

「いや、1回戦の教科指定が有耶無耶で終わったから、その分の指

定権を今回、対戦者に対して使わせてくれ。それなら文句ないだら？」

しかし、向こうの代表は教科指定権をもう1回使ってまで私を出そうとして・・・

「うつ・・・そう言われると・・・」

「別にAクラスの中でも下位の奴を指定するわけじゃないんだ・・・構わないだろ？それとも・・・」

木下さんは痛いところを突かれたという表情をし、さらに向こうの代表は畳み掛けてきます

「学年主席なのに・・・勝てる自信がないのか？」

挑発するような言葉・・・

ええ、ありませんよ・・・そもそも私はあの人と同じ場所にいない人間ではないんです

「・・・華織・・・まさか・・・」

翔子さんが私の様子に何か気付いたような声を出してきます

「ダメ・・・なんです・・・あの人の傍に・・・私は立つてはいけないんです・・・」

私はその声を洩らし、無意識に後ずさりしてしまう

だけど・・・

ガシッ

「・・・華織、逃げちゃダメ・・・まだ、好きなんですよ・・・？忘れなかったんでしょ・・・？だったら・・・」

翔子さんに腕を掴まれて私を説得してくる

「ダメなんですよ！！私が近づくと、あの人は・・・康太は死んじやう・・・」

私は涙声で叫ぶように言う

「私は康太を殺しかけた・・・本当なら私はここに・・・康太の近くにいていい人間じゃないの！！」

「ちょっと？ムツツリーニ君？！」

パシーン

私を取り乱して昔の罪を告白してしまう、すると康太が私に近づいてきて平手打ちをしてきた

あはは・・・そうだよね・・・そうするよね・・・

私がいい感じに壊れたから、康太がここできつちりと決別の言葉の1つでも言えば、私は明日から後ろ指を差される日々が始まって・・・

「・・・誰がお前・・・華織に殺されかけたって？」

「は・・・？」

康太の言葉に私はポカンとなる

「・・・華織が近づくと誰が死ぬって？」

「康太がだよ！！私があの時調子に乗って暴走したせいで、康太は私を見ただけで鼻血を出すようになって・・・今だって鼻声で・・・鼻に詰め物して無理矢理止めてるんでしょ？！知ってる？それって鼻血の正しい止め方じゃないんだよ？！詰め物を取るときに結局傷が開いてまた出血するから・・・」

他にも上を向いて鼻血が垂れないようにしたときのように喉に逆流したりも・・・

「・・・俺はこれをお前のせいにした覚えはない・・・見縊るな」

「でも・・・どう考えたって・・・それに康太がどう思おうと・・・私が傍にいと・・・康太はいつか死ぬの・・・私のせいで・・・」

そしてそのとき絶対に思うはず・・・私なんかに出会わなければよかった、と・・・

「・・・それで死ぬなら本望だ」

いや、康太がよくても私が・・・

「だ~~~~~~~~っ！！ウジウジウジウジと・・・高橋先生！Fクラス代表の提案を受けます！対戦者変更してAクラス代表の藤堂さんを出します」

え？ちょっと木下さん？！何勝手に決めちゃってるんですか・・・？

「ちょっと待ってください！工藤さんのほうが保健体育の点数はいいので変更は無し・・・」

「うう・・・お腹痛い・・・これは試合ができそうにないなあ・・・」

「

工藤さん？！そんな棒読みで、しかも先生に見えないように舌を出してウインクまで・・・絶対仮病ですよね？！

『ここは藤堂さんがんばってもらうしか・・・』

『だな・・・工藤が体調を崩したなら任せても勝てそうにないしな・・・』

ちょっと・・・クラスメイトの皆さん・・・？

「・・・大丈夫、華織が負けても、誰も責めない・・・それに私が絶対、雄二に勝つ・・・だからAクラスは負けない」

翔子さん・・・

「もちろん僕も、姫路さんが相手でも、負けるつもりはありません」

「戦ってください、藤堂さん」

久保君・・・佐藤さん・・・

「最終決定権は代表である藤堂さんにあります・・・では30秒以内に決定してください。時間オーバーはAクラスの不戦敗とします・・・30・・・29・・・28・・・」

高橋先生？！

「ちょっと待ってください、先生！！なんで時間制限があるんですか？！」

「あなた達のやり取りで時間が押しに押していますので・・・20・・・19・・・18・・・」

た、確かに・・・

「17・・・16・・・15・・・14・・・13・・・12・・・11・・・10・・・9・・・8・・・7」

つて先生？！せめて時計見て30秒計ってくださいよ！カウントが早くなってますよ？！

あゝもう！！

「わかりました、出ます！出させていただきます！」

『（ニヤニヤ）』

うう・・・Aクラスの皆さんが妙に優しげな視線を向けてきます

「では両クラス対戦者は開始位置についてください」

「はい」

気まずいので早く開始位置につきましよう・・・

私は康太の横をすり抜けていこうとします

そのとき・・・

パチン

私が頭と顔に巻いていたタオルを留めていたピンを外されました

「・・・はつきり言うとはこれは無意味だ・・・俺はお前を顔や髪型だけで判別していたわけじゃない・・・もちろんそれは今も同じだ・・・」

ああ・・・やっぱりそうでしたか・・・

「・・・髪切ったのか・・・」

タオルが落ち、私の姿を見た康太が声を洩らします

「うん・・・家事の邪魔になるし、洗うのも時間が掛かるから・・・」

「

「・・・そっか・・・にしても・・・」

ん・・・？

「・・・昔のまま・・・だな・・・色々と・・・小さくて・・・」

康太が私の頭から足に目線を動かした後、胸を見て呟くように言います

「・・・どうせ縦も横も2、3センチ程度しか変わってませんよ・・・そういう康太だってスケベなところ、変わってないじゃない・・・」

諦めてたけど・・・改めて言われるときついですね・・・

「なんか・・・藤堂さんが子供っぽく見えるね・・・」

「ええ・・・普段と全然違うわね・・・あれが素なのかしら・・・？」

「それにしても向こうの陣営は何をしているのでしょうか？」

「罪状を読み上げたまえ」

「ハッ、被告、土屋康太（以下この者を甲とする）は・・・」

工藤さん達の会話や、Fクラス陣営の裁判のような行為は・・・気にしても仕方ないですね・・・

あーあ・・・今までの私のイメージは崩れて・・・これからはお子ちゃまとか言われちゃうのかな・・・

でも、私は実はもう大人、なんですよ？

中2のときに、その・・・してますので・・・

13話（後書き）

最後のようなことを考えてる時点で充分お子様です・・・なんてね
以前活動報告で書いた主人公がウザいって記事は、この話を書いて
て思いました

たぶん原因はキャラを思ったとおりには動かせない＆行動を上手く描
写できないこと

要は自分の腕の無さ・・・反省します

14話

「それでは3回戦、教科は保健体育です。召喚してください」

「サモン」

私と康太が召喚獣を呼び出します

Aクラス 藤堂華織 保健体育 401

VS

Fクラス 土屋康太 保健体育 572

え・・・？こんな点差あるの？でも腕輪で接近して隙を作れば・・・

私の召喚獣と、小太刀を2本持った忍者姿の康太の召喚獣がギリギリと睨みあって、飛び出すタイミングを計っている・・・と思いきや

「・・・サービスだ。腕輪の能力を見せてやる」

「は？」

「・・・加速」

そう言うのと康太の召喚獣の腕輪が発動して召喚獣の姿が消えました

「え？え？」

「・・・加速終了」

康太がそう言うのと康太の召喚獣が私の召喚獣の背後に出てきました

「・・・高速移動・・・これが俺の召喚獣の腕輪の能力だ」

なんで私と同じなの？1人1人違うんじゃないかなかったですか・・・？
ねえ・・・お婆ちゃん・・・

「そんな余裕、見せていいのかな・・・？」

「・・・？」

「腕輪起動」

今度は私の召喚獣が姿を消しました

「・・・！」

康太の召喚獣が回避行動をとり、回避前にいた場所の床に私の召喚獣が爪を突き立てている姿・・・

「・・・同じ能力だと・・・？」

「1人1人違うって聞いてたけど、不思議なこともあるんだね・・・」

そしてまた私の召喚獣の姿が消えます

「・・・面白い・・・加速」

それを追いかけるように康太の召喚獣の姿も消えました

ま、まずい……自分のもそうだけど、康太の召喚獣の動きも目で追えないから……どこを狙って、どう動かせばいいか全くわからない……

「……華織」

そんな時ふと康太が私を呼ぶ……

私は適当に逃げ回るように動かしながら康太のほうを向くと……

「目で追えてるの……？」

「……俺を舐めるな」

康太の目線が何かを追うように動いていました……ありえない……

でも康太の目線の先には私の召喚獣か康太の召喚獣がいる（と思う）わけ……

こうなったら康太の目線は康太の召喚獣を指していると思ってやるしかない……

私はこのクラスの代表として、負けるわけにはいけないから……

私は召喚フィールドの範囲ギリギリまで後退して、康太の目線と召喚獣が動いているスペースを同時に見えるように、視野を広くするというか情けをかけられてますよね？

「そうやっていつもいつも……子供扱いして！」

「・・・実際小さいな・・・」

「うつさい!」

そんなやり取りをしながら、康太の召喚獣がいると思われる場所に爪を突き刺すように突撃をしていく
しかし、回避されて、速度が落ちた姿しか見えない・・・

「なんか藤堂さん・・・さあ？」

「ええ・・・勝負をしてるってのに・・・ねえ？」

「・・・楽しそう・・・？」

アーアー聞こえない聞こえない・・・聞こえませんでしたら聞こえませんよ

十数分後・・・

Aクラス	藤堂華織	保健体育	123
VS			
Fクラス	土屋康太	保健体育	114

「はあ・・・はあ・・・いつまで・・・逃げてるの・・・？」

私は息を切らせながらそう問いかける・・・いや、召喚獣操作だっ

て疲れるんだよ？ホント・・・私が体力無いわけじゃないって・・・

「・・・俺の気が済むまで」

私が追っかけて、康太が逃げる・・・私が攻撃しても、康太は回避だけで一切反撃をしてこない

私は一撃も攻撃が当てることができず、点数消費は腕輪の能力による消費のみ

なぜか私のほうが康太の召喚獣の腕輪より点数消費が少ない

「どうするの？このままだと先に0点になるのは康太だよ？」

「・・・そうだな・・・じゃあそろそろクライマックスといくか・・・」

康太がそう言うと言動を止めて腕輪を停止することなく姿を現します
私もここで攻撃するのは不粋と思い、少し距離をとって同じように止まって姿を現しました

またギリギリと睨み合う・・・うん、大体やりたいことはわかった
ような気がする

「タイミングは？」

「・・・5秒後」

まあ仕方ないから従ってあげよう・・・

・

・

「「！」」

ほぼ同時に2体の召喚獣が姿を消しました

2体とも真っ直ぐ突き進んで・・・

2体の召喚獣が、それぞれの武器を相手の召喚獣に突き刺そうとして・・・

ザクッ

勝負の分かれ目は、それぞれの召喚獣の武器の長さ・・・

私の召喚獣の武器の爪は、召喚獣を人間のサイズにしたとして、大体40センチくらいといったところ

それに対して、康太の召喚獣の武器は小太刀・・・小太刀とは大体刃長60センチ前後の刀をいう

その差は20センチ・・・持ち方の違いはあっても、その差は埋められるほどではなく・・・

ボンッ・・・

「あ・・・」

康太の召喚獣の武器は私の召喚獣に突き刺さり、私の召喚獣の武器

は康太の召喚獣の衣服を少し切つて、身体に少し届いたくらいで止まり、消えてしまいました・・・

「勝者Fクラス」

高橋先生の勝者を告げる声・・・

負けて・・・しまいました・・・私は・・・代表なのに・・・

「すみません・・・負けてしまいました・・・」

私は肩を落としAクラスの陣営の戻って皆に謝ります

「大丈夫だつて・・・まだ1敗だしね」

「そうですね、このあと久保君が霧島さんが勝てばいいんですから」

工藤さんと木下さんがそんな私を励ましてきます

「これで2対1ですね。では次の対戦に・・・対戦者は前へ」

高橋先生が次の試合に移ろうとします

「あ、は、はいっ。私ですっ!」

やっぱり勝つためには出してきましたよね・・・姫路瑞希さん・・・

久保君の話だと、自分とほぼ同じくらいの成績だとか・・・

「藤堂さん。ここは僕に・・・」

「はい、お願いします。久保君」

こちらは久保君に出てもらいます。先ほど翔子さんは違う人と戦うと言っていました・・・

事実上の学年3位争いです

14話（後書き）

自分の召喚獣は高速移動の状態でも

こう動かして、ここに行く、そこからこんな感じで動かして・・・

と操作をするので目で追えなくても、どこにいるかはわかります

15話

Aクラス対Fクラス、試召戦争

勝負方法、一騎打ち5本勝負

現在、Aクラス2勝、Fクラス1勝

4回戦、久保君対姫路さん

事実上の学年3位争い・・・

「4回戦、科目選択権はどちらが使用しますか？」

高橋先生が声をかけます

「藤堂さん、残り1つだけど、いいかな？」

「はい、構いません」

学力が互角なら、勝率を上げるためにも教科は得意なもので戦って欲しいです

「ちょっと待った！何を勝手に・・・」

向こうの陣営が騒ぎます

「待て明久、こっちは次の試合で使わないといけないんだ。ここは仕方がない・・・姫路に賭けよう」

それを向こうの代表がそう言って静めます・・・まだ何か策がある
ようですね

第5戦で向こうの代表が、翔子さんに誰を当てて、何で戦うのか・
・不安はありますけど、ここで勝ったらそれに関係ないです

「じゃあ、僕の得意な現代社会で・・・」

「?!」

久保君の言葉に姫路さんは顔を顰めます

「・・・いこうと思ったけど、折角だし総合科目でお願いします」

いや、そのまま得意科目で戦ってくださいよ・・・

「僕にも現学年3位のプライドがあるからね」

うーん・・・そう言われると・・・

「「サモン」」

Fクラス 姫路瑞希 総合科目 4409

VS

Aクラス 久保利光 総合科目 4035

あ、あの・・・負けてますよ、久保君・・・

「ま、マジか?!」

「いつの間にこんな実力を?!」

「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!」

姫路さんの点数を見て両陣営から驚きの声が上がります

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ?」

「……私、このクラスみんなが好きなんです。人の為に一生懸命なみんなのいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

ああ……この人は、私と正反対の人だ……

好きな人から逃げて、忘れるために勉強していた私……

対してこの人は、好きな人のために、支えになるように勉強を……

私はいつか、この人に負けるでしょうね……

「好きだから頑張れる、か……それでこの点差……だが! これは召喚獣勝負、僕にも負けたくない理由がある……簡単に負けるつもりは……無い!」

久保君は、そう言って召喚獣に武器を構えさせ、姫路さんの召喚獣に突進させていきます。姫路さんは私よりは（色々と）大きいですが小柄で、荒事に向いているというような印象は見受けられません。

確かに強引に攻めれば隙を見せるかもしれませんが・・・

でも・・・

「はっ！」

姫路さんの召喚獣が武器の大剣で、久保君の召喚獣を縦に真つ二つにしました・・・やはり試召戦争を2戦も経験してますから、これくらいでは隙を見せないようです・・・それに久保君は男子ですからCクラス戦のときに最後のほうしか召喚獣を動かしていません。操作技術も姫路さんのほうが上でしょう

つとまあ、そんなことはいいとして・・・

「勝者Fクラス」

あわわ・・・これで2対2です・・・どうしようどうしよう・・・もし翔子さんが負けたら私達の負けです・・・

「私が負けなかったら・・・ああ・・・もうお終いです・・・この教室とも今日で最後なんだ・・・」

「もう！しっかりしなさい！霧島さんが勝ってくださいって・・・」

「でも・・・でも・・・向こうの代表は何か策があるみたいですし・・・」

「・・・大丈夫、何があっても私は負けない」

うう・・・翔子さん・・・

「最終戦、対戦者は前へ」

「・・・はい」

高橋先生の進行に霧島さんが前に出ていきます
向こうからは・・・

「俺の出番だな」

代表が出てきました
うーん・・・やっぱりあの写真の子とそっくりです・・・本人なの
かな・・・？

「では選択権の残っているFクラス、教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限
ありだ！」

高橋先生の問いかけに向こうの代表はそう答えました

「召喚獣勝負じゃなくてもいいんですか？！しかもテスト範囲の限定だなんて・・・」

「試召戦争とはテストの点を用いた勝負なら方法は問われない。召喚獣勝負でもペーパーテストでも、だ・・・もちろんその内容もな」

私の質問に向こうの代表が聞かれるのがわかってたように答えます
やられましたね・・・にしても上限の設定とは・・・

「上限ありだつて？」

「しかも小学生レベル。満点確実じゃないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ・・・」

私達、高校生なら満点で当たり前・・・こっちのミスを狙うということですか・・・

しかも日本史というピンポイントで・・・確か霧島さんは日本史の得点が保健体育を除いた他の教科に比べて少し低いです・・・それがそのときだけの偶然だったらいいんですが・・・

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

高橋先生はそう言つて教室から出て行きました
そして一旦翔子さんが私達のところに戻ってきます

「あの、翔子さん・・・向こうの選択に何か心当たりは・・・？」

「・・・私と雄二の、昔のちよつとしたこと・・・それだけ」

「そうですね・・・」

やっぱりあの人が写真の人なんですね・・・

「それでは用意ができましたので、対戦者は視聴覚室へ」

「・・・行ってくる」

「あ、はい・・・がんばってください」

高橋先生の言葉に翔子さんは教室を出て行きました

『では、日本史テストを行います。制限時間は50分、満点は100点です』

テストが行われる視聴覚室の様子がAクラスの超大型プラズマディスプレイに映し出されます

他の面々はそれを見ながら待機しています

『不正行為などは即失格になります。いいですね？』

『・・・はい』

『わかってるさ』

『では、始めてください』

そして試験が始まりました・・・

ディスプレイに問題が映し出されていきます

side:-

『うおおおおおっ!!』

『でたああああ!!』

突然Fクラスの陣営がまるで勝利を確信したように騒ぎ出す

「あ、ああ・・・向こうの策に翔子さんが嵌ったんですね・・・」

Aクラス代表の藤堂華織はその様子を見て悲しそうに呟く

(負けてしまっんですね・・・)

「あ、ちよつと?!藤堂さん?!どこ行くの?!」

「いえ・・・負けるみたいですので・・・せめて最後に自分の机の掃除をと・・・」

そしてヨロヨロと歩き出し、先ほどまで頭に巻いていたタオルを持つて水道に向かおうとする

「まだ決まったわけじゃないでしょ?!」

「Fクラスの設備ってどんななんでしょうね・・・まあ机と椅子があれば勉強はできますけどね・・・あはは・・・」

「ダメだわ・・・聞こえてないわね」

木下優子の言葉も右から左に抜け、藤堂華織は行ってしまった

「・・・Fクラスは常識外れのバカなのよ？」

そんな木下優子の言葉は彼女に届くことはなく・・・

side：華織

たった7日間ですか・・・この机を使っただのは・・・ダメな代表ですね・・・私は・・・

私が出てから、Aクラスは運に見放されたように負けて・・・

「・・・そこが華織の席か？」

「康太・・・？うん・・・そうだよ。今日でお終いだけどね・・・」

自分の席を濡らしたタオルで拭いていると康太が話しかけてきました
7日間しか使ってないし、Aクラスは毎日用務員の方が掃除してく
れているけど・・・最後くらい・・・

「・・・最前列の廊下側から2番目、か・・・なるほど・・・」

「どうしたの？」

康太がなにやら可笑しさをこらえるようにしています

「・・・俺も、Fクラスの教室で全く同じ位置取りだ」

「はい？」

それってたまたまじゃ・・・？

「・・・教室に入って、席をどこにするかと選ぶとき・・・なぜか、そこにしたいと思った・・・」

「何が言いたいの？」

「・・・まだ華織がこの学園にいるかもわからなかったのに、だ・・・運命、感じないか？」

「はいはい、そうですね・・・」

そっという台詞を鼻声で言われてもな・・・

「藤堂さん！試合の結果が出ますよー！」

木下さんが私を呼びます

「・・・あとでな・・・楽しみにしてる」

康太がそう言ってFクラスの陣営に戻っていききました・・・楽しみにしてる？何を？

「ホラ藤堂さん！早く早く！」

「あ、はい、今行きます・・・」

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 100点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

「よかった~~~~」

「だから言っただでしょ。まだ決まったわけじゃないって」

結果に安心した私は思わずへたりこみ、木下さんが声をかけてきました

「Fクラスは常識外れのバカクラスなんだから」

確かに小学生レベルで53点は無いですけど、常識外れは言いすぎじゃ・・・

・・・無いですね

16話

『3対2でAクラスの勝利です』

ディスプレイに映った高橋先生が試召戦争の終結を宣言します

『・・・雄二、私の勝ち』

『・・・殺せ』

『いい覚悟だ、殺してやる！歯を食いしばれ！』

あれ？あの生徒、さっきまでこの教室にいなかったっけ？他の生徒も・・・ここから視聴覚室まで数秒で移動したの？

『吉井君、落ち着いて下さい！』

姫路さんまで・・・体力無さそうに見えて、実は結構あるんですね・・・あとその止めかたは・・・胸が、ですね？当たってると思うんですが・・・

『何が絶対間違える、だ！霧島さん100点じゃないか？！だいたい、雄二の53点ってなんだよ？！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと・・・』

『翔子の100点は予想外だが、俺の点数は・・・いかにも俺の全力だ』

どうやら必ず間違えると思っていた問題があったようです

ですがそれなら、あなたは100点を取らないと意味無いのでは・・・？

『このアホがぁーっ！』

『アキ、落ち着きなさい！あんただったら30点も取れないでしょうが！』

もう1人の女子生徒が宿めに入っています
いや流石に30点は・・・

『それについては否定しない！』

取れないの？！

『くっ！2人とも何故止めるんだ！このバカには喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！』

『それって体罰じゃなくて処刑です！』

そりゃ止めるでしょう・・・ここ学校ですよ？

いや、学校外だったらいいという意味では絶対じゃないんですが・・・

『・・・ところで、約束』

ん・・・？

「約束って何のことですか？対戦前にも言っていましたけど・・・？」

「ああ、それはですね、Aクラスがこの対戦方法を承諾する代わり

に、霧島さんがFクラスに2つ条件を出したんですよ」

「条件、ですか・・・？」

私はデイスプレイを見ながら木下さんに聞くと、気恥ずかしげに答えました

「1つ、対戦前にCクラスのこと藤堂さんに謝ること、そして2つ・・・」

あああれはそういうことだったんですか・・・

「・・・負けたクラスは勝ったクラスの言うことを1つ聞くこと」

『・・・雄二、私と付き合って』

木下さんが2つ目の条件を言うと同時に、翔子さんがFクラスの代表に告白しました

「・・・勝ったクラスが負けたクラスに、ですよね？」

「そのはずだったと思うんですが・・・霧島さんは個人個人のつもりだったみたいですね」

私の確認の言葉に、木下さんはあれ？？といった表情で返します

『やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか？』

『・・・私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き』

がんばって・・・翔子さん・・・

『その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？』

『・・・私には、雄二しかない。他の人なんて興味ない』

『拒否権は？』

『・・・ない。約束だから。今からデートに行く』

『ぐあつ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに・・・』

『ガシツズルズルズル・・・』

翔子さんとFクラスの代表がカメラの範囲から出て行きました・・・まあ、多少強引ですけど・・・放っておけば向こうも翔子さんを好きになるんじゃないかな・・・？男ってそういうものでしょ？ホラよく、自分を好きになってくれた人を好きになるって・・・言いません？

「では私ももう帰りますね。お疲れ様でした」

土日にできなかった家事を少しずつ消化しないと・・・

「お疲れ様、また明日ね。藤堂さん」

頭の中に何か引っかかっていますが、気にしないで帰りましょう・・・

「・・・」

引つかかったものがわかったような気がします・・・

下駄箱で私のところを開けると、一通の手紙が・・・

それにはこう1文・・・

『勝者からの命令を言うから屋上に来い』

数分後・・・

ガチャ

私は屋上に出る扉を開けて、外に出ます

というかなんで開いてるのでしょうか・・・？屋上って普通閉鎖されてませんか？

「・・・遅い」

「代表は色々やることあるんですよーだ」

康太の文句に私は嫌味で返す・・・にしても相変わらず康太は鼻声だね・・・

「それで？命令は何？」

「・・・その前に確認だ。色々とな・・・」

「確認？」

「・・・まず最初に、この意味を教えろ」

そう言つて私に見せてくるのは・・・手紙？

「なにそれ？」

「・・・お前が最後に俺の下駄箱に入れたもの」

「ああ・・・あれか・・・まだ持ってたの？さっさと捨てればいいのに・・・」

「・・・ここに書かれてる。『さよなら』とは転校することに対することか？それとも・・・」

「全部、だよ・・・転校することも、恋人関係の終わりも・・・」

なに？そんなことずっと考えてたの？

「そうか・・・なら俺がお前・・・華織にする勝者からの命令は・・・」

「その前にあれはそっちの代表と翔子さんの約束でしょ？私達には当てはまらないでしょ？」

とりあえず言い訳をして抵抗を試みます

私もさつきそのこと知ったんだし・・・無効にしてほしいんです・

・

「・・・関係ないな・・・華織・・・」

「なに？」

「・・・またお前の写真を撮らせてくれ・・・」

「！」

その言葉は・・・つまり・・・

「また恋人関係に戻ろうってこと？」

「・・・察しがよくなったな・・・」

「そりゃ、半年でも康太の彼女だったからね」

その言葉は素直に嬉しい・・・けど・・・

「ごめんなさい・・・やっぱりその体質を作った本人が傍にいてい
いて思えないの・・・」

「・・・俺は別に構わないと言ったはずだ・・・」

「康太がよくてもね・・・私が認めたくない・・・康太を不幸にし
てる存在が、康太の傍にすることを・・・それに康太が危険になれ

ば、康太の家族が心配するし．．．」

「．．．」

康太が黙り込んだ．．．やっぱり家族に心配をされてるって自覚はあるんだ．．．

「だから．．．恋人には、戻れない．．．」

「．．．わかった」

康太が了承した．．．わかってたけど．．．やっぱりキツイね．．．自分勝手だと思うけど、もっと食い下がって欲しかった．．．

「じゃあ．．．帰るね．．．」

私は校舎内に入ろうと、出てきた扉へと戻り、扉を開けようとする

．．．これで．．．完全に終わったね．．．

思いつきり泣きたい衝動に駆られますが、それをグツと抑えつける．．．そもそも私が悪いんですから．．．泣いていいはずが無い．．．

「．．．待て」

え．．．？

私が振り返ると康太が近づいてきていて．．．

そして．．．

「?!」

強引に唇を奪われました・・・康太の唇から血の味が・・・やっぱ
り鼻血出てるんだ・・・

って、ちょっと?!さっき納得したんじゃないの?!

「・・・悪いが俺には華織以外の女は考えられない」

「あのねえ・・・」

「・・・要はこの体質が治ればいいんだろ?じゃあそれまで待つて
る・・・それが勝者からの命令だ」

もうつ!何でこの人はこうも我俣なんでしょう・・・

まあいいでしょう・・・待っててあげますよ!ずっと・・・ずっと
つつつとね!!

16話（後書き）

うん・・・まあなんだ・・・この作品のテーマって復縁なんだ・・・

だからありえないとかは無しにしてくれ・・・

17話

4月も半ばのとある休日・・・

「うゝゝゝん・・・」

「はぁ・・・38 　ってところかね・・・新しい環境に慣れるので
疲れてるところを風邪にやられたようだね」

私は熱を出して寝込んでいます

今、お婆ちゃんが私のおでこに手を当てて大まかに熱を測っていました

昔は、家族に看病してもらえないから、体調には結構気を使っていたんですけど・・・

こつちに来てから編入準備とか4日間連続試験とか、編入後は代表
になったとか、試召戦争とか、康太のこととか・・・あれ？編入後
は最初の以外、康太関係じゃない？試召戦争とかFクラスに仕向け
られたCクラスとFクラスとだし・・・Fクラスは康太のいるクラ
スだし・・・

「アタシも仕事があるし・・・とりあえず学園の保健室で寝かしと
けばいいかね・・・ここじゃあれだからね・・・」

「あれってなんですか・・・？」

「アンタがゆつくり休まないってことだよ。家事に勉強に・・・確
かに助かるがね、そんな調子でされてもこつちは不安なんだよ」

そんなこんなで仕方なく学園のベッドで療養することになりました・
・

学園の保健室

「じゃあ夕方まで看にこれないので、お願いするよ」

「はい、わかりました」

お婆ちゃんと養護の先生が話す声が聞こえる・・・

「じゃあゆつくり休むんだよ」

「はい・・・」

そしてお婆ちゃんは私に一言声をかけて保健室から出て行きました

ああ・・・なんかこんな風に誰かに心配されるのも、凄い久しぶりな気がする・・・

お父さんと暮らしてたときは、ちゃんと体調管理できてたから風邪とか引かなかったし・・・怪我に関しては暮らし始めてすぐの頃に家事で筋肉痛とかしてたけど・・・怪我じゃなかったね

それより前は、病気になろうが怪我をしようが病院には連れてって

はくれますが、心配はしてくれませんでしたし・・・しかもそれも小学生までで、中学からは1人で病院も行かされましたし・・・

医者や看護師が話好きだったり親切な人だったりすると、絶対1人で来たことを気にして、親御さんは？と聞いてきて・・・それが気まずくて、体調管理をきっちりするようになったり、とにかく大人しくして怪我をしないように気をつけたり・・・

たぶん、最後に心配されたのは、あの夜の1件があって、次の日の康太の母さんから・・・

あまり人に心配されるのは慣れてないので、さっさと治してしまおう

私は頭の中を空っぽにし、目を瞑って眠りにつくのを待った

side：康太

休日、俺は暇つぶしに、学園内に仕掛けてある盗聴器の音声を聞く・・・部活で来ている生徒のあれやこれや・・・とにかく情報を集めておく。俺がいるFクラスはAクラスに負けたから今は試召戦争ができないが、いい情報が入れば、雄二辺りが買ってくれるからな・・・

『じゃあゆつくり休むんだよ』

『はい・・・』

保健室に仕掛けてある盗聴器から、この学園に住むといわれる、学園長という名の妖怪ババアと・・・あの1件以来、もう3年近くも罪悪感を背負わせてしまっている女、華織の声が・・・

華織がいなかったこの3年・・・俺は1日だって華織のことを考えなかった日はない・・・

ホントは戻ってきたことを知って、すぐに会いに行きたかった・・・だが、会ったところで華織は間違いなく逃げる・・・だから、俺は雄二に代表を討つ役目をさせると言って・・・でもまさかあんなに苦しんでいたとは思わなかった・・・

あのことは・・・あんな方法に頼らないと華織の寂しさを消すことができなかった俺が悪いはずなのに・・・この体質も、その罰だと思った・・・

さてそんなことより今の華織の声・・・もしかして調子が悪いのか・・・？

妖怪ババアとの関係も気になるし・・・

現地にて本人の体調を看ながらの聞き取り調査が必要、だな・・・

side：華織

「うゝん・・・」

よく寝た、ような気がします・・・今何時でしょう・・・あれ？この部屋時計無いですね・・・ならいいや・・・お婆ちゃんが迎えにくるまで寝てよう・・・

ガラッ

ん？誰か入ってきた・・・？養護の先生か、部活で怪我したり体調を崩した人かな・・・？まあ今の私には関係ないですね・・・

さてもう一眠り・・・

「・・・ちようど先生もいないし、運がいいな」

なんで康太が来るのさ？

side:-

「・・・ちようど先生もいないし、運がいいな」

（鼻に詰め物もしたし、これでゆっくり華織の寝顔が・・・おっと
そう思っただけで鼻血が・・・）

土屋康太はそう呟くと、鼻の頭の少し上辺りをつまむように押さえた

そして病人が横になって休んで経過を見るためのベッドが並んでいる保健室の奥の部屋に入る

（え？ちよつと？！なんでこっちにくるわけ？！）

その行動に藤堂華織は寝たふりをしながら焦る

（・・・いた）

今日は休日なので保健室のベッドの利用は、ほぼ無いと言っていいので藤堂華織はドアから一番近いベッドで寝ていた。よつてすぐに土屋康太に見つかってしまい・・・

（うわぁ？！どうしよう？！今起きた風に迎えばいいの？それとも寝てやり過ぎす？どっちがいいの？！）

藤堂華織の焦りはさらに加速する

目当ての人を見つけた土屋康太は当然その人に近づいていき・・・

（ん・・・？これ寝たふりじゃね？下手くそだな・・・）

藤堂華織の寝たふりに気付いた。そんなことも知らずに彼女は・・・

（あわわ、どうしよう・・・）

ただただ焦っていた・・・

（ちよつとからかつてみるか・・・）

ふと土屋康太の悪戯心に火がつく

ぷによ・・・

土屋康太が藤堂華織の頬を指で突いた

（チャンス、これで起きれば・・・）

「・・・ぐっすり寝てるな・・・これは簡単には起きないだろうな・・・」

（道が断たれた?!）

（寝てるんだから俺の言葉なんて無視して今日覚めた風を装えばいいものを・・・なら・・・）

「・・・キスしても、起きないだろうな・・・」

（ちょっと?! コラ! っていうか本気なの?!）

土屋康太が顔を藤堂華織の顔に寄せていく・・・彼女が薄く目を開けて見たものは・・・

（わわっ・・・本当にする気なんだ・・・）

段々と近づいてくる土屋康太の顔、そして唇だった・・・

18話

わわっ・・・本当にする気なんだ・・・

私が薄く目を開けて見ると、康太の顔が近づいてきていて・・・でも私は寝ているんだから抵抗できないし・・・起きればいいって？ここで起きるのは不自然すぎるでしょう・・・

ああ・・・あと数センチ・・・

ガラッ

「・・・おっと・・・先生が戻ってきたな・・・」

保健室の戸が開く音がして康太の顔が離れていき・・・あゝビックリした・・・

でも少し残念な気も・・・っていやいや、何を考えてるんでしょうか私は・・・これじゃキスしたかったって思ってたみたいじゃないですか・・・風邪がうつつたらいけませんし、ダメですよね・・・風邪引いてなくても私と康太は今は恋人関係じゃないんですからダメですけど・・・

康太は1番奥のベッドに隠れたみたいですね・・・

ガチャ

「藤堂さんの様子は、と・・・」

養護の先生が私の様子を見に近づいてきます

もう起きるならここしかないね・・・先生が戻ったら、また起きるチャンスはないだろうし・・・

「うーん・・・」

「あら、起こしちゃったかしら？ごめんなさいね」

「い、いえ・・・えっと・・・今何時くらいですか？」

起こしたことを謝ってくる先生に申し訳なさを感じつつ、すぐ違う話を振ります

「午後2時くらいね。お昼はどうでしょうか・・・？」

「すみません。食欲が・・・」

ごめんなさい嘘です・・・でもあまりここに長居されると、康太の存在がバレそうで・・・

「そう？でも夜は何かお腹に入れるのよ？」

「はい・・・」

「私はまたちょっと保健室を離れるから、何かあったらこれを押してね」

養護の先生がナースコールっぽいボタンを渡してきます・・・なんであるの？ここ保健室だよな？職員室に繋がってるのかな・・・？

「・・・聞こえてる？」

「あ、はい、大丈夫です・・・」

「朝のときより少し顔が赤い気がするけど・・・熱が上がったのかしら？ちゃんと布団かけて暖かくして休んでてくださいね」

それは間違いなく康太のせいです・・・身体自体は寝てたから少し楽になりました

「わかりました」

ボタン

私が返事をして養護の先生が出て行きました

ガラッ

保健室からも出たようですね・・・

「はあ・・・」

「クスクス・・・」

私がホッと一息つくと、康太の笑い声が奥のベッドから聞こえてきました

「康太・・・笑いすぎ」

「・・・なぜバレた」

「頭大丈夫？」

「・・・その言葉はそのまま華織に返す・・・お前寝たふり下手すぎ・・・プツ」

噴出す康太・・・凄いム力つく・・・って

「はあっ?! 気付いてたの?! じゃああれは・・・」

「・・・あまりにも下手だから、ちょっとからかいたくなって」

「じゃあキスも・・・」

「・・・からかいついでにできたらくらいか・・・」

殴っていいかな・・・?

「それで? 何の用なのかな? というかなんで私がここで寝てることを知ってたのかな?」

「・・・学校中にこれがあるからな・・・」

そう言って見せるのは小さな機械・・・

「なにそれ？」

「・・・盗聴器」

犯罪じゃない・・・

「お婆ちゃんに言っておかないと・・・」

「・・・それだ。俺の用件」

それってどれさ？

「・・・学園長と華織の、関係」

「関係って・・・保護者と被保護者だけど？大叔母と姪孫でもあるけど・・・」

最初はカヲルさんって呼んでたけど、婆さんでも婆ちゃんでも好きに呼びなっって言われたから、お婆ちゃんって私は呼ぶようになりました

「・・・まさかあの妖怪ババアと華織がな・・・」

「妖怪ババア？」

人のお婆ちゃんをずいぶん酷いあだ名で呼ぶんだね・・・

「・・・ピッタリだろ？」

「じゃあ私は妖怪の義娘なんだね・・・なら康太とも付き合えないな・・・」

「ちよつとあだ名付けた奴処刑してくる」

私がからかうと康太がそう言って部屋から出て行こうとしました

「はいはい、そういうおふざけはいいから．．．っで？他に聞きたいことは？」

「．．．とりあえず、この町から出てた間のこと」

「そうだね．．．」

そしてざっと康太にこの町を離れていた間のこと話す．．

向こうでの暮らし．．お父さんと2人で普通に暮らしてたとか、家事もしてたから料理が上手くなったとか、暇なときはずっと勉強してたからこんな成績になったとか．．

そして、こっちに戻ってくることとなった．．お父さんの死、とか．．その後お婆ちゃんに引き取られるまでのこと．．とりあえず、全部話した．．昔も康太には隠し事しなかったしね

「．．．こんな感じかな．．．」

「．．．そうか．．．」

「だから、今の私には家族といえるのはお婆ちゃんだけ．．．」

「．．．」

そこで黙っちゃうんだ．．違うだろ、俺だって家族じゃないのか．．？つか言って欲しかったんだけどな．．．って我が侭すぎるよね．．．

やっぱり康太にとって私は、恋人にしたい人であって、家族にした
人じゃないのかな・・・？

「ゴメン康太・・・ちょっと起きてるの辛くなってきたから、寝る
ね・・・」

「・・・ああ、悪い。じゃあ俺はそろそろ帰るか・・・」

私は康太に背を向けるように横を向き、顔を布団に入れてそう言い、
康太がそう返してきます

康太の歩く音が聞こえて・・・ドアを開けて出ていくと思ったら・・・

「・・・寝るんならちゃんと布団をかけろよ」

チュ

「ひゃっ?!」

そう言っただけで布団から出ていた首の後ろにキスされました・・・この
変態め・・・

「・・・じゃあな、ゆっくり休めよ」

康太が来てなかったら、もっとゆっくりできてたよ・・・

「・・・そういえば」

ん・・・？

「・・・父さんと母さんに華織のこと教えたら嬉しそうにしてたな・・・それで、娘なんだからいつでも帰ってきなさい、だってさ・・・」

康太の両親は、やっぱり優しいな・・・逃げたことを怒ってると思っただけ・・・

「・・・まあ俺はまだ家族だとは思ってないがな・・・だって」

康太が付け足すようにそう言って・・・

「・・・家族だと結婚できないからな。家族なんて結婚してからなればいいし・・・」

あっけらかんとそう言いました

「はああああ？！なにそれ？！プロポーズなの？！なんでこんなところで言うわけ？！」

私はガバツと起き上がって康太に文句を言います

もつと場所とか雰囲気とか考えてよ！

「・・・いや、もうどうせ確定事項だし、場所なんてどうでもいいかと・・・」

「よくないよ！だいたい確定もしてないよ！康太のその体質が・・・うつ？！」

クラッ・・・

急に起き上がったからか、私の身体がふらつく・・・

ギュッ・・・

「・・・大丈夫か？」

それを康太に両肩を掴まれて支えられました

「う、うん・・・大丈夫、ちょっとふらついただけ・・・」

そう言って見上げると康太の顔があつて・・・

「「・・・」」

しばらく見詰め合つて・・・

「ダメだからね？」

「・・・何も言つてない」

こんな状況で、変態の康太がすることといったら1つでしょうに・・・

「風邪がうつるからさっさと帰れ・・・」

いつまでたつても肩から手を離さない康太に照れ隠しに命令形で言う

「・・・知らないのか？バカは・・・」

ちよつと顔近づけてこないで！それと自分のことをバカって・・・

「・・・風邪を引かないんだぜ」

そしてまた強引に唇を奪われました・・・また血の味が・・・

なんなの？付き合ってた頃より積極的じゃない？

風邪うつっちゃえばいいんだ・・・

そしたら康太の両親に会いに行けるしね・・・

18話（後書き）

ムツツリーニがもはやタダの変態（笑）

いや、変態という名の紳士か・・・

19話

5月・・・ゴールデンウィークも終わり、新入生にとっては最初の行事、学園祭・・・あ、私にとってもでしたね・・・
しかし、体育祭を春にする学校はよく聞きますが、学園祭を春にするってあまり聞かないような・・・

とにかく今日から、生徒は学園祭の準備期間に入ります・・・一部の先生方は4月の終わり頃からやってますけど・・・お婆ちゃんは試験召喚システムに関する新技術を発表するとかで4月の初め頃からがんばっていたみたいです・・・

「えつと・・・それではAクラスの学園祭の出し物を決めたいのですが・・・何か案はありますか？」

代表の私の進行で話し合いを始めますが・・・

『・・・』

沈黙・・・で、ですよね・・・

Aクラスの生徒達は勉強中心の学生生活で、学園祭もそこまでやる気になりませんよね・・・勉強時間潰れてしまいますし・・・

まともな意見も出ずに数時間後・・・午後の授業時間

「えっと・・・試験召喚システムに関する適当な展示で済ませたらダメ、かしら？」

「それは1年の生徒がするみたいですし・・・」

木下さんの案に私はそれはちょっと・・・と意見する

「じゃあ・・・お化け屋敷とかのアトラクション系か、喫茶店とか飲食系？」

「そうですね、私もその方向でいきたいんですが・・・」

工藤さんに意見に私は同意しつつも・・・

「でもAクラスって、他のクラスからは勉強ばかりでつまらない、という印象を持たれてますので、普通にやってもお客さんは来ませんし・・・」

そう不安を口にする

「じゃあどうするんですか？大掛かりにやるとしても、私達はそんな経験は無いですよ？」

ですよね・・・勉強をがんばったからこそ、Aクラスに入れたわけです・・・そんな皆さんにウェイターやウェイトレスのアルバイト経験を求めたりするのは・・・私もありませんし・・・

つとそのとき・・・

「・・・メイド喫茶」

『は……?』

翔子さんがそう言い、教室中がポカンとします

「メイド喫茶……ですか？理由を聞いてもいいですか？」

それはまた凄い案を出してきましたね、翔子さん……

「……連休中に雄二が私の家に来て、そのときに雄二が私の家に勤めているメイドに目がいつて……浮気したからお仕置きした」

メイドじゃなくて私を見て欲しいの、ということですね

うーん……たぶんですが、それはメイドがいることに驚いていただけじゃないですか？

っていうか翔子さんの家にはメイドがいるんですね……やっぱりあの豪邸の令嬢さんでほぼ確定でしょうかね……

「メイド喫茶……確かにそれなら今までのAクラスのイメージを壊すことができますが……衣装の用意が……」

「それは大丈夫じゃないかな？だってAクラスだし……」

工藤さんまさか学園に用意してもらおう気じゃ……？

教材じゃないですし、用意はしてくれないでしょう……

「……学園に用意してもらえなくても私の家にそれなりの数がある」

いったい翔子さんの家には何人メイドがいるのでしょうか……？

「あの、ちょっとよろしいでしょうか、藤堂さん？」

「はい、久保君、どうぞ」

おっと・・・勝手に話を進めてはいけなかったですね・・・

「メイド喫茶なら男子は裏方中心になるのでしょうか？」

あれ？もうメイド喫茶は確定なのですか？

「そうですね・・・そうなるかもしれませんが。でも教室の設備を使えば、裏方の仕事は少ないかもしれませんね」

飲み物はドリンクバーで、食べ物は冷蔵庫の中身として申請すれば色々仕入れられますし・・・

「・・・執事服も少ないけど用意できる」

「あ、そうなんですか・・・えっと、メイド喫茶でだいぶ話が進んでしまっていますが・・・反対の人は遠慮なく言ってくださいね」

一応反対意見も聞いておかないと・・・

「これって、女子のメイド姿がただで見れて役得じゃないか？」

「ああ・・・反対する理由は無いな・・・」

男子生徒に反対意見はない模様・・・女子生徒の視線が冷たくなつてますけど・・・

「まあ、楽しそうだし・・・いいかな」

「たまにはパーっとしないかね。勉強ばかりじゃつまんないもんね」

女子も反対はいない模様・・・よかった

「ではAクラスの出し物はメイド喫茶で決定でいいですか？」

『はい』

私の確認に皆さんが了承の意を表します

にしてもメイド喫茶ですか・・・メイドの作法とかきちんとしていないとコスプレ喫茶になっちゃいますよね・・・

「とりあえず、衣装は申請してみますが、用意してもらえたとしても人数分は難しいかもしれません。なので足りない分は翔子さんをお願いしてもいいですか？」

「・・・わかった。今度もって来る」

「あと、メイドの作法に関して誰か指導をできる人とか・・・」

「あ、それならアタシが・・・」

「木下さん詳しいんですか？」

意外ですね・・・

「あ、えつと・・・おお弟が演劇部だからっ！」

なるほど、そういうことですか・・・確か期待の新人とか・・・でもそれならそんな焦ることも無いのに・・・

「では何をするかは決まりましたし、今日の残りは自習にして、明日からはメニューを考えたり、役割分担に入っていきましょう」

自習時間が減ると学園祭のやる気にも影響が出ますからね

20話

数日後・・・

役割分担も決まり、メニューもだいたいこんな感じに、と決定していき、今日はホールに出る生徒が衣装合わせや作法の練習をしていると・・・

《2年Aクラスの藤堂華織さん、学園長室まで来てください。繰り返しします・・・》

私に呼び出しの放送が掛かりました・・・

学園長室・・・

コンコン

「藤堂です」

「入りな」

ガチャ

お婆ちゃんとの関係は秘密にしてるつもりはないのですが、一応学園内では学園長と生徒ということで、話し方には気をつけています

コネで編入したとか、学園長の権力使ってAクラスに入ったとか、変な噂を流されかねないですね

まあ・・・

「失礼します」

「すまないね呼び出して、華織も代表として忙しかったと思うが、ちよつと問題が発生してね・・・」

お婆ちゃんは全く気にしてないけどね

「問題ですか・・・」

「ああ・・・つでそのフォーローのためにちよつと協力して欲しいんだよ」

「わかりました・・・それで私は何をすればいいんでしょうか？」

「2日目に召喚大会の決勝があつてね・・・そのあとこれのデモンストレーションを行うんだが・・・」

そう言つてお婆ちゃんが出したのが、召喚大会で優勝賞品として出される予定の白金の腕輪・・・

「実はこれには欠陥があつてね・・・点数がある水準を越えると暴走するんだ・・・」

「暴走、ですか・・・」

危ない話ですね・・・

「それが最近判明して、修理の目途が立ってない・・・」

「では賞品から除外すれば・・・」

「そういうわけにもいかないんだよ・・・スポンサーとかに見てもらわないと開発援助がなくなってしまうからね」

大人の事情ってやつですね・・・

「はあくどこかに召喚大会で優勝できて、それでいてバカな生徒はいないもんかね・・・」

「私は間違いなく使えないですよね・・・」

一応学年主席ですし・・・

「ああそうだね・・・華織が使ったら間違いなく暴走するね・・・だから華織にはもしものとき用に、別の技術のデモンストレーションをして欲しいのさ」

「別の技術ですか？」

「そう・・・名付けて、動物型召喚獣ってところかね」

動物型って今も人型じゃないですか・・・人も動物ですよ？

「人以外の動物の形をした召喚獣ですか・・・何の動物をモデルにするんですか？」

「こっちはインパクトが大事だからね。スポンサー受けのよさそうな狼辺りでいこうと考えているさね」

「でも人間以外だと操作が難しそうですね・・・」

身体の構造が違つと動作のイメージが浮かびにくいですし・・・

「だからこれから学園祭での公開まで、華織に練習をして欲しいんだよ。放課後に1、2時間くらい構わないかい？」

「はい、大丈夫だと思います」

ちよつと準備を急げば間に合いますね

「あと、もう1人くらい協力者を見繕つておいてくれないかい、召喚大会はペアだからデモンストレーションのときに優勝したペアと対戦するかもしれないし、ダメなときは華織とその生徒で対戦してもらつからね・・・もちろん口が堅い生徒で頼むよ」

うーん・・・誰かこういうのに強い人で、秘密を守ってくれる人・・・いるかな・・・？

「失礼しました」

「よろしく頼むよ」

ガチャ・・・ボタン

お婆ちゃんとの話も終わり、学園長室から出てAクラスの教室に戻る・・・

誰かパートナーを探さないと・・・

学園長室は1階で、教室は3階なので、階段を上がっていると・・・

「・・・ちょ?!華織?!(ブシャアアア)」

「え?わつ?!康太?!ってちよつと?!」

康太が上から降りてきていて、私を見て鼻血を出して倒れました
やっぱり詰め物が無いと噴出しちゃうんだ・・・

私はポケットからティッシュを出して康太の鼻に無理矢理詰めた・
処置としては正しくないんだけど、止まる前に外して正しい処置
をすれば大丈夫かな・・・

「・・・スマン」

「いいよ・・・っていうか悪いのは私だからね・・・保健室行こう
か」

「・・・ああ」

保健室・・・

「では先生、あとお願いしますね」

康太を保健室に連れてきて、養護の先生に処置をお願いし、私は保健室を出ようとする・・・私がいたら鼻血は止まらないから・・・

「その格好で戻るの？」

養護の先生は引きつった表情で私にそう聞きました

「仕方ないですよ、制服の代えありませんし、体育も学祭準備期間で無いから体操着も持ってきてませんし・・・髪に付いたのは教室に帰ってからお絞りでも使って落とそうかと・・・」

私の格好・・・康太の鼻血が制服や髪に付いた状態

まあ上で鼻血を噴いたから下にいた私に掛かるのは仕方がないことで・・・

「流石にそれは養護教諭として許可はできないわね・・・他の生徒が気分を悪くするわ」

「でも・・・」

「あなた確かAクラスよね？制服は申請すれば支給されるし、クリーニングしてもらえるわ。とりあえず全部クリーニングに出しなさい。髪はそれでいいけど教室じゃなく、ここで落としていきなさい」

制服が支給されるって・・・確かに学生に必要なものだからわかりませんが、Aクラスだからってというのがまた・・・凄い優遇・・・

「でも私のサイズってあらかじめ用意されてるものなんでしょうか・・・？」

高校生で身長140前半の私は想定の範囲外じゃないですか？

「ちょっと制服の予備を見えます。その間にあなたは髪の毛を落としておきなさい」

「はい・・・」

養護の先生が保健室から出て行きました

そして残された私と康太・・・

なんか凄い気まずいんですけど・・・

21話

私は養護の先生が用意してくれていたタオルを濡らして髪に付いた血を落とす

康太は康太で自分で鼻血の処置をしていて・・・

「……………」

お互い一言も話さない……………気まずい……………

やっぱり康太の鼻血体質をつくった私が康太と一緒にいるのは……………

でも保健室から出たら養護の先生に怒られそうだし……………

「……………この程度はいつものことだ。気にするな」

「いつものことって……………」

康太は処置が終わったのか私に気を使って話しかけてきます

「……………それより、さっきの放送。なんかあったか？」

「え？うーん……………」

康太が話題を変えてきます……………

あのことは康太に話していいのだろうか……………？

「康太ってさ・・・口堅い？」

「・・・？・・・ああ・・・色々頼まれごともあるからな」

うーん・・・康太を巻き込んでいいのかな・・・？

「頼まれごと？どうせ違法スレスレなことなんでしょ？」

この前に盗聴みたいに・・・ってあれはスレスレじゃなくて思いつきり違法か・・・私がお婆ちゃんに言ったら間違いなく終わりだもんね・・・言わないけど

「・・・（シラー）」

康太が目を見ました

はあ・・・夫が犯罪者って勘弁して欲しいんだけど・・・

「・・・それより、何か困ってるのか」

あ、逃げた・・・

口堅いみたいだし、康太に頼んでみようかな・・・Aクラスの皆は勉強したいだろうから頼めないし・・・

「あのね・・・今日から学園祭まで、毎日放課後に1、2時間くらい時間をくれない？」

「・・・別にいいが・・・なにをすればいい？」

「それは放課後になればわかるよ・・・」

私の口から説明するよりお婆ちゃんの口からのほうがいいと思うし、私には言ってもいいけど、康太に聞かれたらまずい内容もあるかもしれないし・・・

「・・・まあいいか・・・とりあえず」

康太が立ち上がって私に近づいてきて・・・

「何？」

「・・・俺への頼みごとには報酬が必要なんだ」

随分いやらしい人になったね・・・2つの意味で

「報酬？お金とかあんまり無いんだけど・・・」

「・・・そうか、なら・・・」

康太が私の左腕を掴んで・・・

「は・・・っ?!」

またキスされた・・・ホント殴るか股間蹴り上げてやりたい・・・でも、康太の口から血の味がしてそんな気は失せてしまう・・・

「・・・前払い」

「あっそ・・・なら受けてくれるってことでいいんだね？」

「・・・元より断る気なんかない・・・華織の頼みだからな」

はいはいそうですか・・・康太は私がいなかった3年で何があったのかな・・・？

彼女だったときより私を大事にしてくれてるような気がする・・・

ガラッ

「藤堂さんごめんなさいね、ワンサイズ上のしかなかったわ・・・
って、あなた達は何してるの？」

保健室の戸が開いて養護の先生が戻ってきました・・・

私達の今の状況は・・・キスはしてないけど、ほぼ抱きつかれてる
ような感じで・・・

「えっと・・・髪に付いた血を落とすのを手伝ってくれるみたい
なんです悪いので断ってて・・・タオルの奪い合いを・・・」

「・・・（コクコク）」

私と康太が離れながら言い訳をします

「ホントに？」

「ホントですっ！」

養護の先生がジト目で見てきます

「まあいいわ・・・それより早く落としちゃいなさい。あとちょっ

とで午後の授業時間も終わるわ」

「はい」

そして髪をきれいにし、先生が持ってきてくれたワンサイズ上の制服に着替えて・・・

「うーん・・・やっぱ袖が長いな・・・」

手のひらがほぼ袖から出ない・・・

「・・・プツ」

康太・・・そんな隠してるつもりだろうけど、肩揺れてて笑ってるのバレバレ・・・

「今日明日くらいの辛抱よ。さ、早く教室に戻りなさい」

私と康太が保健室から追い出されました

放課後・・・学園長室

「つということ、この人を協力者に・・・」

お婆ちゃんに康太を紹介する・・・協力者として、ね・・・

「ふーん・・・アンタ、クラスと名前は？」

お婆ちゃんが康太を観察するように見て、名前を聞きました

「・・・土屋康太、2年Fクラス」

「華織、こいつにはどこまで話したんだい？」

「まだほとんど何も・・・どこまで話していいかわからなかったの
で・・・」

「そうかい、なら簡単に・・・召喚大会の決勝後にある新技術お披露
目の手伝いをして欲しい。やるかい？」

うわ・・・凄いざっくり・・・

「・・・華織の頼みだからやる」

「アンタ・・・うちのとどんな関係だい？」

「・・・婚約しゲフッ」

康太がふざけて答えようとし、私がお腹を肘で殴って止めます
もう！我慢してたのにそんなこと言うから手が出ちゃったじゃない・
・

「昔の彼氏です」

「そうかい・・・まあいいさね・・・面識あつてここに連れてくるならそれなりに信用できるってことさね・・・」

私が訂正して言うと、お婆ちゃんはずっとニヤけながら言いました
え？いいの？そりゃ確かに信用はしてるけど・・・

「じゃあ明日から練習できるように設定しとくから授業終わったらここに来な・・・くれぐれも内密に頼むよ」

22話

それからまた数日・・・学園祭の準備もかなり進み・・・

そんなある日・・・

放課後・・・今日も動物型召喚獣の練習をしています

白い毛並みのなかなかリアルな狼の召喚獣で、種類で言えばホツキヨクオオカミを基にしたのでしょうか

最初は操作に結構混乱したけど、今は慣れてきてだいぶ自由に動かせるようになってきました

「ねえ？康太のクラスって学祭何やるの？」

「・・・中華喫茶」

「ふーん・・・」

操作の練習をしながら康太と話してする・・・操作だけでいっぱいいっぱいになるようだとか対戦なんてできませんからね・・・

「今日さ・・・康太達野球してたよね？」

「・・・人違い」

「Fクラスの人結構いたのに？」

「・・・クラス違い」

この時期に野球して西村先生に怒られてるクラスなんて康太の
だけでしょ……

prrrr……prrr、pi!

「はい、もしもし……ああわかった、今から戻る」

練習を見ていたお婆ちゃんに呼び出しの電話が……ちなみにこ
は空き教室です

私達のしていることはそこそこのランクの高いシークレットなので、
窓も戸も閉め切り、カーテンも閉めてやってます……

暑い……空き教室だからエアコンの性能がAクラスより格段に
悪くて……大事じゃないけどもう1回、暑い……

「すまないね、ちょっと出てくるよ……教頭が用があるそうだ・
・召喚フィールドはそのままにしとくからこのまま練習しといてく
れ」

「はい」

「……（コクン）」

そう言っつて、お婆ちゃんが部屋から出て行きました

ん？じゃあ誰がフィールドを維持するのかつて？召喚フィールドは
最初から機械制御で展開していますよ

機械制御とは、教師の代わりに機械に召喚フィールドを承認させて

展開させる方法。これを小型化し、腕輪型にしたものが、白金の腕輪の代理召喚型です。ちなみにもう1つ、同時召喚型といって召喚獣を2体同時に召喚できるタイプもあり、それも召喚大会の賞品として出されています

そして5月の半ばなのに、エアコンが追いつかないくらい部屋を空気を暖めている原因でもある・・・

この装置、発熱が半端無いんです・・・持ち運びに不便になるから水冷式にできないらしく、扇風機でがんばって冷やしてますが・・・白金の腕輪のほうは、この問題も解決できてるみたいですね・・・

それでもなぜこれを使わないといけないのか・・・それは動物型召喚獣の設定がこれに入ってるそうで・・・だから今のところこの装置に召喚フィールドを展開させないと動物型召喚獣は召喚できない・・・本番までには腕輪型にして通常の召喚フィールドで人型と切り替え可能で呼べるようにするらしいです

それは置いといて・・・この暑い教室内、窓も開けれず・・・なら当然薄着になるしかなくて・・・私と康太はブレザーを脱いで練習をしています・・・これでもまだ暑いけど・・・

「・・・（ジー）」

「何、康太？」

2人きりになり、康太が私に視線を向けてきて・・・

「・・・透けてる」

「は・・・何が？」

「・・・ブラ」

「なっ?! 変態っ!」

私は腕で胸の辺りを隠す

「・・・昔は着ける必要が無いくらいだったのにな・・・」

「殴るよ? これでも少しは成長したんだから・・・」

「・・・俺のおかげで？」

「うつ・・・」

それを言われると何も言えない・・・というか私が気にしてるのわかっててそれを言うか・・・

「・・・スマン」

「いいよ・・・私が悪かったんだし・・・」

康太も流石に悪いと思ったのか謝ってきました

「もういいや、好きなだけ見ればいいよ・・・よく考えたら恥ずかしくなかったし、だって康太には全部見せたんだからね」

そう言って召喚獣のほうを向く

はあ・・・私はバカだね・・・昔の傷を穿り返して・・・

暗い気持ちになりながらも私は召喚獣の操作練習に集中しようとして・・・しかしその集中も2秒後に吹き飛んだ・・・

「・・・そんなに悩むな。あれは拒否しなかった俺も悪いんだ」

康太が後ろから抱きしめてきた・・・なんでこんなに優しいのさ？
今だって鼻血出して苦しんでるくせに・・・

私の目の前では康太の召喚獣が私の召喚獣に寄り添っていて・・・
なんか番^{つがい}みたいで・・・

そんな感じで数分・・・流石に恥ずかしくなったので離れて、操作の練習を再開しました

しかし・・・

「・・・」

沈黙・・・はあ・・・気まずすぎ・・・

そのとき・・・

ガラッ

「はあ・・・面倒なことになってきたね・・・」

お婆ちゃんが戻ってきていきなりそう言いました

「華織に土屋、今やってることは誰にも言っていないだろうね?」

「はい、誰にも」

「・・・(コクン)」

「チツ・・・じゃあどこから洩れたんだろうね・・・」

お婆ちゃんは凄くイライラしてる様子で・・・

「情報が洩れてるんですか?」

「ああ・・・みたいさね。しかも教頭の竹原に・・・腕輪のことも、華織達のやってることも・・・」

なるほど、さっきの用件はそのことですか・・・

「一応惚けたが・・・あの男。余計なものを召喚大会の賞品に入れてきやがった」

「余計なもの?」

「近々プレオープンする如月グランドパークのプレオープン用のプレミアムチケットだよ」

はあ・・・遊園地のプレミアムチケットですか・・・

「確かに学園の行事で遊園地のチケットは変ですよね・・・」

「まあそれもあるんだけどね・・・さらに厄介な契約で入手した日

く付きでね・・・それを使って来園したカップルを強制的に結婚までプロデュースして宣伝に使っらしい・・・」

あー・・・それは確かに嫌ですね・・・

「・・・欲しい（キラキラ）」

こういうのに入手されたら溜まったもんじゃないですよね・・・

「・・・俺も召喚大会に参加する」

「残念だがこの話を聞いて即締め切らせてもらったよ・・・ちょうど切りのいい人数にもなったんでね」

それを聞いて康太が床を叩きながら泣く真似をします・・・ウザイ

「そういえば、竹原と話してるときにFクラスの坂本と吉井がやってきてね・・・教室の補修工事なんて頼んできやがったから、召喚大会の優勝を条件にしてやったよ・・・これで腕輪は大丈夫かもしれないね」

お婆ちゃんがニヤリと笑いながら言います・・・ホント学園長らしくない学園長だよね、お婆ちゃんって・・・

「それじゃ、今日はこの辺で終わりしようかね・・・召喚フィールド消去」

お婆ちゃんの声に反応して装置が召喚フィールドを消しました・・・

音声応答の前に発熱問題を何とかしてよ・・・

・ そう言うとお婆ちゃんが、だってそのほうが楽だろう？だってさ・

便利さは常用するのに問題なくなっただけからにしようよ・・・

23話

学園祭当日・・・

「うわーこの衣装本格的ですね・・・」

「霧島さんが用意したのは実際に使用しているものだからわかるけど、学園が用意したものもね・・・」

学園や翔子さんが用意してくれたメイド服の衣装を見て、女子生徒達が感想を言います

「では早めに着替えて、衣装に慣れておきましょうか」

「そうだね」

木下さんと工藤さんのやりとりを聞き、皆が衣装を持って教室内に仕切りを使って作った更衣室に向かいます

「・・・華織？」

「は、はいっなんですか？翔子さん」

「・・・どうしたの？」

少しブーツとしてしまった私に翔子さんが気付き声をかけてきます

「いえ、なんでもないですよ」

ホントは心配事があるんですけど・・・

「・・・そう」

それは・・・今朝の話・・・

私と康太は学園長室で、お婆ちゃんと打ち合わせをしていました

「・・・ということだから、上手くいけば・・・」

「・・・（シッ）」

お婆ちゃんの話を通り、康太が静かにするようにジェスチャーをします

「・・・盗聴されてる」

「なんだって？」

そしていきなりそう言う・・・康太は懐から何か機械を取り出して・・・

「なんでアンタがそんなものを持ってんだい？」

「・・・企業秘密」

機械をかざしながら部屋中を歩き回っています

あれは、盗聴器を探し出す機械で、持つてゐる理由は、自分も使うから、かな？

「気付いた理由は？」

「・・・なんとなくそんな電波が出てゐる気がした」

自分が使つてゐるからそういう電波に敏感になつたんだね・・・

『ピーピーピー！』

「・・・ここか」

部屋の隅で機械が反応して、康太がその辺りにあるものを退かしてを探します

「・・・あつた」

康太がそう言う手には小さな機械が・・・

「なるほど、道理で情報が洩れてゐるわけさね・・・」

それから康太がもう少し部屋の中を探して、盗聴器はこれ1つだということがわかり・・・

「ということは、華織やアンタのクラスの連中も危ないかもしれないね・・・まあ向こうも教師だから生徒を傷つける真似はしないと思うがね・・・一応気をつけるんだよ」

「はい」

「……（コクン）」

なんてことがあって……うーん、困りましたね……下手するとAクラスにも迷惑が掛かってしまいます……

「藤堂さんすいません、ちょっと霧島さんと抜けます」

「あ、はい、召喚大会ですね。がんばってくださいね」

「……ありがとう。行ってくる」

「はい、いつてらっしゃい……」

私は翔子さんと木下さんを教室の入り口まで見送ります……

翔子さん……私にはお礼なんて言われる資格は無いんですよ……
だって私は、勝ってほしいって思ってたないから……

なぜなら、この2人が優勝したら、学園に大きなダメージがくるから……

結局クラスメイトより、学園のこと……相変わらず私は最低の代表ですね……いえ、代表以前に人として最低、ですね……

そんな私でも少しでもクラスのために・・・

「お帰りなさいませ、ご主人様」

今はがんばって接客をこなしましょう・・・

「それではそろそろシフトの入れ替わりをしていきましょう。手の空いた人から交代していつてください」

『はい』

ある程度時間がたったので、裏方の人にそう指示を出し、ホールに出ている生徒にも順次交代をしていくように言っていきます

「あれ？藤堂さんは交代しないの？」

「はい、私はずっと出ていますよ。代表ですからね」

クラスメイトの1人に聞かれ、私はそう返します

迷惑をかけるかもしれないクラスへのせめてものお詫びです・・・
もう1つ狙いがありますけど・・・

「休憩無しで大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ、ときどき裏方に回ったりもしますからね」

「でもせつかくの学園祭なんだし藤堂さんも楽しまないと・・・」

正直、それどころじゃなくて楽しむ余裕は無いんです・・・

「明日は少し抜けたりしますから大丈夫ですよ」

「そうですか」

その生徒は納得したようで休憩に入っていました

「では、また少し抜けますね」

「・・・行ってくる」

「はい・・・」

2回戦に向かう翔子さん達を見送り、まだお昼前なのでお客が少ないので、入り口付近でお客が来るのを待っています・・・すると

「ここかな・・・女の人がいっぱいだから・・・お姉ちゃんがいるかも・・・」

少し不安そうにしながら小学生くらいの女の子が入ってきました・・・
・迷子かな？

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「え．．．？」

私の出迎えの挨拶に女の子はポカンとしました

「お嬢様？どうかされましたか？」

「．．．」

女の子はなんとというか．．．どうしていいかわからない様子、なのかな？

「どうしたの？藤堂さん？」

おかしい様子に気付いた工藤さんが近づいて尋ねてきます

「あ、工藤さん．．．この子なんですが．．．って、あ！」

私が困って工藤さんに助けてもらおうとすると、その女の子は工藤さんの下に走りよって．．．

「葉月もあの服着たいです。お姉ちゃん！」

そう言い放ちました

「工藤さんの妹さんですか？」

にしてはあまり似てないような．．．

「うえ？！い、いや違うけど．．．」

工藤さんは違うと言います・・・なら年上の女の人という意味でのお姉ちゃんかな？

「あのちつちやいお姉ちゃんが着てるなら葉月も着たいです」

グサツ・・・

私の心に何かが刺さる音がした・・・気がします

「藤堂さん?!」

「うう・・・いいいいよ・・・どうせ私はチビですよ・・・でもあなたよりは大きいじゃないですか・・・」

私は床にの字を書きながら少しだけ言い返します
まさか小学生に言われるとは・・・きついですね・・・

「でも葉月が中学生になる頃には追い抜いてると思うです」

グサツ・・・

「あはは・・・葉月ちゃん？そこら辺にしないと、あのお姉ちゃんが泣いちゃうよ?」

「泣きませんよっ?!」

子供じゃないんですからね

っとそんな感じで入り口付近でやっていると・・・

「流石Aクラスの教室はきれいだな。邪魔するぜ」

「真ん中辺りの席で頼むぜ」

坊主頭とモヒカン頭のガラの悪い男子生徒が入ってきました

なんか面倒ごとの予感です・・・

24話

「それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！」

「そうだな。さっき言った2・Fの中華喫茶は酷かったからな！」

「テーブルは腐った箱だったし、虫もわいていたもんな！」

坊主頭とモヒカン頭の2人組の男子生徒がわざとらしく、周りに聞こえるように大声で話をしています・・・内容は、康太達のクラスの出し物の悪口

それを私はため息をつきながら見て、他のお客に頭を下げています

仕方が無い・・・私達Aクラスは荒事に向いてないし、追い出そうとたり下手に注意して喧嘩沙汰になるわけにもいかない・・・先生達は召喚大会の立会いでほとんどが借り出されていて・・・せめてもの希望は補習教師の西村先生が校内を巡回しているんですが・・・

「おっと、そろそろ時間だな、行くぞ」

この2人組、回数を分けてちよくちよく来て、西村先生と上手く鉢合わせしないようにしています・・・よくここまで西村先生の巡回時間がわかりますね・・・もしかして教頭先生と繋がってたり・・・いや、まさか教師が生徒を利用するなんて・・・あれ？私や康太、あと召喚大会で優勝しろと言われた2人もお婆ちゃんにある意味利用されてるような・・・まあ私は引き取ってくれた恩があるから構いませんが・・・

にしても・・・向こうは利用の仕方が悪いですね・・・まさか生徒にこんな下らないことをさせるとは・・・

「ホント何なんだろ・・・あれ」

「あの2人組のせいで他のお客が全然ゆつくりできないわ」

「・・・迷惑」

出て行く2人組を見ながら翔子さん達が小声で愚痴をこぼします

「ごめんなさい・・・私が注意して追い出すことができれば・・・」

「あれは無理でしょ・・・上級生みたいだし、ああいうのは放っておくしかないよ・・・」

「そうね・・・幸い悪口の内容はFクラスの出し物だけだし、アタシ達は何かするとこつちにまで被害がきそうだしね・・・」

私の謝罪の言葉に工藤さんと木下さんがそう返してきます

「さて、もうすぐお昼時ですし、お客さんが続々来るでしょう・・・がんばって席を埋めましょう・・・そうすれば入店を断れますし」

「ええ」

「そうだね」

「2-Aのメイド喫茶、どうですか？」

パシャ・・・

「あ、写真撮影はご遠慮くだ・・・なんだ康太か・・・」

教室の入り口付近で呼び込みをしてるとカメラの音がして、振り向くと康太がいました

「・・・扱い酷いな」

「そりゃ今までの行いがね・・・」

無理矢理キスしてきたり・・・抱きついてきたり・・・

「・・・他に人がいる中でそんなのができるか」

「え？あーそうなの？」

そういえば・・・確かに今までそういうことをしてきたのは2人きりのときだけだったね・・・

「っで？入ってくよね？撮ったんだもんね？撮り逃げなんて許さないよ？」

「・・・中間報酬で」

なにそれ？

「・・・明日学校サボってもいいんだが？」

「ぐっ・・・はぁ・・・私だけなら撮っていいよ・・・」

「私弱いなぁ・・・」

「・・・仕入れができないがまあいいか」

「パシャ・・・パシャ・・・パシャ・・・」

康太が私を色々な角度で撮り始めました

「明久、ここはやめよう」

「雄二、ここまで来て何いつてるのさ！早く中に入るよ！」

「頼む・・・ここだけは・・・Aクラスだけは勘弁してくれ！！」

ん・・・？なんか聞き覚えがあるような声が・・・

「そっか、ここって坂本が大好きな霧島さんがいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ！」

さらに聞き覚えのある声・・・

「雄二、これは敵情視察なんだ・・・メイド喫茶だからといって決して趣味じゃないんだから・・・」

そう言っていた生徒が、私と私を撮っている康太を見つめます・・・

「ムッツリーニ・・・?」

「・・・今忙しい、そして人違い」

康太、誤魔化せてないから・・・

「あ、さっきのちっちゃいお姉ちゃん」

む・・・その声は・・・

「さっきの小学生・・・」

「さっきの小学生じゃなくて葉月ですっ!」

でも小学生でしょう・・・

「コラ葉月、人のことをちっちゃいと言っちゃいけません!」

「むう・・・だってお姉ちゃん・・・」

「わかったわね!」

「はい・・・」

どうやらこの生徒の妹さんみたいですネ・・・

「ごめんなさい藤堂さん、うちの葉月が・・・」

「いえ、いいですよ・・・ちっちゃいのは事実ですし・・・」

「諦めてはダメよ、まだ希望はあるわ・・・」

あなたには言われたくないです・・・どう見ても身長150センチ超えてるじゃないですか・・・

「いえ、もう流石にこれ以上は伸びないと思いますよ?」

「伸びない?」

「身長じゃないんですか?」

「え?あ、そう!身長よ身長!まだ希望はあるわよ」

いや、どうがんばってももう150センチ台は無理でしょう・・・あと1センチ伸びればいいほうじゃないですか?

「美波は胸のことを言ったんだよね?でも諦めも肝心だよ美波 美波の胸はもう肩が外れるように痛い!!!!!!」

あの・・・入り口付近で暴力沙汰はやめてほしいのですが・・・それと・・・

「胸のことですか・・・これでも普通にBはあります・・・」

「アンタはやっぱ敵よ!!」

えー・・・あなたのすぐ近くにもっと凄い人がいるじゃないですか・・・私よりちよっと身長が高いくらいだけど、胸はFくらいって

そうな・・・

「ねえ？姫路さん・・・あなたのほうがよっぽど・・・」

「そうね・・・」

「はい？?」

25話

ガラッ

「・・・お帰りなさいませ、お嬢様」

「わぁ・・・綺麗」

2-Fの生徒達が教室の戸を開け、翔子さんがお出迎えをし、姫路さんが声を洩らしました

結局康太には撮るだけ撮って、当番だから、と逃げられてしまいました

まあここにいっても鼻血が止まらないからゆっくりできないだろうし、いいか・・・

「・・・お帰りなさいませ。ご主人様、お嬢様」

お客が女子生徒だけではないと気付いて、言い直す翔子さん・・・

「・・・チッ」

それを見て、舌打ちをして翔子さんを見ないように顔を逸らしている彼氏さん

「・・・お帰りなさいませ、今夜は帰らせません、ダーリン」

彼氏には特別に、顔を赤くしてアドリブを入れて出迎えの挨拶をしています・・・

「霧島さん・・・大胆です」

「ウチも見習わないと・・・」

「あのお姉さん、寝ないで遊ぶのかな？」

えっと、私はどんな反応したらいいの？

「では席へのご案内、よろしくお願いしますね」

私は引き続き入り口で呼び込みをします

『全然よろしくねえぞ?!』

「・・・」

『しよ、翔子！コレホントにウチの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ?!』

はぁ・・・折角静かだったのに・・・また他のお客に頭を下げないといけませんね・・・

私は教室内に戻って、ホールのメンバーに入ろうとする・・・が

「おう、邪魔するぜ、2人だ。中央付近の席で頼むぜ」

はあ・・・さらに面倒な人達が来ました・・・この人達、これで何回目でしょうか？

「お帰りなさいませ、ご主人様」

しかしまだ席は埋まりきっているわけではない・・・だから入店を断れない・・・

「申し訳ありませんが中央付近は空いていないようです。ご希望に添えませんがよろしいでしょうか？」

「チツ・・・なんだよAクラスの癖に使えねえな・・・」

一応中央付近からお客を入れていったからもしかしたら・・・

「まあいいや、入らしてもらおうぞ」

ダメか・・・

「・・・それでは席へご案内いたします」

ならFクラスの人達に何とかしてもらいしょう・・・

私は中央から外れ、Fクラスの人達に近めの席に2人組を案内します・・・近すぎるとグルだと思われるので、声が聞こえて、場所が向こうにバレる程度・・・

けど・・・

「それにしても、この喫茶店はいつ来ても綺麗でいいな！」

「そうだな。さっきいった2・Fの中華喫茶は酷かったからな！」

「テーブルが腐った箱だったし、虫も湧いてたもんな！」

中央付近に座れなかったからか、さっきよりも大声で話し始める2人組・・・これならどこの席に案内しても位置はわかるんじゃないかというくらい・・・しかも話してることはさっきと同じ・・・

私はその様子に困った顔をしつつ・・・

・・・なんとかしなさいよ・・・

という念をこめてFクラスの人達に視線を送ります

翔子さんの彼氏がその視線に気付いたのか、翔子さんと呼んで何か話しています・・・そして翔子さんがメイド服を脱いで・・・それを女子生徒に止められて・・・なにやってんですか？その後、彼氏さんがまた何か言って翔子さんが更衣室に向かっていきました

そんなことをしてる間も・・・

「あの店、出してる食い物もやばいんじゃないか？」

「言えてるな。食中毒でも起こさなきゃいいけどな！」

「2・Fには気を付けろってことだよな！」

2人組は大声で悪口を言い続けています

・・・早く何とかしてよ・・・

つと念をこめて再度Fクラスの人達に視線を送ると、今度は男子生徒があつち向いてホイを・・・何遊んでんの？あ、目潰し・・・痛そう・・・

そして目潰しを受けた生徒が翔子さんの持ってきた予備のメイド服を持って店から出て行きました・・・ああ・・・なんかまた騒ぎの予感・・・

数分後・・・

たぶんさっきの生徒（・・・だよね？）がメイド服を着て、カツラを被り、メイクまでして戻ってきました・・・いやまさかここまで変わるとは・・・とても男子には・・・見えないね

ホールに出ていた女子達が、それを見てヒソヒソと話しています・・・
・たぶん内容はあんな子いたっけ？あたりでしょうね・・・

「とにかく汚い教室だったよな」

「ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな」

そんなことも露知らず、2人組は相変わらず大声で悪口を言っています。そしてその生徒は2人組に近づき・・・

「お客様」

少し高めの声で話しかけました

あの・・・メイド喫茶ですから、男性のお客にはご主人様と言わないと・・・バレますよ？

「なんだ？・・・へえ、こんな子もいたんだな」

「結構可愛いな」

バレてない・・・？しかも好評？

「お客様、足下を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」

「掃除？さつさとすませてくれよ？」

普通お客のいる席ってお客を退かしてまで掃除はしませんよ？男相手に鼻の下伸ばして思考止まってますね・・・

「ありがとうございます。それでは・・・」

あの、何を・・・

「ん？なんで俺の腰に抱きつくんだ？まさか俺に惚れて・・・」

「くたばれええっ！」

「じばあっ！」

坊主頭の生徒がプロレス技のようなものを極めました
ああ・・・とうとう暴力沙汰が起こってしまいました・・・やはり
当事者同士で解決させるのは無理がありましたね・・・

「き、キサマは、Fクラスの吉井・・・！まさか女装趣味が・・・」

「こ、この人、今私の胸を触りました！」

な、なんてことを・・・痴漢沙汰まで・・・他のお客の迷惑を考えて・・・

「ちょっと待て！バックドロップを決めるために当ててきたのはそっちだし、だいたいお前は男だと・・・ぐぶあっ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

もういや・・・誰かこの人達を追い出して・・・

そして逃げ出すように教室から出ていく2人組、それを追って出ていく翔子さんの彼氏と女装した生徒・・・

「・・・お会計は、野口英世を1枚か、坂本雄二を1名かのどちらかをお願いします」

残ったFクラスの女子生徒が会計をしようとし、翔子さんがそんなことを言います

翔子さん・・・それは横領じゃ・・・

それにしても・・・迷惑料がほしいです・・・

26話

「では3回戦にいつてきます」

「あ、はい・・・」

木下さんと翔子さんが召喚大会のため、シフトを抜けるというてきました

やはりAクラスだけあつて勝ち上がってますね・・・これに勝てば準々決勝ですか・・・

「・・・どうしたの？」

「あ、いえ、いつてらっしゃい・・・がんばってくださいね」

「・・・うん」

がんばって・・・負けてください

それから数十分後、2人は戻ってきましたが、表情に悔しさなどは見られず・・・恐らく勝ったのでしょね・・・

はあ・・・いくら私達のデモンストレーションが成功しても、白金の腕輪のデモンストレーションが失敗したら結局資金援助には悪影響が出てしまう・・・もしこの学園からお婆ちゃんがクビになったら、私はどうなるのでしょうか・・・

「その君、注文いいかね」

「はいご主人様、ご注文をどうぞ」

ホールで接客をしてると、メガネをかけた50代くらいの男性に呼び止められました

この年でメイド趣味？まさかね・・・この学園の先生で見回りついでに入ったのかな・・・でも周りの目を気にしないでメイド喫茶に入ってくるなんて・・・ちょっと危険な先生ですね・・・

「コーヒーを1つ」

「コーヒーお1つ、以上でよろしいですか？」

「ああ・・・それと、1ついいかね？」

ん・・・？

「はい、なんででしょう？」

「このクラスの代表の、藤堂華織という生徒はどの子かな？」

「！」

この人・・・

「失礼ですがお客様、その質問にはお答えできません」

「なぜ？」

「それは生徒の個人情報に関わる問題です。一般来場客にお答えした後々問題になった場合の責任が、私にはとることができませんで・・・」

「ふむ、確かにそうだな・・・」

私の回答に男性は顎に手を当てて頷き返してきました・・・でも、私の予想が正しければ・・・

「しかし私にそれは当てはまらないな。私はこの学園の教師をやっているのだから、一般来場客ではないのだよ」

そつくるよね・・・なら・・・

「それは大変失礼いたしました。まさかこの学園の先生だとは・・・あまり見ないお顔でしたので・・・誠に申し訳ありません」

そう言つて私は頭を下げます

「いや、気にすることは無い。確かに私は教頭だから生徒の前に立つことが少なくてね。知らなくても不思議ではない」

やっぱり教頭か・・・さて、どうやってこの場を切り抜けるか・・・

「それで、藤堂華織という生徒は誰なのかな？」

くっ・・・ここで適当に答えるわけにはいかないし・・・でも朝の盗聴で私が今日学園に登校していることはわかってるはず・・・

「あの、そうですね・・・」

「あ、いたいた・・・藤堂さん」

「げっ・・・」

タイミング悪く木下さんが私に声をかけてきました・・・

「少々失礼します・・・はい、なんですか。木下さん」

私は教頭から一旦離れて木下さんの用件を聞きます

「4回戦に行ってきます」

「・・・わかりました・・・いつてらっしゃい・・・」

「どうしたの？」

「いえ・・・」

ただ、私の身に危険が及ぶ可能性が格段に上がったただけです・・・
あと、Aクラスに迷惑が掛かる可能性も・・・

木下さんと翔子さんをその場で見送って、私は教頭の席に戻る・・・

「失礼しました、それではご注文の品をお持ちいたしますね」

「いや、もう時間なんで・・・では」

教頭が席を立ち、教室から出ていく・・・その顔は気のせいかもしれない

れないけど、目的は達成したと言いたげな表情で・・・

くっ・・・これで私の面が割れてしまいましたね・・・困りました・・・
教頭がどんな人かは知らなかったけど、ある程度の歳の人だろうか
ら、メイド喫茶に入ってきたり、メイドに声をかけたりはし辛いだ
ろうと思ってたのに・・・

side：教頭

あれが妖怪ババアの義娘か・・・根性が捻じ曲がってるところがよ
く似てる

なにやら変な視線を向けてきていたが・・・目的がなければ誰がこ
んなところ・・・

しかし質問をしたとたんに警戒しだして・・・私のことは知らなか
ったのだな・・・

敵の情報を教えないとはあの妖怪ババア、義娘すら所詮は駒という
ことか・・・

可哀想だな・・・同情してしまいそうだ・・・フフフッ・・・

だが、これからもっと可哀想になるんだがな・・・私の手で・・・

p i p i p i . . . t r r r r t r r r r . . .

『はい』

「私だ。依頼の対象に1人追加だ．．．名前は藤堂華織、外見はチビのメイド、詳しいことは追って伝える」

あとは、胸ポケットに仕込んでおいた小型カメラで撮った画像を送れば．．．

ふっ．．．これで妖怪ババアに対する切り札ができたな．．．

にしても妖怪ババアか．．．うちの生徒共もなかなかいいあだ名をつけるじゃないか．．．

s i d e : 華織

どうしよう．．．今から学園長室に籠ってしましましょうか．．．でもそれだとAクラスに迷惑が掛かりますし．．．

せめてお婆ちゃんに連絡をしたいけど．．．私は携帯を持ってないし．．．まあ持つててお婆ちゃんに連絡できたとしても、誰が私なんかを守ってくれるというのでしょうか．．．康太もFクラスの人も．．．自分や自分のクラスを守るだけで精一杯のはず．．．

結局私は．．．1人じゃ自分の身も守れないんですね．．．

1人で生きていこうなんて考えてたくせに・・・何もできない・・・
ならせめて・・・

「お客さんが減ってきましたね・・・木下さんと翔子さんが戻ってきたら、入り口で私が少し呼び込みしますね」

「はい、お願いします」

周りに迷惑はかけないようにしよう・・・何があっても、ね・・・

「ただいま戻りました」

「あ、はい、お帰りなさい、翔子さん、木下さん」

「・・・ただいま、華織」

4回戦に行っていた翔子さんと木下さんが戻ってきました・・・結果は、聞くまでも無いですね・・・表情を見ただけでわかります・・・

「ではこのままシフトに入ってください。私は入り口で呼び込みをしますので・・・」

「わかったわ」

私が軽く指示を出して入り口に向かおうとする

「・・・休まなくて大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ。ちゃんと休みながら呼び込みをしますので・・・」

「・・・そう」

翔子さんも納得したようなので私は教室から出て呼び込みを始めました

私の居場所がすぐわからないと、私を探し出すために別の人が被害に遭うかもしれません・・・なら私は隠れたり逃げることはできない・・・何をされるかはわからないけど・・・私だけに被害が来るようにして、あとは只管耐えるしか方法は無い

そう、思っていた時期がありました・・・

「はっ！こりや確かにチビのメイドだな」

「おじょーちゃんよお、痛い目遭いたくなかったら俺らと来てもらおうか」

え・・・なんでチンピラこんなのが出てくるの・・・？

27話

ドンッ

「キャッ！」

「痛っ！」

「あうっ！」

「くっ！」

私がいる部屋に4人の女子・・・いや、1人は男子か・・・が連れてこられました

その人達はFクラスの女子生徒とその妹、そして木下さんの弟です
ここはとあるカラオケボックスの1室・・・私はチンピラにここに連れてこられて、人質として監禁されています。この4人も私と同じ、人質として連れてこられたのでしょうか・・・

「藤堂さん?!なんでここに・・・」

「・・・(シー)」

姫路さんが私を見て驚きの声を上げるが私は何も言わず、声を出さないようにジエスチャーをして・・・

「私はいないと思って・・・」

そう小声でお願いします

理由は簡単、私が敵に捕まってることがバレたらお婆ちゃんにも康太にも迷惑が掛かるから

教頭の目的は何かわからないけど、私を使ってお婆ちゃんに何かを要求するはず・・・学園長の座か、試験召喚システム関係か、それとも単純にお金か・・・可能性としては6:3:99:0:01くらい割合かな？

姫路さん達が誘拐されたのなら、きっとFクラスの人達は助けに来るはず・・・学校外であるここをどうやって突き止めるかはわからないけど・・・そしてその中には、康太もいると思う・・・なら、私は康太の邪魔にしかないから・・・

しかしそれも・・・

「チャイナ4人にチビメイドが1人か・・・コスプレ会場かよ」

チンピラ達が言っ飛ばせば関係ないんですけどね・・・よく考えたらもう私を連れ去ることに成功したというのは教頭の耳に入ってるはず・・・

落ち着いていると思ってましたけど、私も結構パニックになってるようです・・・

「さてどうする？坂本と土屋と・・・吉井だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？」

「待て。土屋や吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すと

まずい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな」

チンピラの会話に聞き耳を立てると、これからの行動についての話の様子……

まずいですね……康太も呼び出すつもりとは……

「坂本って、まさかあの坂本か？」

「ああ。できれば事を構えたくないんだが……」

坂本という名前を聞いてチンピラ達が表情を固くなる……

鳴らしてたって喧嘩だよね……？中学時代……喧嘩……坂本……

まさか中学のとき要注意生徒として情報が回ってきてた他校の生徒……喧嘩ばかりしている坂本という生徒……確か二つ名があつて……悪鬼羅刹とか……ええ？！翔子さんなんて人を彼氏にしているんですか？！

「気持ちはわかるがそうもいかないだろ？依頼は坂本と吉井を動けなくすること、そして……」

チンピラ達の視線が私に集まり……

「……このチビと土屋って奴を学祭中捕まえとくことなんだから……」

はぁ……やっぱりそうなりますよね……私と康太の役目は明日

のデモンストレーション・・・その邪魔なら学祭中の解放は無理ですよね・・・というか解放する気あるのかな・・・？

「アンタいったい何者なのよ・・・」

「ただ、学園長の親族っただけですよ・・・」

「そういえば学園長の苗字も藤堂じゃったの」

「道理で頭がいいわけね・・・」

それで納得されるのは、こちらの納得がいかないんですが・・・それに静かにしてないと・・・

「うつせえぞ！黙ってる！」

ホラ怒った・・・

「お、お姉ちゃん・・・」

チャイナ服を着た葉月ちゃんがチンピラに囲まれてて、不安そうな声を上げます

「アンタ達！いい加減葉月を離しなさいよ！」

ええゝあなた、妹を人質にされてるのに反抗するの・・・？

「お姉ちゃん、だつてさ！かわいいー！」

『ギャはははは！』

ああ、よかった・・・下手に怒って暴力でも振るわれたらどうしようかと思いましたよ・・・

「あまり相手を刺激しないでくださいよ」

「だって・・・」

「あなたじゃなくて葉月ちゃんが怪我するかもしれないんですからねっ」

「そ、そうね・・・」

私が小声で注意をします

つとそのとき・・・

ガチャ

「・・・灰皿をお取り替え致します」

「おう。で、このオネーチャン達どうする？ヤっちゃっていいの？」

康太・・・え？なんで・・・まさか助けに？でももうちょっと変装とかしようよ・・・

っていうか、なんでチンピラ達は気付かないわけ？まさか康太の顔を知らないから気付けないの？

にしても康太はもう鼻声・・・やっぱり私のことはもう気付いてるね・・・

「だったら俺はこの巨乳チャンがいいなー！」

「ズリーだったら俺2番ねー!!」

「あ、じゃあ俺はメイドにご奉仕してもらおうかな」

ゴトンッ

「・・・失礼しました」

チンピラ達の話が下品な内容になり、私のことが出たとき、康太が空の灰皿を落としました

「あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私達を帰らせてください！」

「だってさーどうする？」

「それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？」

ですよねーそれで帰してもらえるなら、最初から捕まえてないよね・
・

だから変に刺激しないでって言うてるのに・・・

「やつ！さ、触らないで・・・」

「ちょっと、やめなさいよ！」

チンピラの1人が姫路さんの腕を掴み、姫路さんは嫌がって抵抗し、

葉月ちゃんのお姉さんが食って掛かって・・・

「あーもう、うつせエ女だな!」

ドンッ

「きやあっ!」

ガッシャーン・・・

チンピラに突き飛ばされ、テーブルを巻き込んで床に倒れました

ガチャ

「おじやましてす!」

「よ、吉井君?」

「アキ・・・」

音が外まで聞こえたのか、吉井君が突入してきました・・・康太が来てるからやつぱり近くにはいたんですね・・・

「ハア?お前誰よ?」

いや、だからなんで相手の顔を知らないで呼び出そうとして・・・それじゃ本人かわからないじゃないですか・・・

「それでは、失礼して・・・死にくされやああっ!」

「ほごあああつ！」

吉井君が相手の股間を蹴り上げて1人を倒しました・・・
うわぁ・・・男なのにそれやるんだ・・・

「てつ、てめえ！ヤスオに何しやる！」

「イイツシャアアー！」

「ぐぶああつ！」

吉井君は殴られながらも相手の頭を蹴りを入れました・・・これで
2人

「テメエら、よくも美波に手をあげてくれたな！全員ブチ殺してやる！」

突き飛ばされた生徒は美波さんというのですか・・・随分と想われ
てますね

でもやっぱり1人じゃ・・・

「コイツ、吉井って野郎だ！」

「どうしてここが?!」

「とにかく来ているのなら丁度いい！ぶち殺せ！」

ああ・・・やっぱり囲まれてしまいました・・・

「たった1人で調子くれてんじゃんええぞ！」

「舐めてんのか！」

そして殴られて・・・姫路さん達はその音を聞いて震えています

「やれやれ・・・このアホが。少しは頭を使って行動しろってーのっ！」

「げぶっ！」

そこにやつと、翔子さんの彼氏登場・・・そういえばAクラスの人達はいなくなつた私のことを怒ってるでしょうね・・・どうしましよう・・・？

「雄二っ！！！」

「貸しイチだからな？」

「で、出たぞ！坂本だ！」

「坂本まで来ていたのか！」

姿を見ただけで怯え始めるとは・・・中学時代はいつたいどれだけ喧嘩をしてたのでしょうか・・・

しかしそのとき・・・

「坂本よお。このお嬢ちゃんがどうなってもいいのかア？」

チンピラの1人が葉月ちゃんを盾にして大人しくするように言いました

「大人しくしているよ？さもないと、ヒデエ傷を・・・」

「・・・負うのはお前」

ドゴッ

「あがあっ！」

康太が灰皿でその男の頭を殴り、葉月ちゃんを人質にしていた男が白目を剥いて倒れます・・・死んでないよね？

なんて私がボーっと見ていると・・・

「人質はまだいるんだよ！！」

チャキ・・・

「なっ?!」

今度は私を盾にして、しかも刃物まで出してきました・・・

今度は葉月ちゃんのように不意打ちで助けられない・・・

え・・・？私死ぬの・・・？

28話

え．．．？私死ぬの．．．？

そう思った瞬間．．．

ゴッ

「あがぁ！」

私に刃物を向けてた男の頭に何か硬いものが当たった音がし、そして男が吹き飛びました．．．

ゴロン．．．

床に落ちた物を見ると．．．灰皿、しかもさっき葉月ちゃんを捕まえてた男を殴り倒したときに使った物と同じもので．．．つまり．．．

「康太．．．？」

「．．．怪我は？」

「え、あ、無いけど．．．」

物を投げた後の体勢の康太．．．

「おいおい．．．死んでないよな．．．あれ」

坂本君は吹き飛んだ男を見て思わずその声を洩らします・・・意識は無いみたいだけど呼吸はあって、でも頭から血を流していて・・・今生きてても少ししたら死ぬとかないよね？

「ぐっ・・・テメエよくも！」

その光景に他のチンピラが敵を討とうと康太に向かいだし・・・

「ハッ！お前ら・・・そんなことしてる余裕があんのか！」

それを見てすぐ喧嘩モードに意識を戻す坂本君・・・

「お、お姉ちゃん！お姉ちゃん！」

「葉月っ！よかった・・・怖かったよね・・・？」

解放された瞬間に今までの光景を見せられ、呆然としていた葉月ちゃんが一瞬返ってお姉さんに駆け寄って、お姉さんに抱きしめられました

ああ・・・よかった・・・私のせいであんな小さな子に怪我を負わせないですんで・・・

「吉井君っ！」

それを見ていた姫路さんが腕を広げて駆け寄っていき・・・

「姫路さんっ！」

吉井君も腕を広げて受け入れ準備オーケ・・・あっ！

「吉井い！ヤスオをよくも！」

「ぐぶあっ！」

受け入れたのはチンピラのパンチでした・・・

「・・・！！！」

「な、なんだコイツ？血の涙流してるぞ・・・？」

やってはいけないうちをしまったからですよ・・・

「姫路さん、ちょっと待ってて！コイツをシバき倒した後でもう一度・・・」

「お前ら！先に教室に戻っている！」

「雄二！キサマまで僕の邪魔をするのか！」

「それにしても丁度いいストレス発散の相手ができたな！！生まれきたことを後悔させてやるぜえっ！！！」

うわぁ・・・色々ときれちゃってる・・・何がここまで彼を追いつめたんでしょう・・・

ギョッ・・・

・・・って

「康太は何をしてるのかな？ねえ？」

「・・・ここはそういう空気だろ」

いや、確かにそうだけどね・・・抱きしめるだけならね・・・

サスサス・・・

「へえ・・・これが私のお尻をさする空気なんだ・・・」

「・・・つい・・・ん？」

私の非難の言葉に康太が返そうとして、何かに気付くように目をパチクリしています

「何？どうしたの？まだ何か言うことがあるの？」

「・・・ちよつと待て」

そう言つて康太が鼻の詰め物を・・・って

「今それ外したら鼻血が噴出・・・す？」

あれ？出てない？

「・・・治つた・・・？」

「え？でもなんで・・・」

「・・・知らん、でも治つたからには・・・」

ギューっつと抱きしめる力が強くなって・・・

「・・・2度と放さない」

治った理由がわからないと再発したときのことが・・・でも・・・

「うわああああああん!!」

よかった・・・もうこれで私としても、康太を苦しませないですむ・
・

にしてもこんな大泣きしたのっていつぶりだろ・・・やっぱりあの
1件の時以来かな・・・

数時間後・・・学園祭1日目も終わり・・・

「なるほどな・・・どんな関係かと思ったら元恋人かよ・・・しかもあの鼻血の原因を作ったって・・・いったい何をやったらあんな
のができるんだよ・・・」

坂本君が呆れた表情で聞いてきます・・・なにつて・・・ねえ？

そして私がいるのはFクラスの教室

なぜここにいるか、理由は2つ、坂本君がちゃんと事情を聞くため

にお婆ちゃんを呼び出しましたから、私は関係者としてそれに同席する必要があつて・・・

もう1つは・・・

「康太・・・そろそろ・・・」

「イヤ」

康太が私を放してくれない・・・ここにくるまでずっと・・・

Aクラスに無事を知らせにいった時もずっとついてきて・・・かなり変な視線を集めてしまった・・・Aクラスの人達は私がいなくなつても特に問題なく喫茶店を回していて、私はずっとシフトに入つてたから体調を崩したのかと思つていたらしい・・・皆特に怒つてはいませんでした

「ぐぬぬ・・・FFF団の血の盟約を・・・」

「ほつとけ明久。それよりそろそろ来る時間だぞ」

何かドス黒いオーラを滲み出している吉井君、それを喧嘩ですつきりしたのか坂本君が押さえながら言います

「？来るつて、誰が？」

「ババアだ、俺が呼び出した。さつき廊下で会つた時に、話を聞かせろつてな」

「話ねえ・・・ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用

事があるならこっちから行かないと」

「それに人のお婆ちゃんをそんな呼び方しないでください」

全く・・・この学校の人は・・・

「え？藤堂さんのお婆さん？あのババアが？えええええええっ！
！」

「ったく・・・相変わらずうるさいガキ共だね・・・華織、大丈夫だったかい？」

「はい、大丈夫です、怪我もありません」

「そうかい・・・っで？あんたの後ろのはどうしちゃったんだい？」

「さあ・・・？」

鼻血が治って嬉しいのはわかるんだけど、こんなに引っ付かれると・・・ねえ？お尻の辺りに・・・当たってる・・・

「それより、全部話してもらっぞ。本当の目的や、アンタが今打ってる手、敵の頭とかもな」

「やれやれ・・・仕方ないね・・・そっちの2人にはもう教えてるんだがね・・・」

お婆ちゃんが坂本君の質問に答えていきます・・・腕輪のこと、私達が披露する予定の別の新技術、教頭のこと・・・そして今朝の盗聴器のこと・・・

「なるほどな・・・初めから向こうには俺らが学園長側の人間だとバレていたのか・・・」

「そういうことになるね・・・こればかりは伝えなかったアタシの責任だ・・・すまなかったね」

お婆ちゃんが2人に向かって頭を下げます・・・

「あのさ、コレって・・・かなりマズい話じゃない？」

「そうです・・・これは文月学園の存続がかかった話なんですよ。私達はいくまでバックアップで、デモンストレーションをすること是一切公表されてません。だからスポンサーは白金の腕輪を見に来ます。そしてそれが失敗することは資金援助の大幅な減額に繋がります。その責任はお婆ちゃんということになって・・・お婆ちゃん是最悪クビになってしまいます」

「・・・」

私は吉井君にことの重大さを説明しました

吉井君はイマイチよくわからないという表情・・・

「お婆ちゃんが学園からいなくなるということは、この学園から試験召喚システムがなくなること、それはこの学園が試験校である意味もなくなること・・・つまりお婆ちゃんがいなくなれば、この学園は廃校になります」

あの2人組はそれを・・・わかってても関係ないですね・・・3年なら今年度卒業して学園とはおさらばですし・・・困るのは廃校に

なつて来年度以降通うところが無くなる私達1、2年の生徒・・・

「あ、でも。いざとなつたら優勝者に事情を話して回収したら・・・」

「廃校になるという言葉で重大さを理解したようですね」

「残念ながらそうもいかない。決勝戦の相手を知っているか？」

坂本君がポケットに入れていた紙切れを吉井君に投げて渡し、それを見て吉井君は・・・

「常夏コンビ・・・」

そう呟きました・・・どうやらあの紙は召喚大会のトーナメント表が書かれてる紙のようですね

「そうだ。やつらは教頭側の人間・・・喜んで観客の前で暴走を起こすだろうな」

「学園長、質問です」

「なんだい？」

「腕輪の暴走って、総合科目で平均点にいかなければ起こらないんですか？」

「そうさ。1つや2つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起かないよ」

「そうですか。それはよかった」

それを聞くと吉井君と坂本君は帰っていきまし・・・

「っで？アンタらはいつまでそうしてるんだい？」

「・・・俺の気がすむまで」

「そうかい・・・じゃ、アタシは学園長室に戻るよ」

康太の返答にお婆ちゃんは呆れながら教室から出て行きました

28話（後書き）

Q・なぜ康太の鼻血が治ったのか

A・愛の力が奇跡でも起こしたんじゃない？（笑）

また華織を失いたくないって強く思ったら治っちゃった、とでもしておいてください

29話

それからまた数時間・・・現在午後10時くらい

流石に康太も帰りましたが、私はまだ学園にいます・・・

お婆ちゃんが白金の腕輪と私達用の腕輪の最終調整をするために、今日は泊り込みで作業をするためです

ちなみに私達用の腕輪には名前は無く、今回だけのもので今後使う予定は無いです

「お婆ちゃん。コーヒー買ってきました」

「ああ、すまないね」

私は売店の自販機で買ってきた缶コーヒーをお婆ちゃんの近くに置きます・・・

ここは学園長室ではなく、お婆ちゃんが試験召喚システムに関する研究と開発をするために用意された部屋・・・泊り込んで作業ができるように仮眠室も用意されています・・・

私を引き取ってから、お婆ちゃんは遅くなっても必ず家に帰ってきていました・・・ここで休めばもっとゆっくりできる時間が増えたかもしれないのに・・・

「あの・・・お婆ちゃん・・・」

「ん？どうかしたかい？」

「私は、お婆ちゃんの邪魔になってないですか？毎日どんなに遅く
なっても家に帰ってきてくれて・・・ここを使えば休める時間も多
く取れたのでは・・・」

「確かに去年はそうだったね・・・遅くなったときは家に帰らず、
ここで寝てまた仕事に戻ったりもしたよ・・・」

「やっぱり・・・じゃあお婆ちゃんは私のために無理を・・・」

「でもね、華織が夕食を作って待つてくれるなら、多少無理して帰
るのも悪くないと思ったよ・・・もう何年も、アタシには帰りを待
つてくれる人なんていなかったからね・・・アタシだってただの人
で、女さね・・・結婚に興味が無かったわけじゃない。でもそれ以
上に研究に向き合っていたくて・・・だから諦めた・・・でも誰も
いない家に帰るといふのは、この歳になっても多少来るものがあっ
てね」

「お婆ちゃん・・・」

「アタシも妖怪だ何だって言われてるが、実際あと何年生きれるか
もわからない・・・なら残りの人生を少し誰かのために使うのも、
なんてね・・・結局華織を引き取ったのはアタシの自己満足とエゴ
だよ、邪魔になってるなんて思っていないさね」

「そう言ってお婆ちゃんはコーヒーを一口飲んでまた作業に戻りました」

side：学園長

「アタシは今日は徹夜で作業するから、華織は仮眠室で適当に休みな」

「はい・・・」

アタシの言葉を受けて、華織が仮眠室に入って行く・・・今日は慣れないことをやってたからか、疲労が随分と溜まってるようさね・

あの子を引き取ってもうすぐ3ヶ月か・・・自分が随分と嫌な人間だと思い知らされたよ・・・親も子に育てられるとはよく言ったもんさね・・・

あの子を引き取ることにして、編入させて・・・あの子の制服はなかなかの進学校のものだったし、ひよっとしたらうちの学園に入れられれば、進路次第ではいい宣伝材料にできるんじゃないか、と初めは思ってたりもした・・・優秀な生徒を有名な大学に進学させること、そしてそれにより多くの優秀な新入生の獲得すること・・・私立の学校とは究極的に言えばその繰り返しだからね・・・

結局アタシはあの子・・・華織を利用してるのさ・・・今回がいい例さね

腕輪のことなんか初めから不具合を発表して賞品から外せばあの子に危険は及ばなかった・・・

代わりの技術には不具合は無かったんだ・・・そっただけで充分スポンサーを納得させられる自信もあったし・・・

白金の腕輪にこだわったのは・・・アタシの技術者としての意地でしかない

やっぱり技術者のアタシが学園長は、向いてなかったのかもしいない

でも今となつては向いていなくてもやるしかないんだがね・・・華織の居場所を守るために・・・

担任の高橋から聞いたがあの子はクラスの生徒にだいぶ信頼されてるらしい・・・ただ、時間があれば自習をしているという点で人付き合いに難ありのようだが・・・でもそれも、学力至上主義をとっているここじゃなかったら奇異の目で見られてるだろうね・・・あの子、前の学校で友達いなかったようだし・・・だから今更他の学校に転校なんてさせれるわけが無い・・・

それに・・・土屋康太という生徒・・・昔の恋人とか言つてたが・・・あんなお互い想い合つててなんで別れたんだか・・・まあアタシは色恋については捨てた身だから何も言えんがね・・・

ずっとあの子の傍にいて、あの子を支えてくれる存在に、なつてくれやしないもんかね・・・

でも問題はあの子のほう、なんだよねえ・・・

side：康太

なぜ・・・いきなりこの体質は治ったのだろう・・・

あのととき、刃物を向けられた華織を見て・・・気付けば思いつきり灰皿を投げつけていた・・・

体が勝手に反応した、とでもいうか・・・今まで散々華織のことを拒絶していたこの体が・・・

まあいい・・・治ったからには俺の体も、精神同様に華織無しでは生きていけないようにしてやる・・・

そうすればもう2度とあの体質が戻ることは無いだろう・・・

とりあえず明日のデモンストレーションのときに、軽く行動を起こすか・・・

29話（後書き）

読者様の中に、精神科医の方はいらっしゃいませんか？

康太が中二病を発症しました

至急、治療をお願いします

30話

次の日、早朝・・・学園長室

「とりあえず華織達の使う腕輪の最終調整はできたさね、アタシはこれから少し仮眠をとるから土屋にこれを渡しといてくれ」

「はい、わかりました」

お婆ちゃんが私達用の腕輪を渡して、また作業部屋に戻っていきました

渡された腕輪は、白金の腕輪と違って、装飾が全く無く、ダイヤルのようなものがあつて、OFF・0・5・1・2・4の数字が打つてあります・・・なんでしょう？

2-F教室前

あれ？そういえば昨日は大丈夫でしたけど、今日はもう元に戻ってました、なんてことはないですよね・・・？

どうしよう・・・もしそうなら、私が急に会いに行くのはまずいのは・・・事前に連絡をつて私携帯持っていないし・・・康太の番号も知らないし・・・うーん、困りました・・・

なんて悩んでいると・・・

ギュツ・・・

「ヒヤッ?!」

不意に背後から抱きしめられて、私はビクリして声を上げます・

・

「・・・珍しいな、華織から会いにくるなんて」

私の頭上から声が聞こえます・・・それはもちろん康太ので・・・
しかもいつもの鼻声じゃない・・・よかった

「鼻血は出てないの？」

「・・・当たり前」

一応の問いかけに康太は答えながら・・・

ムニユ・・・

私の胸に自分の腕を当ててきます・・・さり気なくやればバレ無い
とも思ってたのかな・・・？

「腕、当たってたんだけど？」

「・・・ホントに大丈夫が確認・・・まあ小さいから関係ないか・・・」

言わないからね・・・あの時と同じことなんて・・・

「・・・で、用事は？」

「人の胸触つとしてその反応って・・・まあいいよ。はいこれ、お婆ちゃんから、今日のアレで使うやつ」

私は抱きつかれたまま康太の分の腕輪を渡します

「・・・ああ・・・このダイヤルは？」

「わからない、デモのときに説明が入ると思うし、無くならそのときに聞けばいいよ」

やっぱり康太もダイヤルが気になるようですね・・・

「・・・そうだな・・・じゃあ・・・」

「うん、じゃあね・・・私もそろそろクラスに行かないと・・・」

「・・・わかった」

康太も役目があるので、今回はすんなり放してくれました・・・
ざ、残念だなんて思っていないですよ？ホントだよ？

「決勝戦のときに、こっちにくる？設備使って中継を流すから、一緒に・・・」

これもデモンストレーションの前の待ち合わせのついでですからね

午後1時・・・Aクラス教室

『さてみなさま。長らくお待たせ致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

プラズマディスプレイに映る召喚大会の決勝戦の中継映像、ちょうどこれから始まるようです

何か一騒動くらいあるかと警戒していましたが、昨日の色々な騒動で警備が強化されたようで、特に何も起こりませんでした

「あ、康太きたね。ゴメン今席空いてないんだ・・・立ち見でもいい？」

「・・・ああ、こうするから問題ない」

そう言っただけで私を後ろから抱きしめる康太・・・

「店員へのお触りは禁止なんですけど・・・」

「・・・誰も見てないから問題なし」

はあ・・・確かに皆決勝戦の中継に目が行ってるからこっちに意識は向いてないし、ディスプレイが見易いように教室内を少し暗めにしてるから見えないだろうけど・・・

『それでは出場選手の入場です！まずAブロックより勝ち上がって

きました・・・」

アナウンスの人が入場口のほうを指し・・・

『2年Fクラス所属、坂本雄二君と、同じくFクラス所属、吉井明久君です！みなさま拍手でお迎え下さい！』

Fクラスの2人が紹介され、それに合わせて入場してきました

『なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝に進んだのは、2年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！これはFクラスが最下級であるという認識を、改める必要があるかもしれません！』

翔子さんと木下さんの組はこの2人に負けたらしいけど・・・どうやって勝ったのかな？ガチンコで勝てるとは思えないんですけど・・・

「ねえ康太、あの2人はどうやって、準決勝を勝ったの？」

「・・・雄二を生贄に霧島を戦意喪失させた。あとは明久の代わりにバレないように俺が召喚して一瞬で勝負を決めた」

「なにそれ？卑怯すぎるでしょ・・・」

「・・・勝てば官軍」

準決勝って一般公開されてたよね・・・よくそんなのできるね・・・

『そして対する選手は3年Aクラス所属・夏川俊平君と同じくAクラスの常村勇作君です』

もう1組のペアが紹介され、あのガラの悪い2人組が出てきました
『出場選手が少ない3年生ですが、それでもきっちり決勝戦に食い
込んできました。Aクラスということでこの勝負、面白い対決にな
りそうですね』

2組が向かい合って・・・音声は拾えてないけど口が動いてて・・・
何か話してますね

『それでは、ルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは・・・』

ルールの説明に入り、お客の目が一旦ディスプレイから離れます・
・ここにいるお客は学園の生徒が多いです。一般来場客は会場で見
ていて、自分のクラスの出し物のシフトの関係などで会場まで行け
なかったり、会場が収容人数に達してしまっただけで入れなかったり・
それでも決勝が見たい人がうちのクラスに見に来ています。3 - A
も設備的には見れないわけではないですが、3 - Aはお化け屋敷で
中継を流すつもりは無いのでしょうか・・・

さてそろそろ説明も終わりますね・・・

ハム・・・

「んっ・・・」

耳に凄いい違和感を感じ、私は思わず声が出てしまっ・・・

「康太何を・・・」

「・・・なんか退屈になったから、声出すとバレル」

ちよ・・・耳なんて舐めないでよ・・・

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！』

「ホラ、始まったから・・・」

「・・・そうだな・・・」

そして何事も無かったようにディスプレイを見だす康太・・・私は心臓が凄いドキドキしてて・・・

『サモン！』

「・・・いいやもう・・・あいつらは勝つだろうし・・・今は・・・

」

「え？ちよつと・・・」

ハム・・・

康太が決勝そつちのけで私の耳を弄りだし・・・

「・・・こつちのほうに興味ある」

・ 結局決勝はFクラスの2人が勝ったくらいにしか覚えていません・・・

30話（後書き）

読者様の中に警察官はいらっしゃいませんか？

康太の変態度がレッドラインを越えた気がします

至急、逮捕をお願いします

31話

召喚大会の表彰式も終わり、いよいよデモンストレーション・・・

《それでは、召喚大会優勝者のお2人に、新技術の披露をしてもらいましょう》

アナウンスの進行で優勝者の2・Fの2人・・・坂本君と吉井君がスタンバイします

《まず代理召喚型と呼ばれる、本来教員にしかできない召喚フィールドの形成を生徒にもできるようにする腕輪から行いましょう。それではお願いします》

私と康太はそれを入場口に待機した状態で見ています

お婆ちゃんが代理召喚型を使う坂本君に使用方法などを説明して、お婆ちゃんが離れ、坂本君が腕を上げて起動ワードを言うと、召喚フィールドが形成された・・・起動ワードは距離が離れてたし、会場も少しザワザワとしていたので聞き取れませんでしたけど、そこまで長い単語じゃないのはわかりました

《次に、同時召喚型と呼ばれる2体の召喚獣を同時に操作できるようにする腕輪を・・・》

そして坂本君が展開した召喚フィールドで、吉井君が召喚獣を呼び、腕輪を起動させました

すると点数が半分になってもう1体の召喚獣が出てきました。2体同時操作は流石に難しいようで、少し拙い操作になってしまっ

すが、普通なら同時に操作なんてできるものじゃないですし、吉井君にそれができるのも、観察処分者で召喚獣の扱いに慣れてるからということがあるからで・・・たぶん不具合が無くてもあれを使いこなせるのは吉井君だけだと思いますね・・・

《さらに今回、もう1つ新技術を披露いたします》

あ、もう私達の出番のようですね・・・

《それではデモンストレーターに登場してもらいましょう。どうぞ！》

私と康太が入場してステージ中央に向かって歩く・・・うわぁ・・・やっぱり世界でここにしかない試験召喚システム、そしてその新技術の披露ってだけあってプレスが凄い・・・日本はもちろん海外のプレスまでいます・・・日本語でしかやってないけど大丈夫なのか・・・？

《2学年主席である2年Aクラス代表の藤堂華織さんと、保健体育の2学年最高成績保持者の土屋康太君です》

アナウンスの人が私達の紹介をします・・・こう言えば私と康太がデモンストレーターに選ばれた理由の説明もつきますからね・・・康太が保健体育学年1位でよかったよ・・・

《では披露する新技術について、開発者の藤堂カヲル学園長に説明をしていただきますよう》

そう言ってアナウンスの人がお婆ちゃんにマイクを渡しました

《これから披露する技術は、召喚獣の可能性を広げるものです。現在、召喚獣は全て2足歩行で人の形を取っています。その型を壊すことに私は成功しました》

お婆ちゃんがいつもの話し方じゃない・・・これはプレス向けなのでしょうか・・・

《これにより、召喚獣は人型以外にも、犬や猫などの陸上生物の形をとることができるのです。例えば・・・》

そしてお婆ちゃんが私と康太に合図を出します・・・私と康太は坂本君が展開し続けていたフィールドに入り・・・

「「サモン」」

召喚獣を呼んだ。ちなみにダイヤルは0・5に合わせてあります

『おおーっ!』

現れた狼型の召喚獣に会場が驚きの声を上げて、プレスが一斉に写真を撮り始めました

《このように狼の姿をとることができます。さらに特殊なもので言えば象などの大型動物もできます》

象なんて出せたとしても動かせるのかな・・・?特に鼻とか・・・

《それではデモンストレーションとして対戦を行いたいと思います》

そう言うとお婆ちゃんはマイクをアナウンスの人に返し・・・

「坂本、召喚フィールドを消しな。アタシがフィールドを展開し直すから」

「ババアが？ああ、わかった・・・停止」

お婆ちゃんが坂本君に指示を出し、坂本君が首を傾げながらも召喚フィールドを消しました

「華織に土屋、ダイヤルを4に合わせるときな」

「はい」

「・・・（コクン）」

私達に一言指示を出し・・・そして・・・

「学園長権限により科目保健体育でフィールド展開」

お婆ちゃんがそう言って召喚フィールドを形成しました

・・・って、え？

「何だこの大きさっ？！通常の10倍くらいあるじゃねえか？！」

お婆ちゃんが展開した召喚フィールドは通常の召喚フィールドの10メートル四方をかなり上回り、ステージのほぼ全域を囲っています・・・

「ざっと30メートル四方ってとこさね。学園長権限でのフィール

ド形成は最大で50メートル四方まで展開可能だよ。どうだい、驚いたかい？これからは気安くババアなんて呼ぶんじゃないよ」

「でかいフィールドは展開できても心はちっせえな・・・」

「なんか言っただかい？」

「いんや何も・・・」

31話（後書き）

アニメってさ・・・

召喚フィールドが大体10メートル四方だっというのが綺麗にスル
ーされてるよね？

32話

「じゃあ頼むよ」

「はい」

「・・・（コクン）」

「「サモン」」

Aクラス	藤堂華織	保健体育	403
VS			
Fクラス	土屋康太	保健体育	578

私と康太が召喚獣を呼び出して、会場内にあるディスプレイに点数が表示されます

そして・・・

『おおーっ！』

出てきた召喚獣を見て再び歓声が上がりました

私と康太が呼び出した狼の召喚獣が、さっきまでの召喚獣より遥かに大きい・・・

目測ですが体長が4〜5メートルくらい、体高は2メートルを超えてるんじゃないでしょうか・・・

《こ、これは先ほどの状態よりはるかに大きな召喚獣ですが、これも新技術なのでしょうか？》

アナウンスの人がお婆ちゃんにそう尋ね、マイクを向けます

《いえ、この召喚獣の大きさを変化させる技術自体は開発当初から出来上がっていました。今までは学園の校舎内での使用に用途が限定されていまして使用しませんが、今回場所が確保できましたので、動物型召喚獣と合わせて披露をと思った次第です》

このダイヤルは召喚獣の大きさを変えるためのものですか・・・確かに開発当初から召喚獣がこの大きさだと研究し辛いでしょうね・・・それにここまで大きいと学園長権限を使ってフィールドを形成しないと10メートル四方だと狭くて対戦は難しいですね・・・

「ちよつと大きすぎて怖いような・・・」

「・・・華織」

「ん、何？」

私が召喚獣に目を奪われていると、康太が声をかけてきました

「・・・また、あの時と同じ賭けをやる」

「あの時？」

「・・・試召戦争のときのあれ」

勝った人が負けた人に命令できる権利の賭けですか・・・

「やだ・・・だって康太のほう点数上だし、1回負けてるし・・・」

「

「・・・なら華織が勝つたら3、4個くらいでもいい」

操作技術はほぼ同じくらいだと思うから、絶対勝てるとは言えないのに・・・そこまでするに私にやってほしいことがあるのかな・・・ものによると、素直に言ったらやってあげてもいいのに・・・

「わかった、いいよ」

「話はまとまったようだね。ならそろそろ始めてくれ」

康太との話しが終わり、お婆ちゃんが声をかけてきました
観客やプレスの人はまだ召喚獣に釘付けのようです

「はい」

「・・・（コクン）」

私達はフィールドの端と端に陣取って、大型の召喚獣がよく見えるようにする・・・そして召喚獣を向かい合わせるように位置取らせ・・・

《それでは、新技術公開のエキシビジョンマッチ・・・試合開始！》

アナウンスの開始の合図で2体の召喚獣が一気に距離を詰めます

この動物型は、長所としては人型を遥かに上回る機動力がある点、短所は装備が設定できない点、となると戦う方法はその動物の本来の武器での攻撃で・・・お互いがお互いの首に噛み付こうとしてい

ます

その光景は、人型の戦争とは違う自然界の生存競争そのもので、まさに壮絶の一言

小技のように前足で叩いてバランスを崩したり、点数を削って焦らせるために前爪で引つかいたり・・・そして隙がきたら飛び掛って首を狙う・・・そんな戦い方、もちろん・・・

「腕輪起動！」

召喚獣の腕輪も使います

私の召喚獣が消え、距離をとってから康太の召喚獣に横から体当たりをし、吹き飛んだ康太の召喚獣に乗りかかり、首を狙う・・・

もちろん康太の腕輪を使ってそれに対抗します・・・この会場だと声が聞こえなくて起動したのがわからないのが嫌だね・・・

康太の召喚獣が乗りかかった私の召喚獣を腕輪で加速した後ろ足で蹴り飛ばし・・・

地面に落ちる前に飛び掛られて、首に喰らい付かれました

Aクラス 藤堂華織 保健体育 157

VS

Fクラス 土屋康太 保健体育 516

「くっ・・・でもまだ外せば・・・」

ここから牙を深く喰い込まされて致命傷になる前に抜け出せば・・・

・

しかし・・・

「え、ちょ・・・」

康太の召喚獣は腕輪の能力を止めないで、私の召喚獣を噛んで持ち上げたまま走り出します・・・腕輪でさらに機動力を上げてるからこそできることだね・・・

当然そんな状態では抜け出せるわけも無く・・・

Aクラス 藤堂華織 保健体育 1 5 7 1 2 7 9 7

VS

Fクラス 土屋康太 保健体育 5 1 6 5 1 5 5 1 4

私の召喚獣の点数がドンドン減っていきます・・・ああ、どうしよう・・・

その後、私も腕輪で、後ろ足を高速で蹴り出したりしましたが抜け出すことができず・・・

《勝者、土屋康太君》

私は負けました・・・

「・・・じゃあ今日の一般公開時間が終わって、片付けが終わったあたり・・・4時くらいか、またここで・・・」

「うん・・・わかった」

さて何を命令されるのやら・・・色々と覚悟しとかないと・・・

33話

約1時間後・・・午後3時

《ただ今の時刻をもって、清涼祭の一般公開は終了します。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください》

学園内にそう放送が掛かり、一般来場客が帰り始めます

「はあく疲れたわ・・・でも結構楽しかったわね」

「だね・・・昨日の吉井君の女装とか結構凄かったよね」

「そうね、あれはもうずっとあの格好でいいんじゃないかっていうくらい・・・というかずっとあの格好でいてほし・・・いや、なんでもないわ」

木下さん・・・本音がただ洩れてますよ・・・

「えっと、分担は以前決めた通りで、男子の皆さんが椅子やテーブル等の片付け、女子はゴミの分別と掃除、そして衣装の片付けをお願いします」

『はい』

クラスメイトの皆がテキパキと作業をこなしていきます・・・うん、これなら30分くらいで終わりそうですね・・・

午後3時50分・・・召喚大会会場

Aクラスの撤収作業も終わり、私は一足先に約束の場所に来て、康太が来るのを待っています

さつきまで、この広い会場に満員のお客がいて、召喚大会の決勝戦や私と康太がエキシビジョンマッチをしていたとは思えないくらいです・・・

なんて会場を見渡していると・・・

「・・・悪い遅くなった」

後ろからギュッと抱きしめられる感覚とともに康太の声が・・・

「うっん、まだ4時にはなっていないよ・・・ホラ、まだ53分」

そう言って私は腕時計を見せる・・・携帯を持っていない私は時間がわかるようにほぼいつも腕時計を身に着けている。10000円くらいで買えて、ストップウォッチとアラーム、あと5気圧防水が付いたデジタルのスポーツウォッチ・・・メイド服のときは流石に合わないから外していましたが・・・

「・・・遅れてきたことには変わらない」

「まあいいよ、気にしないで・・・それで、私への命令はなに？」

あれから少し考えたけど、康太が言うことって1つしかないよね・

「・・・華織の人生を、俺にください・・・」

・・・あれ？

「え？そこは写真をとかじゃないの？」

「・・・そんな回りくどい言い回しは止めた」

ええー・・・

「・・・今度は拒否権は無いからな。体質も治ったし・・・」

「・・・あのさ、1つ聞いていい？」

「・・・？・・・ああ・・・」

「どうして、私なの？私ってそんない女ひとじゃないよ・・・自分勝手に、1回は康太の前から逃げ出したんだよ？」

普通ならもう関わりたくないって思われても仕方ないのに・・・

「・・・好き、いや愛してるから・・・それで理由は充分だろ・・・自分勝手？逃げ出した？だからなんだ、そんなので諦められるならとつくの昔に諦めがついてる・・・」

この3年・・・離れたことで寂しかったのは私だけじゃなかった・・・ということですか・・・

再会してから積極的になつて私に色々してきたのは、また私が離れていつてそんな寂しい思いをしたくないから・・・？

「ん・・・わかった。でももう1つ質問ができたな・・・」

そう言つて私は康太の腕から抜け出し、康太と向き合う

「ねえ、康太にとって愛つて何？」

「・・・は？」

私の質問にポカンとする康太・・・

「私はね、愛つて家族に対して抱く感情だと思つんだ・・・ほら家族愛つていうじゃない？」

「・・・ああ・・・」

「だから、康太には愛されて無いつて思つてた・・・前に家族じゃないつて言つてたし・・・」

「・・・あれは・・・スマン・・・」

私が冗談ばく言つと、康太が本気で気まずそうな顔をして謝ってきました

「いいよ、あくまでこれは私の考え方の上での話だから・・・それで？康太にとつての愛つて？」

「・・・大切に、その人が幸せになつてほしいつて思うこと、かな・

「・・・」

「そう・・・よかった・・・」

「・・・よかった？」

「うん・・・だってその考え方でも、私は康太を愛してるって言えるから・・・あの時から、今もずっとね・・・」

そう言つて、今度は私のほうから康太に抱きつく・・・こんな感じに私から康太に引く付くのもあの時以来・・・

「ねえ康太、ホントに私の人生、もらってくれるの？」

「・・・男に二言は無い」

「なら、私には拒否権が無い・・・なんてね。不幸にした分、しっかり幸せにしてあげるね」

「・・・俺は不幸になったつもりは無いんだが・・・」

康太が苦笑しながら言います

「・・・あと、俺が幸せになるにはお前が幸せになってももらわないとな」

康太が続けてそう言つて、抱き付いてる私を腕を取って自分から引き剥がします

そして、私を少し持ち上げるように抱きしめて・・・

「・・・でも今日のところはこれで充分だな」

そう言つてキスをしてきました。康太からばかりで自分からキスができないのが少し悔しい・・・やっぱり最低150センチは身長が無いとなあ・・・

仕方ないので、康太がしてくる1回1回を大事に・・・記憶に刻み付けるように・・・

数時間後・・・

陽も落ちてそろそろ花火が上がる時間・・・学園祭で打ち上げ花火つて凄いですよね

私と康太は新校舎の屋上でそれを待っています・・・ここには私と康太の2人だけ・・・なぜなら今、屋上には放送機材が置いてあつて、放送部以外の生徒は立ち入り禁止・・・それをお婆ちゃんが特別に許可してくれたので、私達はここにいます

まあ2人きりで誰にも見られる心配が無いということは・・・

チュ・・・クチュ・・・

軽いキスのつもりが段々と激しくなつて・・・

「そ、そろそろ・・・これ以上は止まらなくなりそう・・・」

「・・・その割には名残惜しそうな表情してる」

「もう・・・意地悪・・・」

結局やめることができず、私達は花火を見ながらも、花火のように
熱く激しくキスをしてました

34話

5月の最終土曜日・・・

今日は確か如月グランドパークのプレオープン日だったはず・・・

さて坂本君が翔子さんに行ったのか・・・それとも吉井君が誰かに行ったのか・・・

私？私は行けませんよ・・・

いくら康太が行こうと誘ったって私にはもう予定が入ってますから・・・

今日は・・・

「はあ、なんでこう、死んだ人間を何回も弔わにやなんのかね・・・」

「仕方ないですよ。そういうものなんですから・・・」

お父さんの百ヶ日の法要を行う日でした。今は法要も終わってお婆ちゃんと軽くお昼を食べています

百ヶ日も平日だったのですが都合が合わないから土曜に繰り上がって行いました

なので私は4月のときと同じように金曜日の午後から早退してこっ
ちに来ています

「さて、そんな墓に花でも供えたら帰ろつかね」

そう言ってお婆ちゃんが立ち上がります

「おっと・・・ちよつと携帯を忘れてきたようさね・・・先に行つ
といてくれ、報告したいこととかあるだろ」

墓地の駐車場に着いたとき、お婆ちゃんが胸ポケットを探りながら
私にそう言いました

「はい、わかりました・・・」

墓前に報告って科学者が言つと変ですね

「ん？どうかしたかい？」

「え？どう、とは？」

「何か可笑しそうな顔をしてたよ」

表情に出てしまいましたか・・・

「えっと、お婆ちゃんは科学者だから墓前に報告とか意味ない、み

たいな感じかと・・・」

「そんなことかい・・・そうさね・・・確かに霊とか死者の魂が、とか言うのはバカらしく思ってるところもあるが・・・」

あるが？

「科学的に存在すると証明されて無いだけで、それらは否定されるわけじゃないさね。それにアタシが開発した試験召喚システムは多少なりと妖怪やお化けなんかのオカルトが混ざってんだ、あつたって不思議じゃないさね」

「あつたらあつたで怖いんですがね・・・」

「まああつてもなくても、こういうのはする側の気持ちが一番なんだよ。墓前に報告して華織が父親に聞いてもらえたって感じるのがね・・・さ、行つといで」

えっ・・・そんなこと言つたあとで一人で墓地に送り出すんですか・・・まあ昼間だし明るいから怖くは無いんですけど・・・

そんなこんなでお父さんのお墓に手を合わせて、色々と報告を・・・

前に来たのは、^{四十九日}七七日の法要のあと・・・あれから色々ありました・・・

試召戦争で康太と再会して・・・風邪引いたときに康太がお見舞い？に来てくれて・・・学園祭で新技術の披露のために康太と一緒に練習して・・・って

「全部康太関係じゃん！」

墓地であることを忘れて自分に突っ込みを入れてしまいました・・・

「うーん・・・もつと何か無いの？私・・・」

・・・無いね。いい事もわるい事も・・・全部康太が関係してます・・・何かあるたびに康太は私の近くにいて・・・私を支えてくれたり守ってくれたり・・・

ホント、私にはもったいないくらいの人・・・

「今度来るときは、もうちょっと他のことも報告できるようにしないと・・・」

仕方なく報告を終えて立ち上がります・・・そろそろお婆ちゃんも戻ってきましたでしょうか・・・

花とかはまだお婆ちゃんの車に載せたままで、お供えてしてないからね

お婆ちゃんを迎えに駐車場に行こうとすると・・・

「え？」

「・・・よっ」

いやいや・・・よっ、じゃないでしょ・・・康太・・・

「なんで・・・」

「・・・学園長に頼んで乗せてきてもらった。夜通し運転し続けて・・・あの人がすごすぎる・・・」

うん、私もそれは思ったよ・・・たぶん朝早くこっちに着いて康太を降ろして私と合流、さっきの携帯を取りに行くと言って康太を拾ってここまで連れてきた、のかな・・・

ってそうじゃなくて・・・

「どうしてここに来たの・・・？」

「・・・華織の親に挨拶をするため」

そう言つて康太はお婆ちゃんから預かってきたお供え用の花を挿し始めました

「お婆ちゃんは？」

「・・・車で仮眠取ってる」

「そう・・・」

金曜日の仕事を終わらせてから、徹夜でここまで車で来て・・・少し戻るのを遅くしようかな・・・

「・・・こんな感じか？」

「うん、いいと思う」

花を挿し終え、康太がお墓に向かって手を合わせて・・・

そして短く一言・・・

「・・・華織のこと、必ず幸せにします」

結構恥ずかしいもんだね・・・本人に直接言ったらもつと恥ずかしかったのかな・・・

「・・・？どうかしたか？」

康太が私の顔を見て首を傾げています・・・

「ううん、ちょっとね・・・もしお父さんが生きてて、テレビであるような、娘さんをくだいっていうあれを康太に言われたら、どいう反応をしたかなって・・・」

「・・・さあな・・・俺は会ったことがないからな・・・」

そうだよね・・・

「もしお父さんが反対したら・・・康太はどうする？」

「・・・そうだな・・・」

まさか、お父さん達のように反対を押し切って籍を入れたりとかするのかな・・・

「……認めてもらえるまでお願いする、かな……何年かかっても……」

「反対を押し切ったりはしないの？」

「……それで親との仲が悪くなれば結局華織は幸せになれないだろ……だからがんばって認めてもらう」

よかった……もしかしたら、私もお父さん達のような夫婦になって、いつか離婚とかしてしまうのかなって思ったけど……ひとまず安心かな……

「ありがと、康太」

「?……何か言ったか？」

私の言葉に再度首を傾げる康太……

「うっん、なにも……」

大丈夫、康太となら絶対不幸にはならない……だってもう不幸は乗り越えたからね

これからは幸せ一直戦……だといいなあ

にしても、切ろうとしても絶対に切れない絆って、あるんだね……

これが男女なら俗に言う、運命の赤い糸ってものになるのかな……？

あとがき

この度は、『その少女、につき』をお読みいただき、誠にありがとうございます

正直まだまだ続けたかったんですけど・・・PCがいつ逝くかわからない状況なので泣く泣く完結に・・・

なんか偶数作目は納得できない終わり方をしてしまっジンクスができつつありますね・・・

今回のテーマは『復縁』で、おまけで原作ストーリーを大きく壊してはいけないという制限を入れました

あとは、康太の鼻血体質はなぜできたのかとか、2-Aはなぜメイド喫茶をすることになったのか等、小さいことに対する理由付けですね。康太の鼻血体質については9・5巻で出てきた設定で余計混乱することになりましたが・・・

もし、続きを書けるようになったら、第2章として新しいテーマで書こうと思います

そのテーマは・・・『原作に沿いながらどれだけ康太と華織をイチヤツかせられるか』です

自分としてはもうシリアスはコリゴリです（笑）

だからシリアス無しのイチヤイチャオンリーでいきます

でもこのテーマだと終わりが見えないんですよ・・・どこで完結にすればいいかわからない

それに他にも色々書きたいものが出てきて・・・PCに不安が出てきた途端に案が沸いて出てくるって・・・

とりあえず・・・バカテスは今作の続きと今まで上げた4作のIFもの5本（優紀子1本、奏1本、心2本、華織1本）と新作2本の合わせて8本、ロウきゅーぶ！で2本、リリカルなのはstsで2本浮かんでいます。あと小説ではないですが、バカテスのキャラの家族構成について考えてみる作品とかも・・・

でも今は長いものを書く気は起きないんですよ・・・PCも不安だし、いつ消されるかわからないから

歌詞の転載についての自分の見解は活動報告に上げてるとおりです。簡単に言うなら・・・

権利者に文句言われたらどんな文章でもアウト

こんなの納得できるわけが無い。ガイドラインの内容だって大まか過ぎて引つかからない方法が無いし。おまけに後から書き変えることもあるから信用もできない・・・なので従う気はありません・・・あれに従うということはもう文章書かないって言ってるようなものだし・・・

でもPCがダメだから今後作品上げるかわからないけど・・・書きたい設定で書きたいシーンだけを書くような短編集ならやるかも・・・書きたいシーンだけを書くって卑怯な気もするけど・・・

では、次作はあるかないか、あつたとしてもいつになるかわかりませんが・・・あつたなら、そこで会いましょう

あとがき（後書き）

・ 最近バカテスでエッチな展開になる作品が増えてないか？と思う・

もしかしてこの作品の影響が・・・え？1日のユニークアクセスが400いくかないかのこの作品にそんな影響力は無い？そうです、自惚れてました・・・

でも一応今浮かんでいるものはそういう展開はできるだけ無い方向で考えています・・・できるだけ、ね・・・完全に無しにはできないね。特に心のIFものや華織の続編とIFものは・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7114u/>

その少女、 につき

2011年8月21日03時50分発行